



宇宙地球環境研究所

Institute for Space-Earth Environmental Research

大学院案内

ISFE 宇宙地球環境研究所
Institute for Space-Earth Environmental Research



〒464-8601 名古屋市千種区不老町 研究所共同館 I・II

名古屋大学研究所総務課総務グループ

TEL:052-747-6306/6303 <https://www.isee.nagoya-u.ac.jp/>



理学研究科

理学専攻・物理学領域

工学研究科

電気工学専攻
宇宙電磁環境工学講座

環境学研究科

地球環境科学専攻
地球水循環科学講座
地球史学講座

2025年4月発行



宇宙地球環境研究所における研究

はじめに

このパンフレットは、名古屋大学宇宙地球環境研究所 (Institute for Space-Earth Environmental Research、略称 ISEE) において、大学院での学習・研究を志す皆さんに向けた参考資料です。宇宙地球環境研究所は、地球・太陽・宇宙を相互に影響を及ぼし合う一つのシステムとして捉え、その中で生起する多様な現象のメカニズムや相互関係の解明を通して、地球環境問題の解決と宇宙に広がる人類社会の発展に貢献することを目指して研究を進めています。また、名古屋大学大学院理学研究科、工学研究科、環境学研究科の3研究科の協力講座として、大学院教育を行っています。大学院の学生は、それぞれの研究室に配属され、指導教員のもとで修士論文や博士論文に向けた研究を進めます。

本パンフレットでは、宇宙地球環境研究所の研究室で大学院教育の一環として行われている研究内容を詳しく紹介するとともに、学生生活や大学院入試、卒業後の進路等についても触れています。なお、大学院生の募集と入学試験は、宇宙地球環境研究所ではなく、理学研究科、工学研究科、環境学研究科が実施します。受験を希望する方は、志望する研究室、教員に応じて受験する研究科・専攻が異なることに留意し、対応する研究科のウェブサイト等で入試情報を確認してください。また、受験前に希望する研究室の教員にコンタクトを取り、直接話を聞くことをお勧めします。このパンフレットが、皆さんの進路を決めるための道標となれば幸いです。

太陽が放射する光のエネルギーは地球環境を維持し、私たちの暮らしと生命を支えています。しかし、その過程は非常に複雑です。大気や地表面での放射エネルギーの吸収・散乱・再放射を通じた再分配と物質の循環を通して引き起こされる大気・陸域・海洋の様々な現象は、私たちの生活にも多大な影響を及ぼします。一方、太陽は電子やイオンなどのプラズマ粒子も宇宙へ放出することで、宇宙空間と地球の環境にも影響を与えています。太陽表面で起きるフレアなどの爆発的な現象は宇宙環境を大きく乱し、人工衛星に障害を与えたり、地上で電力や通信に障害を引き起こしたりします。極域の夜空に現れる壮大なオーロラも、宇宙環境の変動に起因しています。

このように、宇宙と地球で起きる現象は互いに関係しており、人間生活とも深く結びついています。宇宙地球環境研究所は、これらの様々な現象を宇宙と地球を包括した視点から科学的に研究し理解することで、人類社会へ貢献するための取り組みを多角的に行っています。そのため、宇宙地球環境研究所では、総合解析、宇宙線、太陽圏、電磁気圏、気象大気、陸域海洋圏生態、年代測定の各基盤研究部で進める研究を「縦糸」に、それらを横断して新たな展開を目指す融合研究を「横糸」に研究活動を推進しています。

宇宙科学と地球科学を結びつけるため、所内に、国内の4つの附属観測所を含む国際的なネットワーク観測と国際共同研究を推進する「国際連携研究センター」、様々な観測データの集約と最先端のコンピューターシミュレーションを推進する「統合データサイエンスセンター」、航空機・気球・ロケット・人工衛星などの飛翔体を利用した将来の観測計画やその観測機器開発を推進する「飛翔体観測推進センター」の3つの附属センターを設置し、基盤研究部と連携しながら、国内外の関連分野の研究を支援・推進しています。

また、「融合研究戦略室」を設置し、東海国立大学機構（名古屋大学・岐阜大学）をはじめとする研究所外の研究者と協力し、従来の分野を超えた挑戦的な融合研究を数多く実施しています。さらに、「超学際ネットワーク形成推進室」を設置し、宇宙地球環境研究所が中核となり、5 参画機関とともに、共同利用・共同研究システム形成事業 ～学際領域展開ハブ形成プログラム～（宇宙地球環境科学と歴史学・考古学を結ぶ超学際ネットワーク形成）を推進し、文理融合研究にも取り組んでいます。

これらの活動により、宇宙地球環境研究所は、文部科学省から宇宙科学と地球科学を結びつける唯一の共同利用・共同研究拠点（令和7年度からは国際共同利用・共同研究拠点）として認可されており、我が国を代表する研究所として活発な国際共同研究を推進しています。

—表紙画像—



宇宙地球環境研究所における研究対象



INDEX

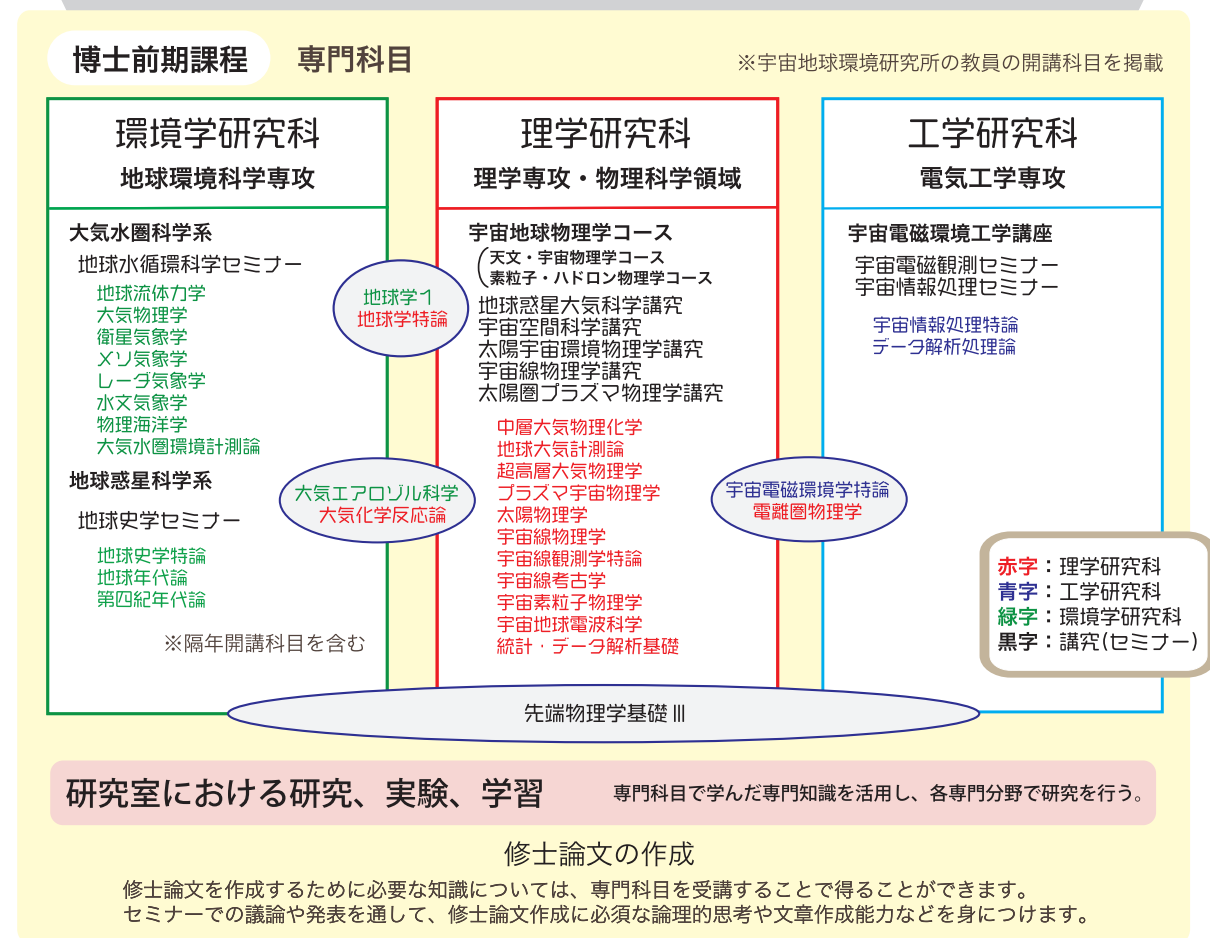
宇宙地球環境研究所における研究	1
宇宙地球環境研究所における研究対象	2
宇宙地球環境研究所の大学院講義 (理学 / 工学 / 環境学研究科)	4
研究室の紹介	
理学研究科	
● 大気圏環境変動研究室 AM	6
● 宇宙空間物理学観測研究室 SSE	8
● 太陽宇宙環境物理学研究室 SST	10
● 宇宙線物理学研究室 CR	12
● 太陽圏プラズマ物理学研究室 SW	14
工学研究科	
● 宇宙電磁観測グループ	16
● 宇宙情報処理グループ	18
環境学研究科	
● 気象学研究室	20
● 雲降水科学研究室	22
● 大気化学研究室	24
● 水文気候学研究室	26
● 海洋学研究室	28
● 地球年代学研究室	30
● 環境史学研究室	32
学生生活	34
学生の声	36
就職状況	38
大学院入試	40
学生支援	41
修士・博士論文一覧	42
受賞一覧	43
研究室と教員一覧	44
交通案内	45



宇宙地球環境研究所（ISEE）の大学院講義 （理学/工学/環境学研究科）

宇宙地球環境研究所 (ISEE) の教員が理学・工学・環境学の各研究科で担当している講義や講究（セミナー）を紹介します。各研究科の授業科目は、それぞれ異なる研究科の研究にも密接に関連しています。

コースツリー



研究室における研究、実験、学習

専門科目で学んだ専門知識を活用し、各専門分野で研究を行う。

修士論文の作成

修士論文を作成するために必要な知識については、専門科目を受講することで得ることができます。セミナーでの議論や発表を通して、修士論文作成に必須な論理的思考や文章作成能力などを身につけます。

修士学位（理学・工学・環境学）

博士後期課程

博士論文の作成

各専門分野で研究をさらに深める。

博士学位（理学・工学・環境学）

宇宙地球環境研究所基盤研究部門と各研究科研究室の関係

宇宙地球環境研究所 基盤研究部門	総合解析	宇宙線	太陽圏	電磁気圏	気象大気	陸域海洋圏生態	年代測定
各研究科の 研究室	太陽宇宙環境物理学 (SSr)	宇宙線物理学 (CR)	太陽圏プラズマ物理学 (SW)	宇宙空間物理学観測 (SSE)	大気圏環境変動 (AM)	水文気候学	地球年代学
	宇宙情報処理			宇宙電磁観測	気象学	海洋学	環境史学
	環境史学				大気化学		
					雲降水科学		

※修了要件や履修科目等の最新の情報は、各研究科・専攻からの案内などで確認してください。

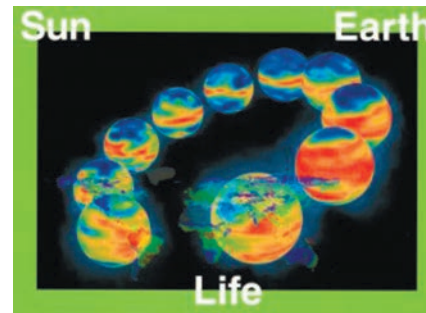
ISEE の各研究部門に所属している教員は、理学・工学・環境学の各研究科の協力教員として、関連講座の授業を担当しています。各研究部門の研究分野は、研究科の枠を超えて多岐に渡ります。皆さんはそれぞれの研究科に入学後も、研究所のなかで、同じ研究室で他の研究科と交流を持ちながら、学習や研究を進めていくことができます。ここでは、在学生の皆さんが研究科をまたいで履修している授業科目の一部を紹介します。
※教員の所属については、巻末のページを参照してください。

地球学Ⅰ（環境学研究科）・地球学特論（理学研究科）

宇宙地球環境に関わる諸分野を専門としている ISEE の教員と環境学研究科地球環境科学専攻の教員が、宇宙地球環境を一つのシステムとしてとらえ、その関連分野を俯瞰し理解するオムニバス形式の講義を行います。太陽－地球－生命圏相互作用系（SELIS）を学び、宇宙的視野に立つことによって、人類が今後どのように気候変動に適応していくべきかについて総合的に学ぶことができます。環境学、理学両研究科の講義として開講され、両方の学生が同時受講しています。自分の専門分野以外の事象や研究についても興味を抱き、自らが進める研究の位置づけと意義を考えることができます。

【講義内容】

- ミランコビッチサイクルと氷期・間氷期サイクル
- 太陽－地球－生命圏相互作用系（SELIS）
- 銀河宇宙線と太陽宇宙線
- 宇宙線生成核種を用いた過去の太陽活動の復元
- 大気圏の良い／悪いオゾン
- 大気エアロゾルがもたらす気候・環境影響
- 海洋と人間活動
- 海洋と教育
- 陸域生態系と水・炭素循環
- 気候変動にともなう水循環の変動が北極社会に及ぼす影響
- 樹木年輪セルロースを用いた古気候復元
- 古気候データから読み取る日本の歴史



宇宙電磁環境学特論（工学研究科）・電離圏物理学（理学研究科）

太陽、惑星間空間、地球周辺の構造、そこでの電磁波、粒子の振る舞いなどを講述することにより、太陽－地球系の電磁環境（宇宙電磁環境）に関する次の点を理解し、この分野における基礎力・応用力をつけます。

【講義内容】

- 宇宙天気
- 太陽、太陽風と惑星間空間
- 地球の大気～磁気圏・電離圏・熱圏の構造
- 荷電粒子の運動と電流
- 大気波動
- オーロラ、大気光
- プラズマ不安定と電離擾乱
- プラズマ中の電磁波の伝搬

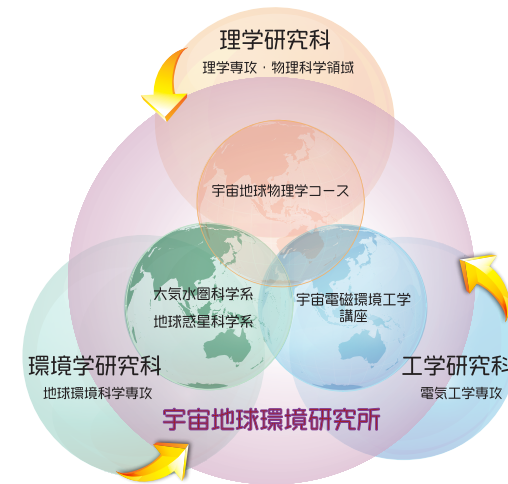


先端物理学基礎Ⅲ（理学研究科）

地球学と同様に、宇宙・太陽・地球・惑星間空間からなる「宇宙地球環境システム」の構造を理解するため、そこで観測される様々な物理現象を概観します。基礎的な既知の諸現象から研究途上の最先端な未解決の現象までを、ISEE の理学研究科と環境学研究科の教員がオムニバス形式で毎回紹介します。この講義の特徴は、単なる現象の紹介だけでなく、それらの現象を理解するために必要なプラズマ物理、力学、宇宙線、電磁放射などの物理の基礎概念もしっかりと学ぶことができることです。理学研究科の講義として開講され、ISEE 以外の理学専攻・物理科学領域の学生も受講します。また、工学研究科、環境学研究科の学生も受講することができます。

【講義内容】

- 1－1. 太陽地球環境システムの概要
- 2－1. 太陽大気構造と太陽活動周期
- 2－2. 太陽面爆発現象
- 2－3. 太陽風と太陽圏・宇宙天気
- 3－1. 相対論的荷電粒子の運動と散乱、光子と物質の相互作用
- 3－2. 銀河宇宙線と太陽高エネルギー粒子
- 3－3. 過去の宇宙線変動と太陽活動
- 3－4. 地球環境解析のトレーサとしての宇宙線生成核種
- 4－1. 磁気圏構造・ダイナミクスとジオスペース環境
- 4－2. 極域超高層大気とオーロラ活動の影響



- 5－1. 大気圏の形成と構造、太陽放射と温室効果
- 5－2. 下部熱圏・中間圏領域の変動：大気波動と金属層
- 5－3. 中層大気の力学と化学
- 5－4. 降水システムの観測とシミュレーション
- 5－5. 海洋変動

AM 大気圏環境変動研究室



水野 亮 教授



長瀬 智生 准教授

観測・実験により大気の様子を正確に捉え、大気変動を引き起こしている自然的・人為的要因とそのメカニズムを解明する。

地球誕生以来、約 46 億年という非常に長い時間をかけて形成された地球大気。大気は動植物の生命活動に不可欠であることはもちろん、太陽から受け取った放射エネルギーの一部を吸収・反射し、地表の温度を一定に保つ働きを担っています。しかし近年、産業革命以降の人間活動の急速な拡大によって、地球大気の年齢に比べれば遥かに短い時間スケールで、大気環境に様々な問題を生じています。例えば、二酸化炭素やメタンなどの温室効果気体の濃度は増加し続け、気候変動への影響が懸念されています。また、エアコンの冷媒等に使われてきたフロンガスをはじめ人工物質の使用によるオゾン層の破壊、航空機や自動車から排出される窒素酸化物や硫黄酸化物のもたらす酸性雨等、深刻な影響が現れています。大気環境変動は人類の未来に直接関わる問題です。将来の環境変動を正しく予測するためにも、観測に基づいて大気の様子を正確に捉え、大気変動を引き起こしている自然的・人為的要因とそのメカニズムを解明する必要があります。大気圏環境変動 (AM) 研究室では、最先端技術を駆使して開発した電波受信技術・赤外線分光技術を用いて、フィールド観測や室内実験によって大気環境変動の諸問題に真正面から迫っています。また、地球大気の実験のための相互比較系として、惑星大気を観測する計画にも着手しています。

中層大気微量成分の短期・長期変動観測と太陽活動の地球大気環境への影響の解明

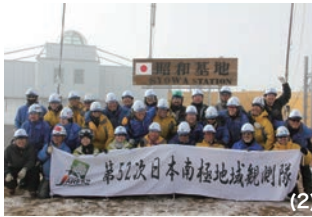
中層大気と呼ばれる高度 10 km 程度から 100 km 程度までの成層圏・中間圏・下部熱圏では、大気中の微量成分は地球内外の環境変動の影響を受けて常に変動しています。例えば、温室効果ガスの排出等による気候変動や特定フロン等の排出によるオゾン層破壊などの人為的な環境影響だけでなく、約 11 年周期の太陽活動、突発的な太陽フレアや磁気嵐等による地球周辺環境の急激な変化、大気波動や火山活動、エルニーニョなどの自然変動も、化学反応や大気輸送の変化を介して大気微量成分の時空間分布に影響を与え、緯度、高度、季節等によってそれらの影響の受け方も異なります。私たちは電波や赤外線を使った地上からのリモートセンシングを通して、大気中の微量成分の時間変化を観測しその変動要因を定量的に明らかにしようとしています。多くの人々が暮らす中緯度帯に位置する北海道や南米アルゼンチンの観測データは地球全体の変動を明らかにするための国際的な観測ネットワークの一部として長期的な地球環境変化の傾向を明らかにすることに貢献します。また、オーロラが見られる極域に位置する南極昭和基地、北欧ノルウェーでは、太陽活動に伴い地球の磁力線に沿って降り込んでくる高エネルギー粒子の影響を明らかにすることを目指しています。高エネルギー粒子は窒素分子や酸素分子を電離して NO_x、HO_x 等のオゾン破壊物質を生成します。オゾン破壊物質は、その場でオゾンを破壊するだけでなく冬季に下方輸送され、成層圏・対流圏まで影響を与える可能性が示唆されています。磁気圏や電離圏の研究者と協力し、観測とモデルとの比較を通して、この一連の物理化学過程を明らかにしようとしています。



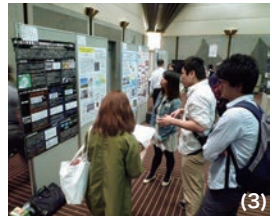
極域に位置する南極昭和基地とオーロラ (上)、中緯度帯に位置する北海道陸別観測所 (下)



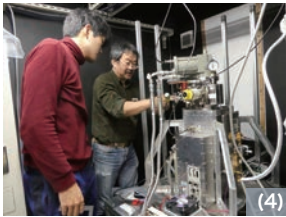
(1)



(2)



(3)



(4)



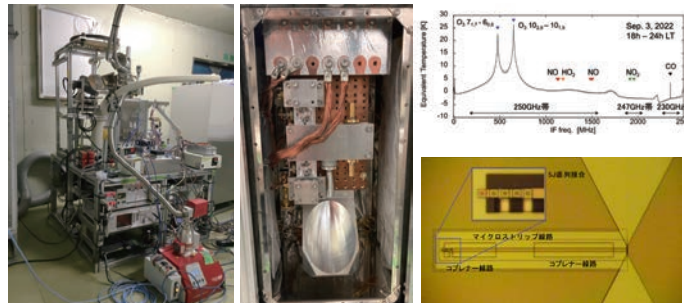
(5)



(6)

微弱な大気分子スペクトルを検出する超伝導薄膜センサーを用いた観測装置の開発

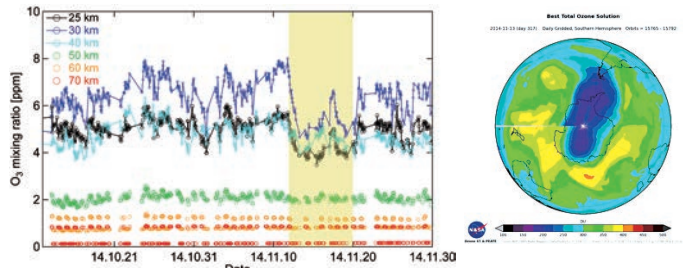
大気分子の中にはミリ波～サブミリ波という非常に波長の短い電波を出すものがあります。オゾンや一酸化窒素はそのような分子で、分子固有の周波数を持つ線スペクトルを放射し、その電波強度や線幅から分子の鉛直分布を知ることができます。ただし大気分子から放射される電波は非常に弱く、観測には超伝導薄膜素子の量子効果を利用した高感度低雑音の受信機 (超伝導 SIS ミキサ) を用いなければいけません。私たちはこうした受信機を自ら設計・開発し、絶対温度で 4 ケルビンまで冷却して超伝導状態で安定に動作する観測システムを実用化しました。それを用いて大気微量成分の時空間 (鉛直方向) 変化を数時間から数年にわたる様々なタイムスケールで調べています。また 2022 年には複数の周波数帯域で同時に線スペクトルを観測できる多周波ミリ波分光計を地上大気観測で初めて実用化しました。大学院生の皆さんは、電波工学から真空技術、極低温技術などの最先端のテクノロジーを駆使して、基盤となる要素技術開発から、観測システムへのインテグレーション、実際のフィールドでの観測、データ解析のためのプログラム開発に至るまで、リモートセンシング観測の基礎からスタッフとともに首尾一貫して取り組んでいます。



南極の昭和基地に設置された多周波ミリ波分光計 (左) とその内部 (中)、取得された分子スペクトル (250GHz 帯のオゾンと 230GHz 帯の CO) (右上) と超伝導素子の顕微鏡写真 (右下)

南米におけるオゾン / 紫外線、エアロゾル観測網の整備とリスク情報伝達システムの開発

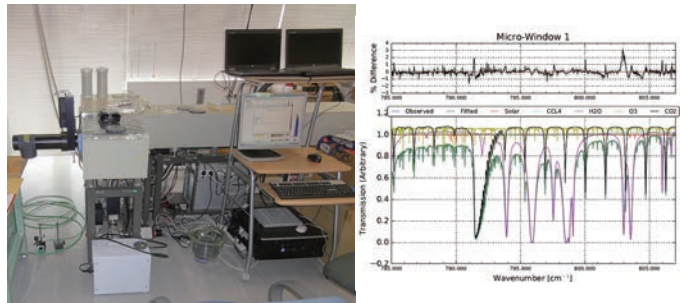
南米大陸南端部では、オゾンホールが上空にまで張り出してくることがしばしばあります。地域住民にとってオゾンホールは南極の特別な現象ではなく、日常生活に影響を及ぼします。私たちは南米のアルゼンチン、チリとの国際協力のもと、超伝導ミリ波分光計をはじめとして、オゾンライダー、紫外線分光計、オゾンゾンデなどの最先端の観測機器を南端部の大気観測所に整備しオゾン層 / オゾンホールのモニタリングを行っています。また、南米では数年に一度程度の頻度で南米アンデス山脈の火山が噴火を起こし、成層圏に吹き上げられた火山灰が数千 km 彼方まで飛んで行き飛行機の運航に影響を与えることがあります。火山灰の動きをモニターし予測するためのエアロゾルライダー観測網を国立環境研究所および現地研究者とともに整備しました。そして、研究機関はもとより両国の環境省、気象局、保健省、鉱山省、危機管理局の行政官らと協議をしながら、観測データをもとに必要時にオゾン / 紫外線や火山灰の注意報や警報を一般市民や関係諸機関に配信するリスク情報伝達システムを新たに開発し、国際社会にも貢献しようとしています。



南米南端のリオガジェゴスでのオゾンの高度別混合比の時間変化。黄色い網かけがオゾンホール通過時 (左)。NASA の人工衛星による 2014 年 11 月 13 日のオゾン全量マップ (右)

赤外分光観測による対流圏・成層圏微量成分の長期変動とその影響評価

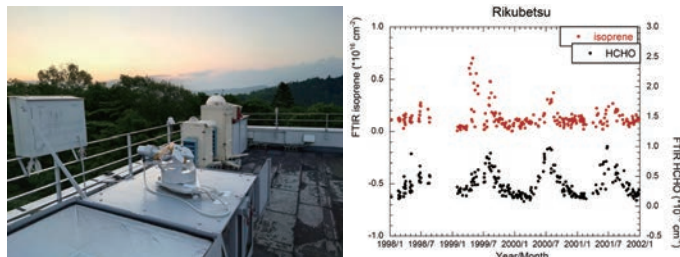
二酸化炭素やメタンなどの温室効果ガスに代表されるように、大気中の気体分子の多くは赤外線に対して強い吸収をもっています。そこで赤外域での吸収量に波長ごとに細かく測定することで、気体分子ごとの大気中の存在量を知ることができます。私たちは、1995 年北海道陸別観測所に高分解能フーリエ変換型赤外分光器 (FTIR) を、また 2014 年からは同地に国立環境研究所が設置した新型高分解能 FTIR を用いて太陽光の分光観測を共同で行っています。太陽光のスペクトル中には、大気中の微量分子ごとの吸収成分 (吸収スペクトル) が表れます。そこで、観測されるスペクトルからオゾンや塩酸、フロンガス、二酸化炭素、メタン、エタン、一酸化炭素など 10 種類以上の気体成分の大気中の気柱量や高度分布を求め、その時間変動を長期間にわたって監視することで、気候変動などのグローバルな地球環境変動への影響評価を行っています。また森林火災や都市域で発生する汚染大気の大気輸送の影響など、地域スケールでの大気質時間変動の影響評価も併せて進めています。



陸別観測所で稼働している高分解能 FTIR (国立環境研究所が保有) (左) と観測されたオゾン、水蒸気、二酸化炭素及び四塩化炭素の吸収スペクトル (右)

気候変動・大気汚染に関連した自然起源の短寿命微量分子の大気中濃度の同時計測手法の開発

地球の大気には、自然界で発生した様々な揮発性有機化合物 (VOCs) が存在しています。そのうちの一部は大気中で短い時間で酸化され、対流圏オゾンやホルムアルデヒド、エアロゾルなどの大気汚染物質を生成します。大気汚染物質の増加による「大気質」の低下は、住民の健康影響を引き起こすなどの深刻な社会問題を引き起こします。そのため、それらを抑制して「大気質」を保全することは、住民の生活環境を効果的に保全しつつ生活の質も向上させる「持続可能な社会発展」の取り組みとして、世界的に重要な課題のひとつです。私たちは、大気中 VOCs の 1/3 を占める植物起源のイソプレンと大気汚染物質の時空間濃度変動を、地上と人工衛星の赤外分光観測から明らかにする研究を進めています。VOCs と大気汚染物質のこれら観測データに基づいて、イソプレンの大気汚染への寄与を化学輸送モデルも活用して解明し、地球規模での大気質評価と将来予測の精緻化に貢献します。

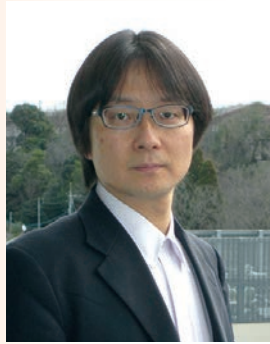


北海道陸別観測所での赤外分光観測と観測された大気中のイソプレンとホルムアルデヒド濃度の時間変動

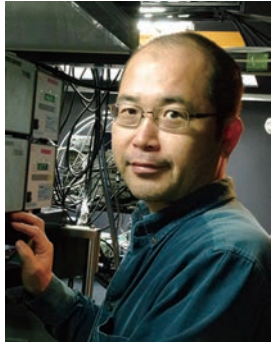
写真の説明：左より (1) AM 研集合写真 (円内は南極越冬中)、(2) 院生が参加した南極観測隊、(3) 学会発表風景、(4) ノルウェーでのミリ波観測、(5) 実験室で装置開発、(6) AM 研暑気払い (2019 年の写真)

Webページ：https://skx1.isee.nagoya-u.ac.jp/
連絡先：nagahama@isee.nagoya-u.ac.jp (長瀬)





平原 聖文 教授



野澤 悟徳 准教授



大山 伸一郎 講師

宇宙空間と地球・惑星環境の間で生起し変動する多様な自然現象に対して、独自の観測的・実験的研究を展開し、それらの成因・機構に迫る。

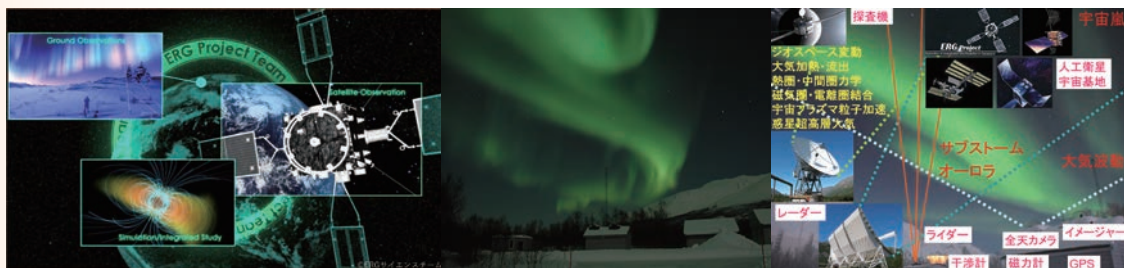
地球の超高層大気から周辺の宇宙空間まで広がる領域はジオスペース (Geospace) と呼ばれ、電離圏・磁気圏とも呼ばれてきました。この領域には、様々な実用・科学人工衛星や国際宇宙ステーションに代表される無数の宇宙機が配置されており、もはや現代社会にとって必須の社会基盤が展開する世界です。この身近な宇宙空間では、太陽コロナから流出する太陽風プラズマと、地球大気プラズマ・中性大気、地球固有磁場、下層大気などが複雑に作用していて、地球極域にはオーロラが出現し、静止軌道付近では宇宙嵐と呼ばれる大規模変動が引き起こされています。また、宇宙空間を満たすプラズマと惑星磁場、中性電離大気の相互作用は、太陽系内のみならず遠方宇宙でも基礎的かつ普遍的な素過程であることが分かってきています。我々にとって最も身近で詳細な探査が可能な地球、あるいは多彩な太陽系内惑星の超高層大気や周辺の宇宙空間で生起している壮大な自然現象とその変動過程を実証的に解明することは、宇宙開発への学術的貢献という枠を越え、宇宙・地球・惑星に関する基礎的・普遍的理解につながります。

我々の研究室では、最先端の科学観測機器を独自に開発し、海外・国内での拠点型の地上フィールド観測と宇宙空間に展開する探査機を用いた直接観測を両輪とした観測的・実験的研究を行い、この領域における自然現象の成因・機構に迫ります。

電磁気圏の実証的研究のための3つの戦略

壮大なオーロラ嵐・宇宙嵐が生起する電離圏・磁気圏における多様な物理機構に対して、実証的研究を多面的に展開するため、我々の研究室では次の3つの観測的・実験的戦略を基軸としています。

1. 宇宙探査機・超小型衛星・観測ロケットなどによる将来計画を立案・推進し、それらに搭載する宇宙空間プラズマ・惑星中性大気の粒子分析器を開発し、観測データの解析を通して、宇宙と地球・惑星の結合機構を実証的に研究しています。
2. 北欧において、大型のレーダー装置を含む各種レーダー、ナトリウムライダー、ファブリペロー干渉計、全天カメラなどを用いた国際協力による拠点観測を実施しています。
3. 高速変動するオーロラを世界最高速の地上・衛星搭載装置で極限時間分解能観測し、宇宙起源の高エネルギー電子がもたらす地球超高層大気・中層大気への影響を研究しています。



(1)



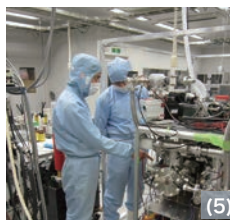
(2)



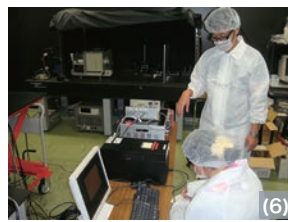
(3)



(4)



(5)



(6)

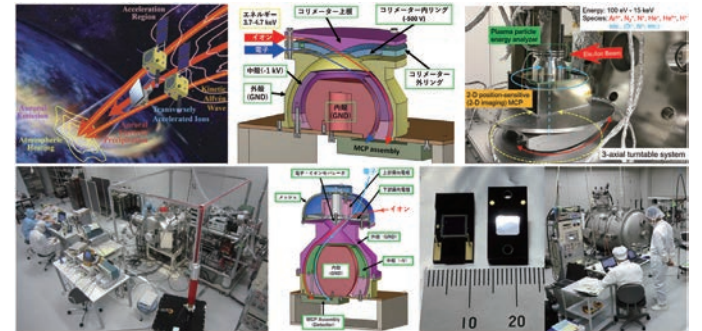
写真の説明：左より、(1)SSE 研を含む電磁気圏研究部の集合写真、(2)5方向に照射されるナトリウムライダーレーザー、(3)2種類のエネルギー帯域用の電子・イオンビームライン較正実験装置、(4)ロングイアピンに設置されているEISCAT42m アンテナ、(5)クリーンルームでの作業風景、(6)フォトメーターの較正実験風景

Webページ：<https://www.isee.nagoya-u.ac.jp/study03.html>
連絡先：hirahara@nagoya-u.jp (平原)



宇宙探査計画の立案・推進、宇宙機搭載用観測器の開発と観測データの解析により、宇宙と地球・惑星の結合機構を実証的に研究しています。(平原グループ)

宇宙空間と地球・惑星環境との間に生起する多様な自然現象に関して、それらの素過程や物理機構間の相互作用を解明するには、探査機やロケットなどの飛翔体を用い、その場で直接観測することが不可欠です。本研究グループでは、研究所最上階にあるクリーンルーム内の装置により宇宙空間に近い環境をつくり出し、宇宙探査機に搭載する観測機器の研究・開発を行っています。宇宙と地球・惑星の結合系で最も基本的な構成要素としての宇宙プラズマ・中性粒子を、飛翔体に搭載された分析器で直接計測するためには、研究・開発の段階において地上で十分に実験・試験を行うことが必要となるため、それに必要なビームラインなどの様々な装置・設備の構築も行っています。これらの分析器で取得された観測データを解析することで、宇宙と地球・惑星の境界領域での物理機構を実証的に研究しています。



将来の宇宙惑星空間探査計画の立案・推進、独自設計・試作による分析器の新規開発、クリーンルーム・ビームラインなどの較正実験施設の構築・運用を行っています。

北欧におけるレーダーやライダー等の拠点観測により、太陽風エネルギーの散逸過程の解明および大気上下結合の解明を目指しています。(野澤グループ)

本研究グループでは主に観測に基づいて研究を進めており、その中心的な観測装置は、北欧にて稼働している欧州非干渉散乱 (EISCAT) レーダーと呼ばれる地球物理学研究用の世界最高水準のレーダー群です。EISCAT レーダー観測と組みあわせて、人工衛星・ロケットなどの飛翔体や、他のレーダー (分反射レーダー、流星レーダー)、光学機器などとの同時観測による総合的な観測を行い、物理現象の理解に取り組んでいます。特に最近では、ナトリウムライダーを用いた、高度 80-110km 付近の大気温度変動や風速変動の観測研究に力を入れています。大気重力波の散逸過程、ジュール加熱量の定量評価、大気安定度、大気上下結合等の研究を修士学生のテーマとしています。観測地の中心となるのは、ノルウェー北部のトロムソとロングイアピンです。毎年複数回、現地に赴き観測を行います。この EISCAT レーダーおよびナトリウムライダー観測には、スタッフだけでなく、海外フィールド実習の一環として、大学院生も参加しています。

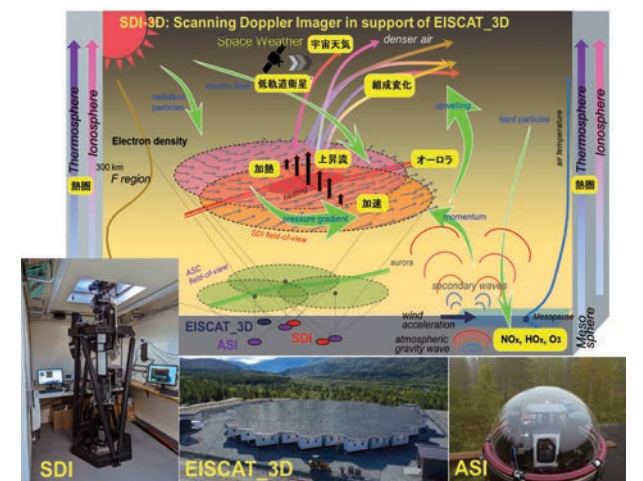


EISCAT レーダーとナトリウムライダー発振機

北欧に集結した最新鋭の観測装置を使って、オーロラ加熱の起源の解明と地球への影響を研究しています。(大山グループ)

極域の夜空をオーロラが彩るとき、その美しい光の裏側では、宇宙空間から荷電粒子や電磁エネルギーが、高度 100-1,000 km にある熱圏と呼ばれる領域に集中的に流入して、地球の大気を激しく加熱し、強烈な風を巻き起こしています。私たちの研究グループは、この極域熱圏と呼ばれる領域で起こる加熱と加速に着目し、世界初となる、オーロラ、熱圏、電離圏を同時に、そして広範囲にわたる精密な観測を行っています。加熱によって膨張、上昇し、混合された熱圏大気は組成の変化を引き起こし、宇宙からのエネルギーが地球全体を揺るがすかのように、加速された熱圏風に乗って地球全体に広がります。このように地球規模の変動を駆動しているのが極域熱圏の加熱と加速です。

しかし熱圏の観測は非常に難しく、オーロラ、熱圏、電離圏の同時観測の機会も限られています。そのため、いつ、どこで、どのように加熱と加速が起こるのか謎に包まれています。そこで私たちは北欧に設置された超大型レーダー「EISCAT_3D」(2025年稼働開始予定)、大型光学干渉計「SDI」、オーロラカメラ「ASI」を駆使した総合観測研究を行い、加熱と加速の発生メカニズムの解明を目指しています。この研究成果は、極域に流れ込んだエネルギーが地球規模でどのように再分配されるのか、その理解を深めるとともに、低軌道衛星の安定運用など宇宙天気予報の社会実装にも役立つことが期待されています。



本研究プロジェクトの概念図。SDI、EISCAT_3D、ASIの3装置を組み合わせることで、オーロラ加熱による熱圏大気の膨張、加速の発生メカニズムの解明に挑戦しています。



堀田 英之 教授 増田 智 准教授 家田 章正 助教

太陽活動と宇宙環境のダイナミクスを最先端のシミュレーションと最新の観測データ解析から理解し予測することで、太陽宇宙環境の全体像を明らかにします。

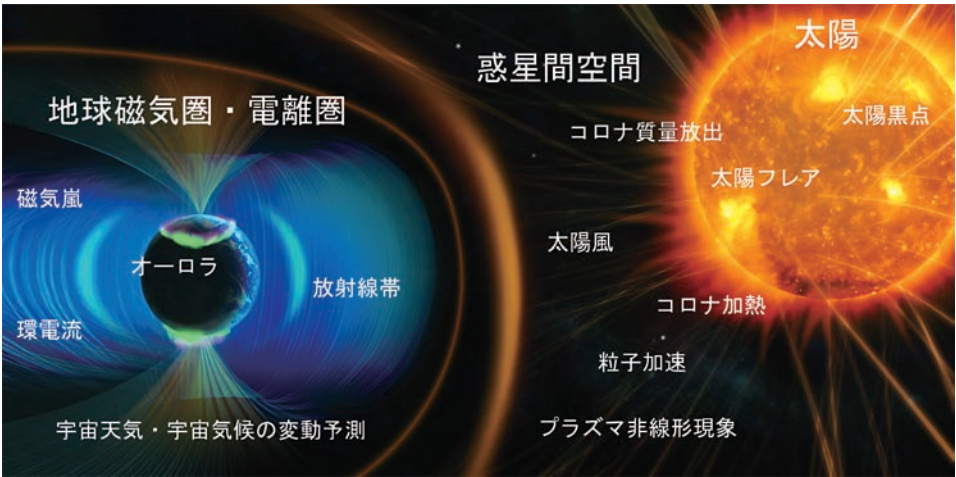
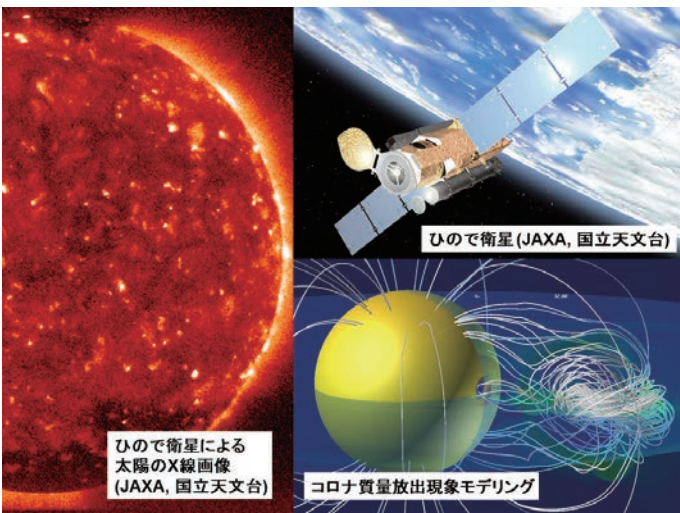
我々が生きる星「地球」は孤立した天体ではありません。地球とその周辺の空間（ジオスペース）は母なる星「太陽」と強くつながり、一つのシステムを形作っています。それ故、地球は太陽と宇宙の影響を絶えず受けているのです。太陽宇宙環境物理学研究室（SS_T研）は、太陽と地球の織りなすこの広大なシステムの謎を探ることができると世界的にも数少ない研究室です。SS_T研では最新の観測データと最先端のスーパーコンピュータを駆使したシミュレーションの融合によって、太陽宇宙環境を多角的に解き明かすことを目指しています。その研究は太陽ダイナモ、フレア爆発、太陽風、オーロラ、宇宙嵐まで多岐に渡ります。

GPS や衛星通信などにより宇宙利用が人々の生活を支える現代社会では、太陽宇宙環境の変動を予測する宇宙天気予報の重要性が高まりつつあります。SS_T研では太陽フレア爆発や放射線帯の変動、磁気嵐の予測を目指した太陽宇宙環境の予測研究を本格的に行うことができます。また、太陽活動と長期的な気候変動の関係を理解する宇宙気候研究も進めることができます。基礎から応用まで多岐にわたる研究テーマを選ぶことができることは SS_T 研の魅力の一つです。さらに、その研究活動は国際的に広がり、修士課程から国内はもとより国際学会で活躍するチャンスも用意されています。以下では、SS_T 研で進められている研究の一端を紹介しましょう。

母なる星、太陽の謎に迫る

太陽は我々の生活と地球環境に最も深く関係した天体でありながら、未だに多くの謎に満ちています。太陽黒点の変動、太陽系最大の爆発現象である太陽フレアの発生機、太陽を取り巻くコロナを 100 万度以上に加熱するメカニズム等は、現在も未知のままです。SS_T研では、「ひので」などの観測衛星や野辺山電波ヘリオグラフ等による最新の観測データと、京コンピュータなどのスーパーコンピュータを使った大規模シミュレーションを連携させ、こうした太陽の謎に挑んでいます。フレアと大規模なプラズマ放出の発生メカニズムを衛星観測と電磁流体力学シミュレーションによって初めて明らかにすると共に、コロナ加熱を微小なフレアの集積によって説明するための新たな研究を進めています。また、将来の黒点活動を太陽磁場観測に基づくシミュレーションによって予測する研究も進めています。

大学院生のみなさんは、電波・可視光・X 線等の多波長データ解析や観測データを取り込んだ精密シミュレーション等を用いて、太陽の歴史的謎に迫る研究を手がけることができます。

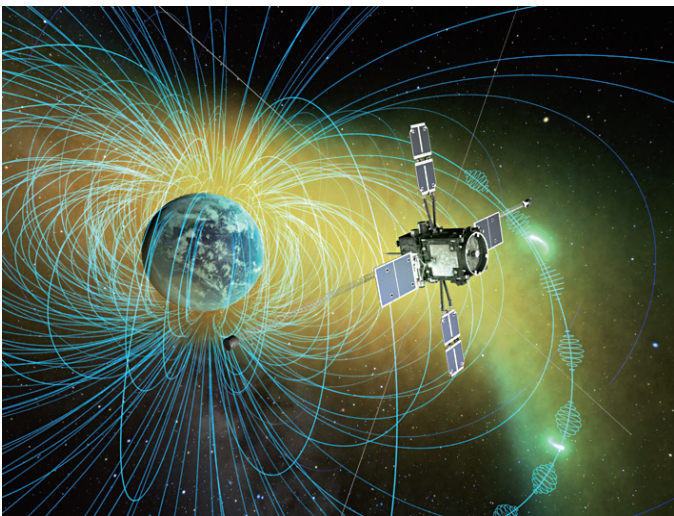


太陽宇宙環境の包括的な総合解析研究

太陽・惑星間空間・地球磁気圏・電離圏からなる太陽宇宙環境では、プラズマと電磁場の相互作用を通して太陽フレアによる爆発的エネルギー解放や太陽風の加速、太陽風と地球磁気圏の相互作用による磁気嵐や放射線帯の変動、オーロラなど様々な非線形現象がダイナミックに発生しています。太陽宇宙環境物理学研究室ではこうした多様な現象を従来の学問分野の垣根を超えて包括的に理解する研究を行っています。また、磁気リコネクション、衝撃波、波動と粒子の相互作用、プラズマ不安定性など色々なプラズマ現象の基礎研究も進めています。

ジオスペース高エネルギー粒子環境の研究

地球周辺の宇宙空間であるジオスペースには、エネルギーが高い電子やイオンが大量に存在するヴァン・アレン帯（放射線帯）と呼ばれる領域があります。このヴァン・アレン帯の荷電粒子が変動するメカニズムを、「あらせ」衛星を中心とした人工衛星や地上観測のデータ解析、シミュレーションを組み合わせる研究します。また、荷電粒子の変動を高い精度で予測するために、観測データとモデルの同化に関する研究も進めています。

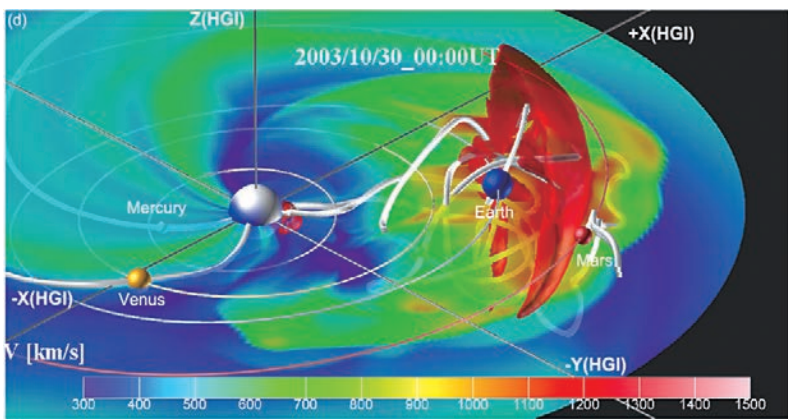
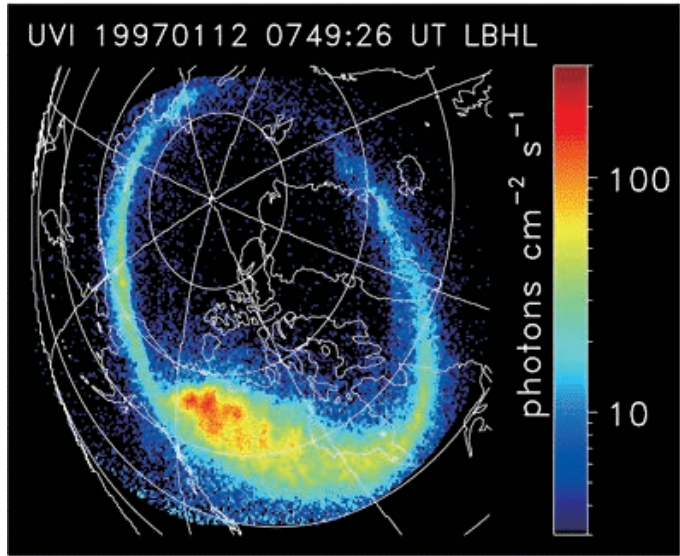


太陽地球圏環境の予測研究

太陽地球圏環境で生じる様々な変動現象は人間生活にも重大な影響を及ぼします。それらを科学的な理解に基づいて正確に予測することは、安全な社会を守るためにも重要です。太陽宇宙環境物理学研究室では、太陽地球圏環境の予測研究を全国の研究者と共に推進しています。特に、太陽表面磁場観測に基づく太陽フレア発生の数値予測、3次元電磁流体力学シミュレーションによるコロナ質量放出とそれによる惑星間空間磁場の変動予測、波動と粒子の相互作用の精密な理解に基づく放射線帯電子の変動予測、太陽周期の機構解明と黒点活動予測などを最新の計算モデルと精密な観測データ解析に基づいて進めています。

オーロラ爆発と脈動オーロラの研究

オーロラが激しく変動するオーロラ嵐（サブストーム）の解明を目指しています。特に、オーロラが爆発的に明るくなる現象（オーロラ爆発）と、地球磁気圏の尻尾がちぎれる現象（磁力線再結合）との関係を調べています。また、オーロラが周期的に明滅する現象（脈動オーロラ）と、内部磁気圏でのプラズマ波動との関係も調べています。これらを解明するために、宇宙や地上から撮影したオーロラ画像や、日本や NASA の人工衛星が観測したプラズマ・磁場・電場データの解析を行っています。



コロナ質量放出による惑星間磁場変動の予測シミュレーション



(1)



(2)



(3)

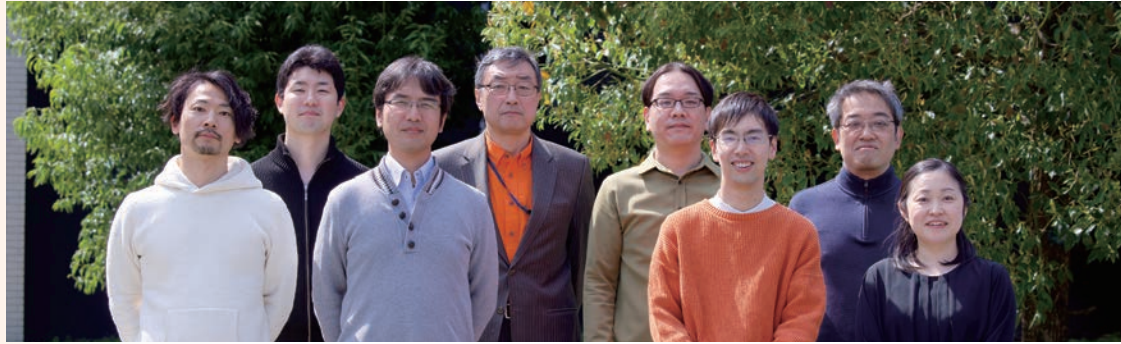


(4)

写真の説明：左より、(1)SS_T 研を含む総合解析研究部の集合写真、(2) 研究所一般公開で研究紹介を行う大学院生、(3) 国際会議（ロシア）で研究発表を行った大学院生、(4) 熱心に議論を行う大学院生

Webページ： <https://is.isee.nagoya-u.ac.jp/>
連絡先： hotta.hideyuki.w4@f.mail.nagoya-u.ac.jp (堀田)





向かって左から 奥村暁 講師、小林雅俊 特任助教*、毛受弘彰 助教、田島宏康 教授、風間慎吾 准教授*、高橋光成 特任助教、山岡和貴 特任准教授、三宅美沙 准教授

*素粒子宇宙起源研究所 所属

宇宙線物理学は、宇宙物理、素粒子・原子核物理、地球物理の3分野にまたがる学問です。宇宙の極限環境での物理、宇宙線に影響を受ける地球環境を研究の対象とします。

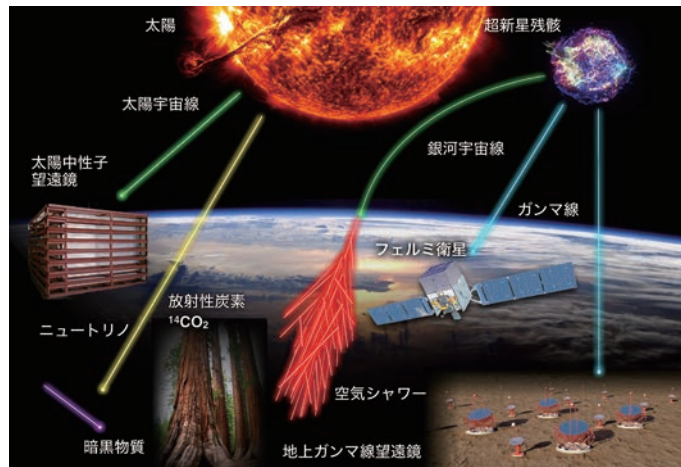
宇宙線は英語で cosmic rays と言われます。私達の研究室の略称 CR はこの頭文字をとっています。宇宙線は、宇宙から地球に降り注いでいる放射線で、Hess は 1912 年にこれを発見し、1936 年にノーベル物理学賞を受賞しました。宇宙線の主成分は陽子であり、電子や原子核などの荷電粒子や、ガンマ線などの高エネルギー光子やニュートリノも含みます。宇宙のどこかで生まれた宇宙線は、星間磁場や太陽・地球の磁場による影響を受けながら地球へ到達します。

宇宙線の起源は完全には解明されていません。太陽中性子の観測や宇宙ガンマ線の観測により宇宙線の起源を解明し、地球近傍のプラズマや太陽の表面、あるいは超新星残骸など宇宙プラズマにおける粒子加速機構を理解することが、CR 研での研究のひとつです。

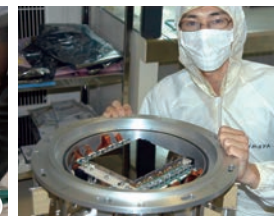
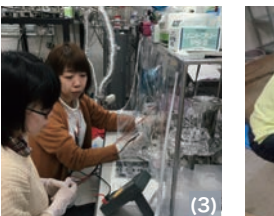
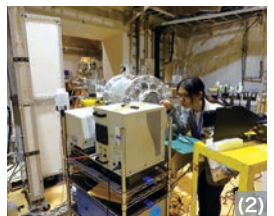
宇宙線は、かつては陽電子、中間子の発見、最近ではノーベル賞を受賞したニュートリノ振動の発見など、天然の素粒子実験の場として大きな役割を果たしてきました。CR 研では、LHC 加速器での超高エネルギー宇宙線衝突の研究や、ニュートリノ・暗黒物質の研究など、宇宙と素粒子にまたがる謎にも挑んでいます。

宇宙線は地球大気に突入して電離を起こし、また原子核反応により放射性炭素 14 などの宇宙線生成核を作り出します。宇宙線を調べることで、地球周辺の磁場の様子や変動の歴史を知ることができます。CR 研では、年輪中炭素 14 の測定などを通じて、宇宙線と太陽・地球との関わりを探っています。

宇宙線は、ユニークな素粒子実験の場を提供し、宇宙の高エネルギー現象について情報をもたらします。また、磁場に影響される宇宙線は太陽地球環境を調べるプローブにもなります。この様に宇宙線の研究は素粒子・原子核物理、宇宙物理から地球物理まで幅の広い領域にまたがっており、我々の研究室にも様々な研究テーマがあります。



CR 研究室の仲間たち



宇宙線加速機構の解明

宇宙線は、陽子・ヘリウム・鉄の原子核等が「なんらかの」加速機構で非常に高いエネルギーまで加速された荷電粒子です。その加速天体や加速機構は宇宙物理学上の大きな謎となっています。高エネルギー宇宙線やガンマ線の観測により加速天体を解明し、その加速機構を理解することが、宇宙線研究の主目的のひとつです。ガンマ線は宇宙線と星間ガスの相互作用で生成され、荷電宇宙線と異なり星間磁場で進行方向を曲げられることがありません。そのため、ガンマ線観測は宇宙線の加速現場を研究する有力な方法です。

2008 年に打ち上げられたフェルミ・ガンマ線宇宙望遠鏡による 10 億電子ボルトエネルギー帯のガンマ線観測では、得られたスペクトルの解析から W44、IC 443 などの超新星残骸での宇宙線加速の決定的な証拠をつかむことができました。CR 研では次世代のガンマ線観測装置であるチェレンコフ・テレスコプ・アレイ (CTA) の装置開発も行っています。CTA によって超新星残骸における宇宙線加速機構や、銀河系の宇宙線起源に関する研究をさらに進めていきます。

上述のような粒子加速は、宇宙のいたるところに存在するプラズマが起こす普遍的な現象で、様々な高エネルギー天体に加え、地球近傍や太陽の表面でもスケールこそ違え同様の現象が起っています。CR 研では太陽中性子を観測できる機器を搭載した超小型衛星の開発も進めています。太陽表面は我々に最も近い宇宙線源であり、太陽フレアと呼ばれる爆発現象に伴い粒子加速が起るため、この時放出される太陽中性子を測定することで、粒子加速の現場を捕らえることができます。また高エネルギーニュートリノや重力波観測とも連携した宇宙観測を発展させるため、人工衛星による低エネルギーガンマ線の観測技術の開発も進めています。



CTA 小口径望遠鏡の除幕式。
CR 研で開発した信号処理回路を採用している。

宇宙線と太陽活動との関連の研究

太陽の磁場活動は、11 年の周期変動や数十年にわたる低調期の存在など、長期的には様々な変化が知られています。また、太陽は時に超巨大な太陽面爆発を引き起こすこともあります。このような太陽の活動は、地球に到来する宇宙線強度に影響します。私達は樹齢 2000 年の屋久杉の年輪に含まれる放射性炭素 14 や、南極の氷床コアに含まれるベリリウム 10 など宇宙線生成核の濃度変化を測定し、宇宙線強度の履歴から過去の太陽活動を復元する研究を行っています。

超高エネルギー宇宙線の謎を解明する LHCf 実験

これまで最も高いエネルギーを持つ 10 の 20 乗電子ボルトの宇宙線が空気シャワーの観測から発見され、大きな謎を呼んでいます。これは人類が加速器で生成可能なエネルギーの何桁も上です。いったい宇宙のどこでこのような粒子が生まれているのでしょうか？

超高エネルギー宇宙線の観測では、宇宙線が大气中で反応して生成する 2 次粒子のシャワーを測定しています。しかし、超高エネルギーでの宇宙線の反応は実験データが無くよく分かっていません。私達は 2009 年から稼働続ける世界最高エネルギーの陽子衝突型加速器、ラージハドロンコライダー (LHC) に小さな検出器を組み込み、超高エネルギー宇宙線の反応を実験的に調べる「LHCf 実験」を推進しています。ここで得られる素粒子実験データは、宇宙線観測の精度を上げ、加速器では実現不可能なもっと高いエネルギーの現象を宇宙線によって探る糸口となるでしょう。

ニュートリノによる物質の起源の理解

「ニュートリノはなぜこんなにも軽く、またニュートリノ振動を起こすのか？」ニュートリノの持つ不思議な性質は、宇宙と物質の起源の謎に関わっていると考えられています。

ニュートリノは、ほとんど物質と反応しないため地下深くまで届きます。ニュートリノで宇宙を見れば、例えば太陽の中心で起っている核融合や銀河の中心を見通す事ができます。私達は神岡鉱山にある巨大ニュートリノ実験スーパーカミオカンデで、ニュートリノの不思議な性質を探ると共に、さらに 10 倍の大きさを持つハイパーカミオカンデ計画の実現に向けて開発研究を行っています。

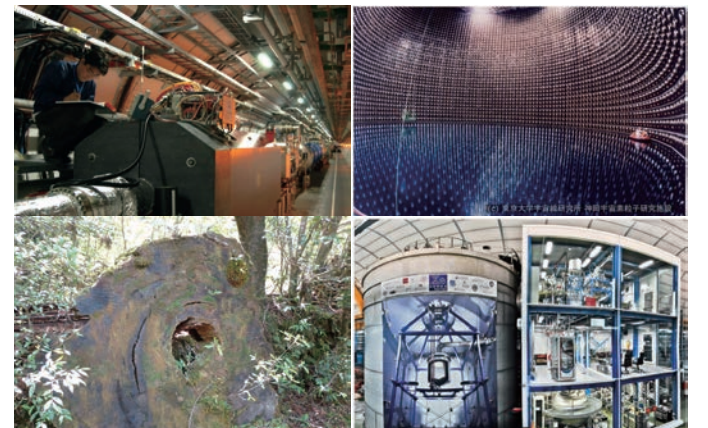
宇宙暗黒物質の探索

宇宙の全質量の大部分は素粒子標準理論では説明のつかない物質「暗黒物質」で構成されていることがわかっています。我々は、暗黒物質の正体やその背後に潜む物理の解明に向けて、宇宙観測や地下実験など様々なアプローチで暗黒物質を探索しています。

宇宙観測においては、銀河中心などで暗黒物質が対消滅した際に生成されるガンマ線やニュートリノを検出することで、暗黒物質の証拠を捉えようとしています。ガンマ線衛星・フェルミでは、通常の物質に対する暗黒物質の存在比が非常に高いと考えられている矮小楕円体銀河と呼ばれる銀河系近傍の天体からのガンマ線を探索しましたが、暗黒物質の証拠は見つけられませんでした。この結果は、陽子の 100 倍程度までの質量を持つ暗黒物質が存在しないことを示唆しています。さらに、陽子の 1 万倍程度までの質量の暗黒物質を検出する能力をもつ地上チェレンコフ望遠鏡の次世代装置 CTA の開発・建設に取り組んでいます。またスーパーカミオカンデでは、太陽や銀河中心で暗黒物質が対消滅した際に生成される高エネルギーニュートリノを探索しています。

地下実験では、液体キセノンと相互作用した際に発生する極僅かな光・電子を検出することで暗黒物質の証拠を捉えようとしています。私達は、約 9 トンの液体キセノンを用いて極低放射能検出器 XENONnT を開発し、イタリア・グランサッソー地下研究所で探索を行っています。約 3 ヶ月間の観測では、暗黒物質発見の兆候は得られませんでした。物質との相互作用の頻度に対して世界で最も厳しい制限を与えることに成功しました。現在は統計量を 20 倍に増やすべく観測を続けています。さらに約 60 トンの液体キセノンを用いた将来計画 DARWIN の実現に向けて、新たな検出器や極低放射能光センサーの開発も推進しています。

このように、私達は人工衛星、地上、地下深くから宇宙を観測し、暗黒物質の正体を明らかにしたいと考えています。



(左上) LHC 加速器で超高エネルギー宇宙線の衝突を研究する LHCf 実験。(左下) 屋久杉年輪中の放射性炭素 14 から、過去の太陽活動や宇宙線増加を研究する。(右上) 神岡地下のニュートリノ実験スーパーカミオカンデ (写真提供 東京大学宇宙線研究所 神岡宇宙素粒子研究施設) (右下) 次世代の暗黒物質探索実験 XENONnT (Credit: Roberto Corrieri and Patrick De Perio)

写真の説明: 左より、(1)LHCf 検出器完成を祝う CR 研メンバー、(2)雲核形成に関するビーム試験に取り組む学生、(3)新型液体ゼノン検出器の開発に取り組む学生、(4)放射性炭素 14 測定のため木を切る学生、(5)MOA II 専用大面積 (8 千万画素) CCD カメラと学生

Webページ: <https://www.isee.nagoya-u.ac.jp/CR/>
連絡先: tajima@nagoya-u.jp (田島)





岩井 一正 教授



藤木 謙一 助教

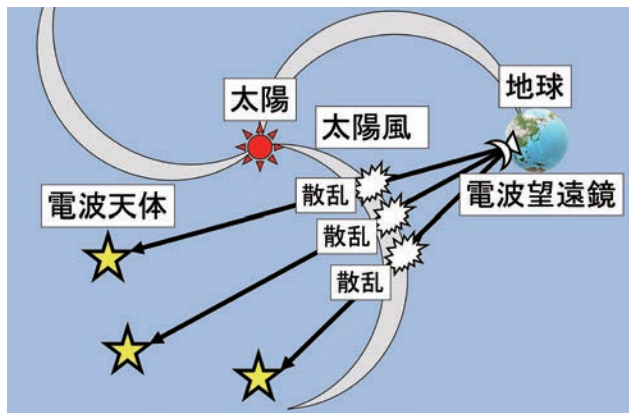
大型電波望遠鏡の開発、観測、データ解析、シミュレーションを一貫して行い、太陽圏変動の解明と宇宙天気予報の実用化を目指す。

宇宙空間は真空と思われがちですが、実際は真空ではありません。100万度にも達する高温の太陽大気コロナでは、プラズマ化した大気の一部が宇宙空間に太陽風 (Solar Wind) となって流出し宇宙空間を満たしています。太陽風は秒速数 100km もの超音速に達し、地球を含む太陽系の惑星を包み込む広大な太陽圏を形成しています。また、太陽ではフレアに代表される爆発現象が発生し、宇宙空間に大きな擾乱をもたらします。太陽風の擾乱は人工衛星や無線通信などに大きな影響を与えることがあり、宇宙進出の進む現代においては太陽風の擾乱や、その擾乱が宇宙環境に与える影響を予測する宇宙天気予報 (Space Weather) の重要性が高まっています。一方、太陽風はその加速過程も十分に解明されておらず、現在世界各国で活発に研究が行われています。

SW 研究室では、日本最大級の大型電波望遠鏡 3 台からなる独自の太陽風観測装置を保有し、世界で唯一 50 年以上も継続して太陽風の地上電波観測を行っています。太陽風観測データを中核として、様々な人工衛星や地上観測データ、物理モデル、AI 等を組み合わせて太陽風や太陽圏の幅広い研究を行っています。またデータ同化シミュレーションによる宇宙天気予報モデルの開発研究を行い、その実用化・高精度化にも貢献しています。観測と並行して、最先端の技術を投入した次世代大型電波望遠鏡の開発も進めています。完成すれば世界最高性能の太陽風の電波観測装置となります。

惑星間空間シンチレーション観測による太陽圏研究

太陽風は地球軌道では 1cm^3 あたり 10 個程度と極めて低密度で、太陽風自体が発する電磁波を観測するのは困難です。一方で太陽風中のプラズマに含まれる密度ゆらぎは電波を散乱する性質があります。太陽系の更に外にある電波天体と地球との間を通過する太陽風によって電波天体からの電波が散乱されることで電波の“またたき”が発生します。この電波のまたたき現象は惑星間空間シンチレーション (Interplanetary Scintillation; IPS) と呼ばれます。IPS の振幅は太陽風中のプラズマ密度に関する情報を与えてくれます。また、IPS による電波強度の変動パターンは太陽風の流れに伴って移動するため、離れた複数の地点で IPS 観測を同時に行うことで、太陽風の速度を測定できます。私たちは独自の電波望遠鏡を用いた IPS 観測によって太陽圏研究を推進しています。様々な方向にある電波天体を IPS 観測することで、広大な太陽圏を流れる太陽風のグローバルな分布を理解することができます。IPS 観測は太陽風中の変動現象を迅速に検出することにも有効です。また IPS 観測には探査機を送り込むことが困難な太陽の近傍や、黄道面から離れた太陽圏の高緯度領域の太陽風を観測できるという利点もあります。数多くの電波天体を IPS 観測するには高感度な電波望遠鏡が必要になります。また、太陽風速度を精度良く導出するには 3 箇所以上で同時に行う IPS 観測が有効です。このような観測を連続的に実現できているのは世界でも SW 研究室だけであり、ユニークな太陽圏研究を実現できます。



惑星間空間シンチレーションによる太陽風観測



IPS 観測用の多地点大型電波望遠鏡システムの開発

SW 研究室では、独自に大型電波望遠鏡システムを開発し、IPS 観測によって太陽風データを収集しています。それらの電波望遠鏡は豊川 (愛知)、富士山麓 (山梨)、木曽 (長野) の国内 3 箇所に設置されており、いずれも我が国最大級の面積を有しております。豊川の電波望遠鏡の受信面積は約 3500m²、富士と木曽の電波望遠鏡の受信面積は約 2000m² です。このような国内最大級の電波望遠鏡を占有して毎日電波天体の観測ができるのが SW 研究室の強みです。天体電波源からの信号は非常に微弱で、IPS のシグナルは電波源自体の信号に比べさらに小さいため、それを検出するには高感度の受信システムが必要です。SW 研究室の高感度な電波望遠鏡では、1 日に数多くの電波源について IPS 観測が可能です。

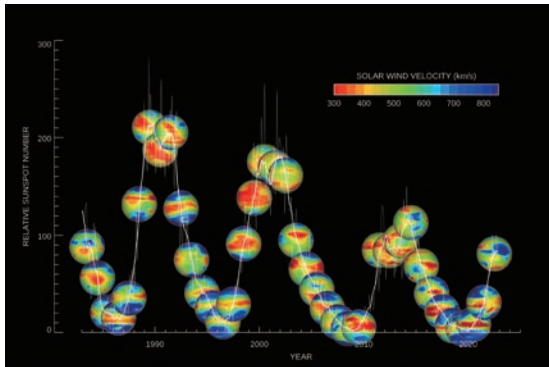
また、SW 研究室では、将来の IPS 観測をリードするべく、新しい大型電波望遠鏡の建設プロジェクト「次世代太陽風観測装置」計画を推進しています。このプロジェクトでは、既存の装置の 10 倍の性能を目指して、最新の技術が導入されます。これまでに多方向を同時に観測できるデジタルフェーズドアレイ装置のプロトタイプを開発し、信号処理の実験を行ってきました。また、観測に適したアンテナ形状の設計も行っています。現在は全体の 1/3 程度の大きさの電波望遠鏡を建設すべく、プロジェクトを活発に進めています。これらの設計開発は研究室のスタッフや大学院生が協力して行っています。自分たちが考えたアイデアによって装置が出来上がっていく過程を体験できることも本研究の魅力の一つです。



木曽に設置されている大型電波望遠鏡

CT 解析による太陽風 3 次元構造の復元

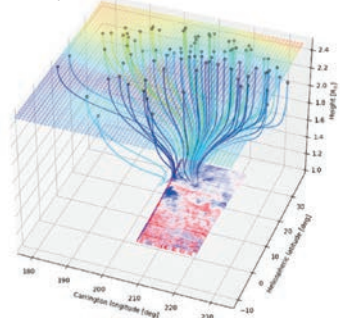
SW 研究室が持っているもう一つのユニークな技術は、IPS 観測データによる太陽風の CT 解析です。CT とは計算機トモグラフィ (Computer-assisted Tomography) の略で、医療分野での応用が有名です。IPS 観測で得られる太陽風データは視線に沿った積分値ですが、SW 研究室で開発した CT 解析法を使うと、IPS 観測で得られたデータから太陽風の 3 次元構造が復元できます。これまでの研究から、CT 解析によって得られた結果は飛翔体による観測ともよく一致していることが示され、その信頼性の高さが確認されています。この CT 解析は SW 研究室の研究に活用され、次に述べる太陽風生成機構や惑星間空間擾乱、宇宙天気予報の研究でいくつもの成果を生んできました。



太陽活動 11 年周期に伴う太陽風速度分布の変化

太陽風生成機構の研究

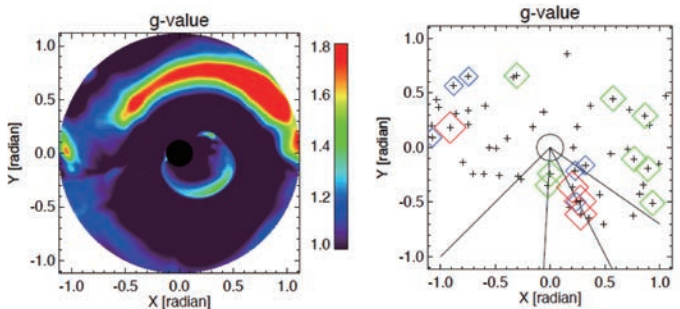
太陽風の生成機構は、未だ解明されていない大きな謎です。現在研究者を悩ませているのは、太陽風を駆動するエネルギーがどこからくるかという点です。最初、太陽風は 100 万度以上のコロナの持つガス圧により太陽の重力を振り切って流出するというモデルが提唱されました。しかし、その後の研究からコロナのガス圧では太陽風を説明できないことが判っています。特に、コロナホールと呼ばれる低温・低密度領域からより高速な太陽風が吹き出すという観測事実は説明が最も難しい点です。この他、太陽風が 300-400km/s の低速成分と 700-800km/s の高速成分で構成されるという性質 (2 成分性) の原因、太陽風がどこでエネルギーを得て超音速になるかという加速場所の問題、低速風の発生源はどこかという問題など、太陽風生成機構に関する謎は尽きません。SW 研究室のこれまでの研究からは、太陽の磁場特性が太陽風加速を大きくコントロールしていることが判ってきています。



太陽コロナと太陽風の関係。多数の曲線はコロナから惑星間空間につながる磁力線に対応。

宇宙天気予報の実用化に向けた研究

太陽表面での爆発現象は太陽大気の一部を宇宙空間に向けて吹き飛ばします。この現象はコロナ質量放出 (Coronal Mass Ejection; CME) と呼ばれ、地球周辺に到来すると電波通信や人工衛星・航空機の航行、GPS 測位など、社会生活に様々な影響を与えるため、到来前に予報することが重要です。しかし、CME が惑星間空間でどう分布し、どの様に伝搬するかについては、まだよくわかっていません。IPS 観測は惑星間空間を伝搬中の CME を効率良く検出することができます。SW 研究室では宇宙天気予報を行う研究機関と共同で IPS 観測データを取り込んだ CME 伝搬モデルの開発を行っています。これまでの研究から、IPS 観測データを取り込むことで CME の到来予測精度が向上することが明らかになっていきました。現在、このモデルを用いた宇宙天気予報の実用化に向けた開発が進められています。



実用化に向けて開発が進む IPS データを取り込んだリアルタイム太陽圏シミュレーション (Iwai et al, 2019)

AI・データ同化・数値計算等を用いた研究・開発

SW 研究室では大型望遠鏡の装置開発・太陽風観測データを用いた太陽圏研究・数値シミュレーションによる宇宙天気予報システム開発などの中核研究において数値シミュレーション・データ同化・AI などの先端の数値科学的手法を積極的に研究に取り込んでいます。また、大規模なアレイアンテナの設計に用いる電磁界解析シミュレータ、磁気流体シミュレーションに用いる並列計算機、AI 研究に特化した高性能な GPU サーバーなどの研究環境を常にアップデートしています。研究を通じて身につけたスキルは、幅広い研究分野や産業に応用可能で、卒業生は様々な分野で即戦力として活躍しています。

写真の説明: 左より、(1) 研究室メンバー、(2) 木曽観測施設における一般公開の様子、(3) セミナー中の様子、(4) 開発中の次世代装置の一部、(5) 東山キャンパスにおけるアンテナを用いた実験の様子、(6) 若手会夏の学校での発表の様子

Webページ: <https://stsw1.isee.nagoya-u.ac.jp/>
連絡先: k.iwai@isee.nagoya-u.ac.jp (岩井)

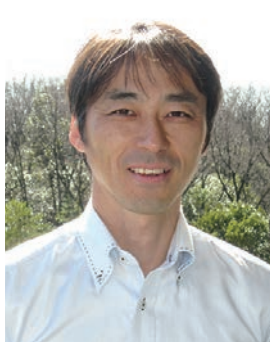




塩川 和夫 教授



西谷 望 准教授



大塚 雄一 准教授

地球周辺の宇宙空間と超高層大気を観測的に研究し未知の現象の発見とその原因の解明・人類の宇宙利用への応用をめざす。

本研究グループは、地球周辺の宇宙空間（ジオスペース）とそれにつながる超高層大気の変動を観測的に研究しています。この領域は、太陽からのプラズマが地球の磁場にとらえられて磁気圏を形成し、さらに大気に降り込んでオーロラを光らせたり大気を加熱したりする上からの過程と、対流圏などの下層大気からの波のエネルギーが超高層大気に伝わって変動を引き起こす下からの過程があり、この上下からのエネルギー流入によって常に変動しています。私たちの研究は、この領域で発生している未知の現象の発見とその原因の解明という理学的な側面と、人類の宇宙利用への応用という工学的な側面があります。

研究手法として、オーロラなどの大気発光の高感度分光機器、大型レーダー、レーザーレーダー、GPS 受信機、磁力計、VLF 電波アンテナ、人工衛星の搭載機器などを開発し、観測に基づいた研究を行っています。これらの機器を国内・海外のフィールド観測点に設置し、地球規模のグローバルな研究を国際協力のもとで行っているのも特徴です。私たちの研究室は、工学系の学生と理学系の学生と一緒に研究をしているユニークな研究室です。さらにフィールド観測のために海外の観測点に出張することがあるとともに、国際共同で世界最先端の研究をしているので留学生や外国人の客員研究者が研究室に滞在するなど、国際的な研究環境となっています。

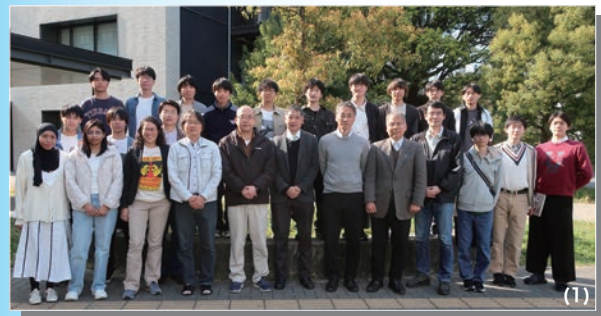
オーロラや電磁場観測を通じた電磁気圏の研究

オーロラはジオスペースのプラズマが大気に衝突して大気が光る現象です。プラズマは目に見えませんが、オーロラを通して地球周辺のプラズマの動きを画像としてとらえることができます。またオーロラは電磁気圏に様々な電磁場変動を引き起こします。サブストームと呼ばれるオーロラが爆発的に活動する現象や、周期的に点滅するオーロラなど、オーロラに関連する地球周辺のプラズマ現象には、まだまだ未知な点が多いのです。オーロラは超高層大気を加熱し、その高度の大気の地球規模の変動を引き起こし、人工衛星の軌道を変えることもあります。

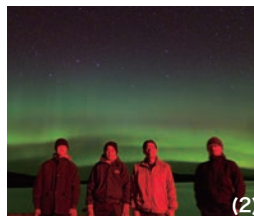
私たちは、カナダやノルウェーでオーロラの高感度分光観測や関連する磁場・電場・波動・大気変動の観測を行い、オーロラに関連したジオスペース・超高層大気の現象を研究しています。またオーロラを引き起こすプラズマを人工衛星から直接計測する粒子分析器の開発も行っています。



カナダで観測されたオーロラ



(1)



(2)



(3)



(4)



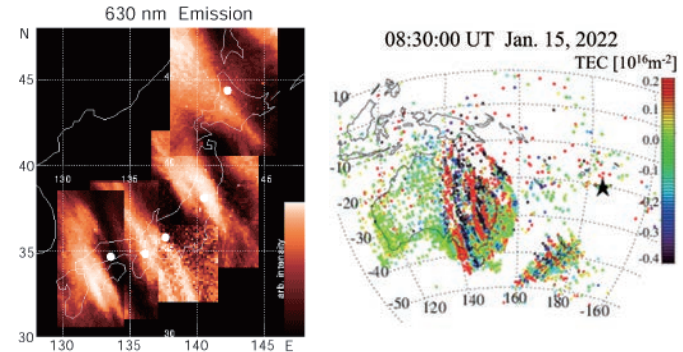
(5)



(6)

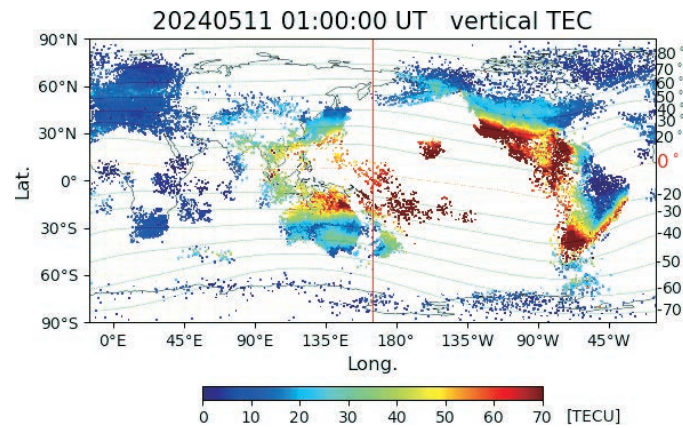
光学および GPS 観測による超高層大気・電離圏の研究

高さが 80km 以上の中間圏・熱圏と呼ばれる超高層大気や電離圏にはいろいろな空間波長を持つ波動が昼夜の別なく存在しています。例えば水平波長が 1000km 以下の電離圏の波動を "MSTID (中規模伝搬性電離圏擾乱)" と呼びます。私達は、夜間大気光 (高度 80 ~ 300km の大気が夜間に発光する現象) を測定するための全天カメラを国内の 4 点とオーストラリア、インドネシア、タイ、カナダ、ロシア、ノルウェー、ハワイなどに設置して、MSTID などの大気波動をイメージング観測しています。また、高度約 2 万 km を飛翔する GPS 衛星など測位衛星が送信する 2 周波の電波を地上で受信して、電離圏の電子密度のイメージング観測をしています。これらの観測を通して、超高層大気や電離圏の変動を研究しています。これらの超高層大気・電離圏の変動は、人工衛星-地上間の通信に影響を与えたり、GPS の測位精度を落としたりして、宇宙空間を利用した人類活動にも影響を与えます。



(左) 日本列島上空を北東から南西へ伝搬する MSTID の大気光観測

(右) トンガの火山噴火後に GPS などの測位衛星データで観測された電離圏変動



GPS などの測位衛星データから得られた全電子数の世界分布

赤道域の電離圏の研究

磁気赤道付近の電離圏に見られる特異な現象の一つが、太陽活動が高い年の春秋に発生する "プラズマバブル" です。これは、日没後の下部電離圏に発生した電子密度の "穴 (バブル)" が時間とともに成長しながら高々度へと広がる現象です。この現象が注目を集める理由は、バブル生成に関わる物理過程の複雑さ (面白さ) と、バブルが衛星通信や衛星測位の障害の原因になることです。私達は、鹿児島県佐多とオーストラリア・ダーウィンに設置された全天カメラにより、赤道上空で最高高度が 1700km にも達する巨大なプラズマバブルの観測に初めて成功しました。両地点で観測されたバブルの構造は非常によく似ており、バブルが地球磁力線に沿って南北に延びた構造をしていることが分かりました。バブルの生成過程には未だ多くの謎が残されており、私達は、バブルに絡んだ諸現象を解明するため、赤道直下のインドネシア・スマトラ島のコタパン及び、タイのチェンマイとチュンポンに観測拠点を設け、全天カメラ、GPS 受信機、磁力計などをを用いた連続観測を行っています。

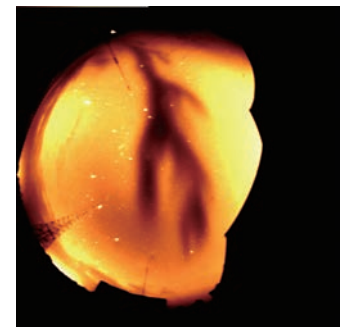
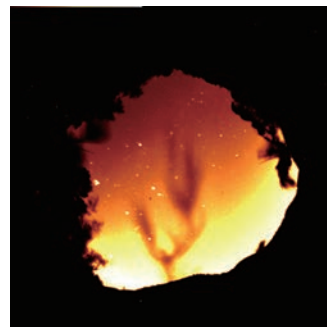
大型短波レーダーによる電離圏・熱圏変動の研究

電離圏のプラズマは激しい擾乱状態になることがあります。私達は大型レーダーを使って乱流の研究を行っています。強力な電波を上空に発射し、乱流プラズマで散乱されたレーダーエコーを調べることにより、乱流の生成機構や無線通信などへの影響を知ることができます。また私達は、南北両半球に多数設置されている大型短波レーダーを用いて、高・中緯度電離圏内のプラズマの運動の研究を行っています。特に 2006 年 11 月と 2014 年 10 月には北海道陸別町に二基の大型短波レーダーを設置し、継続的な観測を行っています。このレーダーは、従来から観測空白域となっていた北海道からシベリア、アラスカに至る広範囲の電離圏や下部熱圏を探索することができる世界的にもユニークなものであり、中緯度電離圏と高緯度電離圏が力学的・エネルギー的にどのように結合しているかを研究するための新しい観測手段となります。



(上) 北海道・陸別第一短波レーダーの巨大なアンテナ群

(下) 2025 年 1 月 1 日晩 (23:48) に、北海道・陸別第一短波レーダーサイトで撮影された低緯度オーロラ

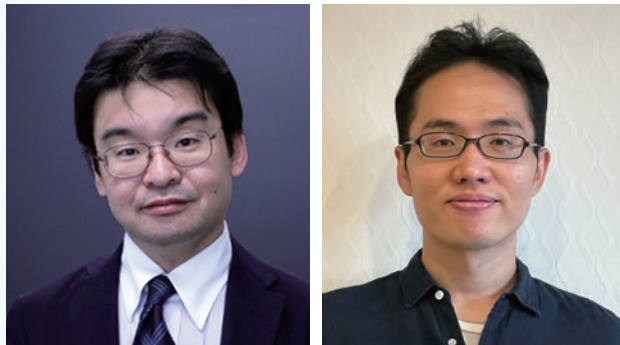


佐多 (左) とダーウィン (右) の大気光全天カメラで同時に観測された、南北半球の対称性が非常によいプラズマバブル (暗い部分)

写真の説明: 左より、(1) 宇宙電磁観測グループを含む電磁気圏研究部の教員及び学生の集合写真、(2) カナダ・Nain 観測点でのオーロラ観測、(3) 高感度全天カメラの校正実験、(4) インドネシアにおいて GPS 受信機の設置作業、(5) オーロラ電波を観測するアンテナのケーブル設置作業 (カナダ) (6) 陸別 HF 第一レーダーサイト前での集合写真

Webページ: <https://www.isee.nagoya-u.ac.jp/dimr/>
連絡先: shiokawa@nagoya-u.jp (塩川)





三好 由純 教授

飯島 陽久 准教授

情報学的手法に基づく太陽地球系科学及び宇宙プラズマ科学の研究により、宇宙地球環境の変動を解明し、宇宙の天気を予測する。

情報学的手法を用いた大量の人工衛星データや画像の解析処理やデータ同化及び、スーパーコンピュータを用いた超並列計算機シミュレーションなどのアプローチにより、ジオスペースおよび太陽地球惑星系の環境変動を数理的に研究しています。各教員は他の研究グループと協力して太陽地球系科学及び宇宙プラズマ科学の研究を進めるとともに、教育においては SST 太陽宇宙環境物理学研究室と密接に関わりながら大学院工学研究科の学生の指導を担当しています。

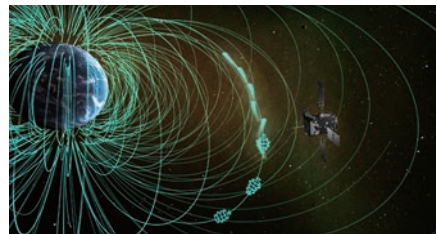
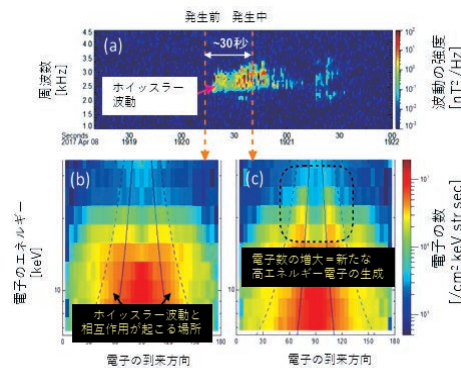
人工衛星や地上からの観測データ解析によるジオスペース環境・太陽大気の研究

惑星間空間は、太陽から吹き出す希薄な超音速プラズマ流（太陽風）によって満たされています。一方、地球などの惑星は固有の磁場を持っていますが、その固有磁場と太陽風が相互作用を行う結果、磁気圏と呼ばれる構造が形成されます。この地球周辺の宇宙空間のことをジオスペースとよびます。磁気圏は太陽風から質量やエネルギーを取り込み、それを蓄積して解放する変化を繰り返し行っています。宇宙嵐やサブストームと呼ばれるその爆発現象と関連して、高緯度域において大規模な自然放電現象であるオーロラが活発化し、また放射線帯（ヴァン・アレン帯）と呼ばれる1,000,000eVを超えるエネルギーを持つ粒子が変動します。それらの変動は、プラズマの運動によって引き起こされます。

私たちは、これらの現象の性質と発生の原因を人工衛星で取得された大量のデータの情報学的な解析とスーパーコンピュータを用いた計算機シミュレーションによって研究しています。ジオスペースは多くの人工衛星が運用されるなど、私たち人類の活動領域となっていますが、太陽表面の爆発現象（フレア）や宇宙嵐にともなう宇宙環境の変動とともに人工衛星の障害などが発生することがあり、私たちの生活にも影響を与える可能性があります。このような人間活動に影響を与える宇宙環境現象：宇宙天気

の予報を目指し研究を進めています。私たちのグループでは、ジオスペースで起こる様々な現象のうち、オーロラや放射線帯の高エネルギー粒子の変動過程についての研究も精力的に進めています。太陽風の変動に伴って、放射線帯の高エネルギー粒子がいつ、どのくらい増えるのかを予測することが可能になれば、人工衛星等の被害を軽減できる可能性があります。2016年に打ち上げられた JAXA の科学衛星「あらせ」の最新のデータを用いて、この高エネルギー粒子の変動過程の研究を行っています。また、観測データとコンピュータシミュレーションを組み合わせた研究も推進しています。

また、ジオスペース環境変動の主な原因である太陽大気の活動についても、JAXA の科学衛星「ひので」、NASA の科学衛星「SDO」や地上望遠鏡で取得された画像を解析し研究しています。なかでも地球環境に最も影響を及ぼすフレアやコロナ質量放出（CME）が、いつどこでどのようにして起こるかに着目し、将来的にフレアの予報を目指し研究を行っています。

ジオスペース探査あらせ衛星（2016年打ち上げ）
©ERGサイエンスチーム

あらせ衛星が観測したプラズマの波（上）と、電子の分布（下）。上の段のホイッスラー波動が発生すると、電子の分布が下左から下右へと変化し、電子が加速していることが発見されました。（Kurita, Miyoshi et al., 2018 を改訂）

機械学習 / 画像解析 / データ同化にもとづく宇宙天気現象の予測研究

私たちは、ジオスペースの研究に、最先端の情報学的手法を積極的に活用しています。具体的には、高度な画像解析処理技術、機械学習を用いた大規模データの処理、またデータ同化にもとづく観測とコンピュータシミュレーションの融合研究です。

オーロラの研究では、北欧や北米にオーロラの高速撮像システムを設置し、そこから得られる高時間高空間分解能のオーロラ観測画像の解析を行っています。そして、2022年には、アラスカでオーロラ観測ロケット実験を行うなど、様々な観測手法を組み合わせた研究を行っています。また、2020年度中ごろの極域での観測ロケット搭載、さらには将来のオーロラ探査衛星搭載を目指した新しい観測機器の設計も進めています。

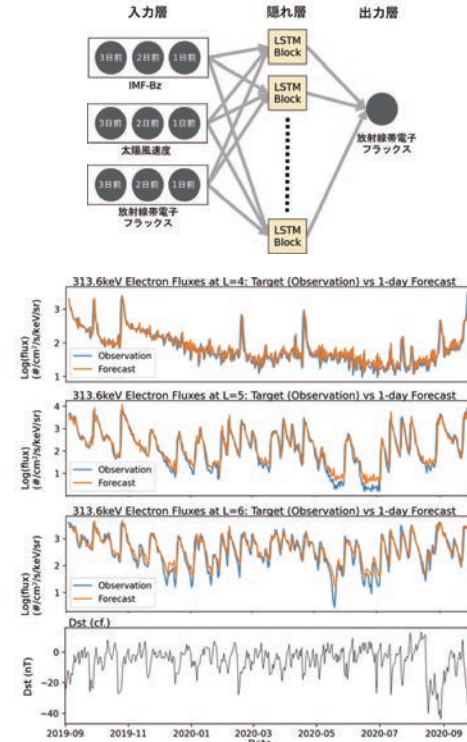
このほかにも、データ同化とよばれる観測データとコンピュータシミュレーションを融合させる手法の開発にも取り組んでいます。データ同化は、コンピュータシミュレーションに観測データを取り入れ、シミュレーションで用いている未知変数を実際の観測データをうまく説明できるように最適化することにより、より高精度な計算を実現するものです。私たちは、最先端のデータ同化手法を用いて放射線帯やオーロラ活動指数の変動予測の研究を進めています。さらにニューラルネットワークをはじめとする機械学習の手法を適用する研究も積極的に進めており、ジオスペースの現象のパターン認識や自動抽出等の研究を進めています。「あらせ」衛星の観測データから放射線帯電子の変動と太陽風活動の関係を機械学習したプログラムにより、未来の放射線帯電子の変動を予測する試みも行っています。これらは、宇宙天気予報の基礎研究として、人類の宇宙利用に貢献していくものです。



左・中：北欧、北米に設置した100Hz高速撮像カメラによるオーロラ観測

©国立極地研究所、PsAプロジェクト

右：2022年にアラスカから打ち上げられたロケット（写真提供 Justin Hartney 氏）



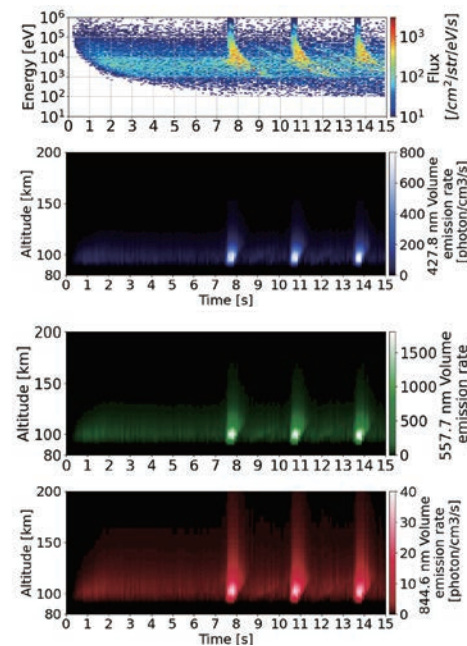
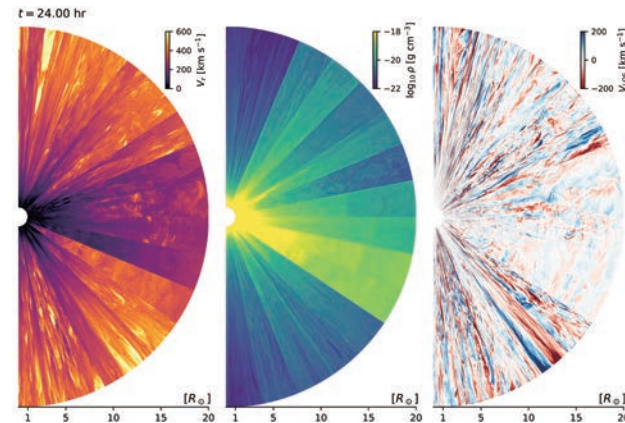
(上)「あらせ」衛星の観測データの機械学習に用いたニューラルネットワーク

(下) 機械学習によって予測した放射線帯電子の変動と実際の観測結果との比較

スーパーコンピュータを用いた太陽地球圏環境の計算機シミュレーション

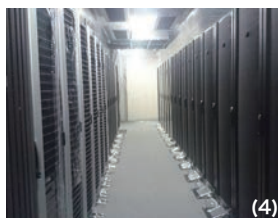
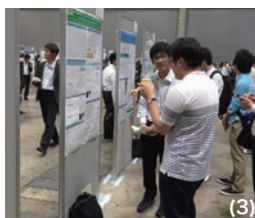
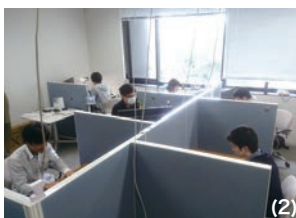
衛星・地上観測データの解析と並んで、コンピュータシミュレーションによる宇宙天気研究が盛んに行われています。宇宙天気予測の実用に耐えるような信頼性の高いシミュレーション手法の構築は重要な課題です。私たちのグループでは、太陽風-磁気圏相互作用などの巨視的現象を扱う電磁流体力学（MHD）コードおよび、プラズマを構成する電子やイオンなど粒子一つ一つの運動と電磁場との相互作用に起因する微視的現象を扱う運動論コードなどを用いて、スーパーコンピュータを利用した計算機シミュレーションを行っています。

計算機シミュレーションは名古屋大学情報基盤センターのスーパーコンピュータや研究所のスーパーコンピュータを用いて行っています。コンピュータシミュレーションにより、宇宙嵐や関連する現象がいつどこでどのように起こるかを理解する事を試みています。さらに私たちのグループでは、ハイパフォーマンスコンピューティング（HPC）技術を取り入れた超並列シミュレーションコードの開発にも力を入れており、また流体や運動論の方程式系をより高精度・高速に解くための計算アルゴリズムの研究にも取り組んでいます。



(上) オーロラを起こす電子および異なる波長でのオーロラ発光の数値シミュレーション

(左) 太陽風形成過程の3次元輻射磁気流体シミュレーション



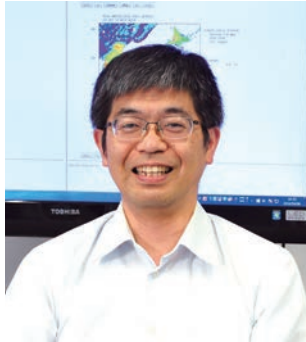
写真の説明：左より (1) 研究室の教員と学生及びスタッフの集合写真、(2) 研究室の日常風景、(3) 国際学会での発表の様子、(4)ISEE のスーパーコンピュータシステム、(5) 北欧でのオーロラ観測、(6) セミナーの様子

Webページ: <https://is.isee.nagoya-u.ac.jp/miyoshilab/>
連絡先: miyoshi_kyoin@isee.nagoya-u.ac.jp (三好研教員)
TEL:052-747-6916(秘書室)





坪木 和久 教授



篠田 太郎 准教授

台風、集中豪雨、豪雪、竜巻などの降水を伴う現象をマルチパラメータ（MP）レーダや雲解像数値モデル（CReSS）を用いて研究しています。

気象条件によって現れては消える雲は、私たちの目を楽しませてくれるとともに、恵みの雨をもたらしてくれることもあります。一方で、場合によっては激しい雨や突風によって、私たちの生活や生命の危機をもたらすこともあります。雲や雨などの現象は、大気中における流体力学や熱力学により支配されています。私たちの研究室では、物理学を基本として雲や雨という現象を理解することを目指しています。

そのために、主に降水現象を理解するための気象レーダ（マルチパラメータレーダ、偏波ドップラーレーダとも呼ばれます）と雲解像数値モデルを道具として研究を行っています。レーダや数値モデルを用いて雲の中の風（気流）や温度、水蒸気の量などの空間分布や時間変化を調べることで、雲の中の力学場や熱力学場（雲力学過程：cloud dynamics）と、雲・降水粒子の形状や大きさ、粒子数の時空間変化（雲物理学過程：cloud microphysics）の理解を目指します。

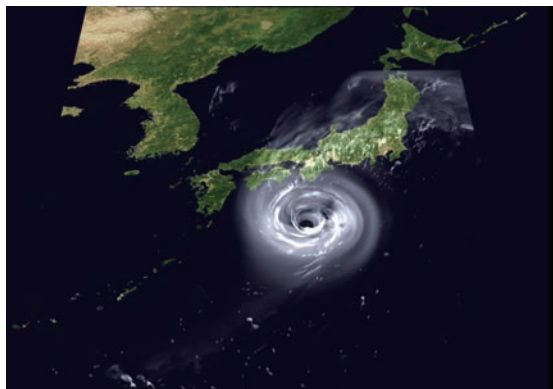
研究を行うためには物理学と物理数学の基礎と計算機を使いこなす能力が必要となります。そして、何よりも雲や雨という現象に対する興味（好奇心）があり、自分の頭で物事を考えられる学生さんの来訪を心待ちにしています。雲や雨に興味のある方は、是非とも研究室に来てください。

台風の内部構造や発達過程に関する研究

一つ一つの積乱雲の内部構造から台風全体の構造を表現できる高解像度の雲解像モデル CReSS を用いて、台風の内部の風や温度の場、雲・降水粒子の分布を再現し、急激に台風が発達する原因や発達が抑えられる理由の考察を行っています。

また、台風は海上で海面からの顕熱・潜熱フラックスを得ることで発達しますが、台風も海洋に影響を与えます（台風海洋相互作用）。雲解像モデル CReSS に海洋学研究室の相本准教授が開発した 3 次元海洋モデル NHOES を結合した CReSS-NHOES を用いて、台風海洋相互作用が台風の強度や進路に与える影響についての研究も行っています。

CReSS や CReSS-NHOES を用いて、社会的に影響が大きな台風や過去に大きな災害をもたらした台風（伊勢湾台風など）の再現実験も行っています。そして、将来気候（地球温暖化が進行していると想定される条件下）における台風の強度についても想定実験を行っています。想定実験で計算される強風や大雨の顕著な値は、大学間連携プロジェクトにおいて、被害軽減策の立案に役立てられています。



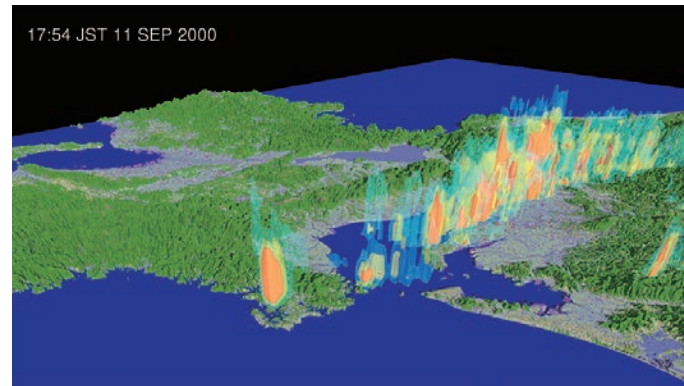
将来気候時に日本に接近する台風のシミュレーション結果例

豪雨・豪雪・竜巻・突風などの激しい気象現象に関する研究

豪雨・豪雪・竜巻・突風などの激しい気象現象は、積乱雲を含む降水システムによってもたらされます。

降水システムの内部構造（風や降水粒子の 3 次元分布）を観測するために、2 台の X バンドマルチパラメータレーダを運用しています。これまでに、名古屋市周辺（雷雲や雪雲、降水システムの観測）だけでなく、沖縄県（梅雨前線帯の降水システムの観測）、石川県や北海道（冬季の降雪雲の観測）、パラオ共和国（台風の発生に影響する熱帯域の降水システムの観測）などでレーダ観測を実施しています。マルチパラメータレーダにより取得されるパラメータを組み合わせて、降水システム内部の雨・雪・霰などの様々な種類の降水粒子の 3 次元分布を推定する手法も、当研究室で開発・改良を行っています。降水粒子の分布とドップラーレーダより取得される 3 次元風速場を用いて、降水システム内部の雲力学過程と雲物理学過程を組み合わせた解析を行っています。

また、雲解像モデル CReSS を用いてレーダでは観測できない水蒸気場や温度場、降水システム周辺の風の場を解析し、積乱雲の発達過程や降水システムの持続過程、竜巻の渦の生成過程などについても解析を行っています。



中部電力三国山レーダにより取得された東海豪雨発生時（2000 年 9 月 11 日 17 時 54 分）のレーダ反射強度の 3 次元分布。水色→黄色→橙色と変化するほど強い雨が存在することを示す。地上の赤い点は東海市の位置を示す。

雷の理解

雷は積乱雲の中で氷粒子（霰粒子と氷晶粒子）同士の衝突により電荷が生成され、雲内のある領域に蓄積された電荷が中和されることで発生します。雷を理解するためには、氷粒子の分布の再現、氷粒子同士の衝突による電荷分離過程の再現、そして電荷中和過程（発雷過程・放電過程）の再現が必要となります。当研究室では、雲解像モデル CReSS に電荷分離過程と電荷中和過程を組み込むことで、雷モデルの開発を行うとともに、電荷の蓄積過程と発雷過程の理解を進めています。

2010 年 7 月 15 日に岐阜県可児市周辺での大雨発生時の種類の降水粒子と雷の放電経路の 3 次元分布。白は雲水、青は雨、水色は雲氷、黄色が雪、桃色が霰の分布を示す。赤、青、黄色の太実線が雷の放電路を示す。

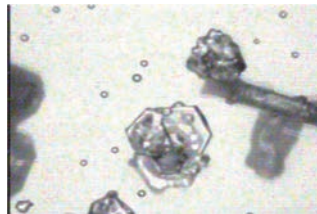
エアロゾル－雲－降水相互作用の理解

エアロゾル－雲－降水相互作用の理解は降水システムにおける雲微物理過程の理解だけでなく、地球全体の気候システムにおける雲の役割を理解する上でも重要です。

当研究室では、顕微鏡カメラを搭載した雲粒子ゾンデ（HYVIS）を気球に取り付けて放球し、上空の雲粒子の直接観測を行うことで、雲粒子の特徴（形、大きさ、数）の鉛直分布を観測しています。これまでに、マルチパラメータレーダ観測と同期して、沖縄県、北海道、パラオ共和国などで観測を実施しています。実際の粒子の特徴を観測することで、レーダ観測の結果や数値モデル CReSS の雲微物理過程の妥当性を評価することを目的としています。

また、最近導入された Ka バンド雲レーダは、降水粒子よりも小さな雲粒子の 3 次元分布を観測することができます。HYVIS や Ka バンド雲レーダを用いて、雲の 3 次元分布や雲内の粒子の分布の推定を行っています。

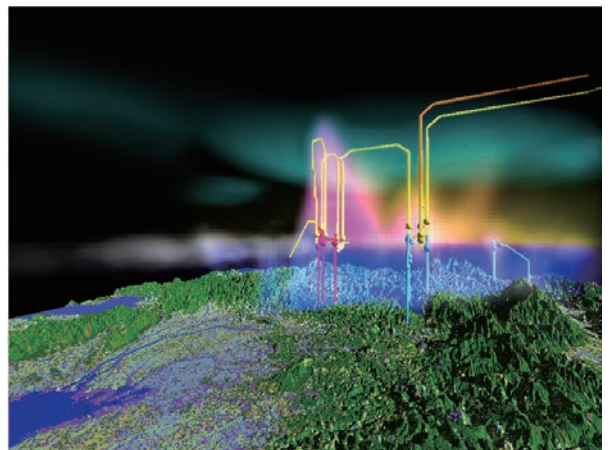
今後は、雲の発生につながる大気中の塵（エアロゾル）の分布や塵が雲の核となって雲粒に成長する過程の理解も目指していきます。エアロゾルによる雲粒の生成が起こる場所と生成される雲粒の大きさを理解することは、大雨の発生過程や台風の進路と強度の予測に大きな影響を及ぼすことが最近の研究で示唆されています。今後、CReSS にエアロゾル過程の導入やエアロゾルの発生源である陸面過程の精緻化を行っていくことで、エアロゾルから雲粒の生成過程、そして降水によるエアロゾルの除去過程などを調べていきます。また、エアロゾル－雲－降水相互作用の理解には、航空機を用いた観測も積極的に利用していきます。



（上）2013 年 6 月 15 日にパラオ共和国で放球された雲粒子ゾンデ HYVIS により取得された雲粒子と固体降水粒子の画像



（右）名古屋大学に設置されている Ka バンド雲レーダ



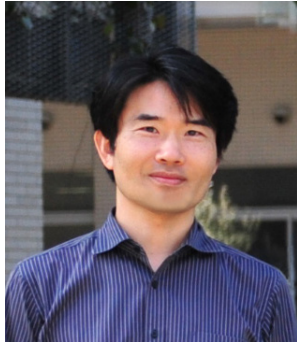
写真の説明：左より (1) 研究室メンバー、(2) パラオ共和国でのレーダ観測、(3) 台風観測に使用する航空機、(4) 沖縄での雲粒子を対象とした気球観測の様子、(5) 沖縄での集中観測時の様子（雨が降っていない場合）、(6) 雲レーダを用いた雪雲観測

Webページ：<http://www.rain.hyarc.nagoya-u.ac.jp/>
連絡先：tsuboki@nagoya-u.jp（坪木）
shinoda@rain.isee.nagoya-u.ac.jp（篠田）





高橋 暢宏 教授



増永 浩彦 准教授

地球観測衛星や地上設置機器などさまざまな観測装置を駆使して、地球水循環の要の一つである雲や降水が織りなす気候や気象の成り立ちを探る。

降水は生命にあまねく恵みの水をもたらすと同時に、大規模な水害の引き金になることもあります。しかし熱帯地方で頻発する雨は、太陽から受け取った熱を中・高緯度へ輸送する大気循環を力学的に維持する上で、欠かせない役割を果たします。さらに雲は、地球が太陽から受け取る放射エネルギーを直接左右する一方、熱赤外放射の再分配を通じて大気温室効果の促進にも一役買っています。雲と降水は私たちの生活に密接に関わることはもちろん、地球規模の気候変動においても積極的な役割を果たしています。

雲降水科学研究室では、雲や降水が地球の気候場と関わりあう物理的メカニズムをより深く理解するとともに、最新のリモートセンサ（衛星搭載・地上設置を問わず気象レーダや赤外イメージャなど）を用いて地球規模から生活規模までの雲や降水（雨・雪）現象を把握することを目指しています。

新たな衛星データ解析手法にもとづく熱帯の雲対流と大気環境場の変動解明

熱帯の雲は、環境場の条件が整えば、スコール・ラインのような激しく力強い降水システムに発達することがあります。激しい対流発達を促したり抑止したりという条件を決めるのは、水蒸気や静的安定度といった熱力学的要因や鉛直風シアから冷気の侵入などの力学的要因に至るまで多様です。しかし、対流雲は外的強制力に受動的に応答するだけではなく、周囲の湿度・気温・風系場に影響を与え最終的には大規模環境場の状態を変えてしまうこともあります。そのような熱帯対流と環境場の相互作用は、熱帯気象・気候システムの要の一つでありながら、その実態を読み解くことは大変難しく、いまでも十分な理解に至っていません。

衛星観測は、雲形成過程に伴う大気の迅速な（数時間ほどの）変化を調べる上では、必ずしも最適な手段とは言えません。低軌道衛星が地球上の同一地点の上空を通過する頻度は、せいぜい一日2回に過ぎないからです。現在取り組んでいる研究の特筆すべき点は、もっぱら低軌道衛星の観測データのみを駆使して、数時間から一日以内の変動を描くことに成功した点です。衛星観測による雲の発達と大気環境場の短期変動の研究に、新たな道を拓きつつあります。

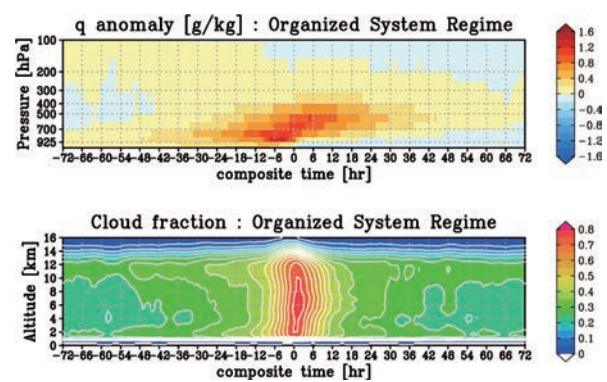


図1. 対流発達に伴う水蒸気変動（上）と雲量変動（下）

最新のリモートセンシング技術を用いた雲・降水物理量の推定とその応用

地球温暖化問題に象徴される気候変動において注目されていることの一つに雲や降水の役割とその変動が挙げられています。雲やエアロゾルは気候温暖化における放射強制力の寄与の不確実性が最も大きいものであり、また、降水は温暖化の結果として降水パターンの変化や豪雨・スーパー台風の増加などが懸念されています。本研究室はこのような問題に取り組むために最新のリモートセンシング技術を用いた雲や降水物理量を推定する手法の研究を行っています。特に、人工衛星搭載の雲レーダや降水レーダを用いた研究や地上設置の最新型のレーダを用いることにより、これまで観測が不可能であった現象をとらえることが可能となります。また、これらの情報を最大限に活用することも視野に入れた研究を行っています。

図2は熱帯降雨観測衛星（TRMM）の降雨レーダとCloudSatの雲レーダから推定した代表的な雨粒のサイズの地球上（海のみ）での分布をプロットしたものであり、このような知見は特に海上では得られず、データの蓄積が重要となっています。

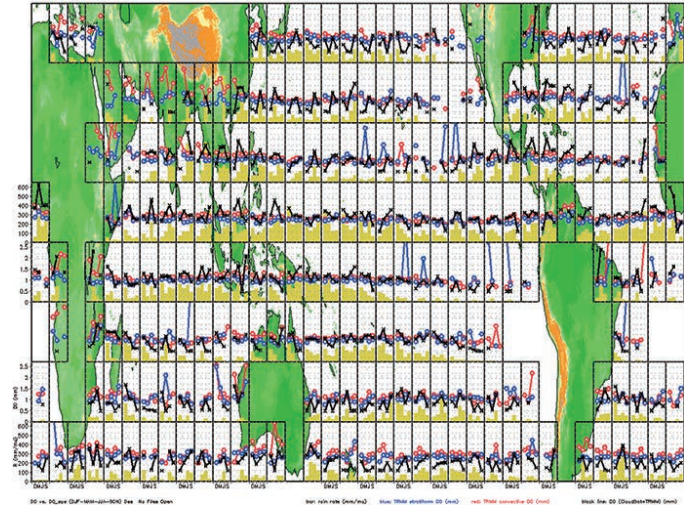


図2. 海上の降水の特徴（降水量、代表雨滴直径）（2006年12月から2007年11月の季節ごとの値）

衛星データシミュレータ SDSU の開発と数値モデル検証研究

衛星計測データを計算機上に再現する放射伝達シミュレーションは、リトリバー・アルゴリズムに欠かせないコンポーネントの一つです。放射伝達シミュレーションは、放射の吸収や散乱といった様々な物理過程を解きほぐしながら、放射と地球表面・大気構成物質が相互作用するありようを計算機上に再現します。放射伝達問題を解く計算手法は、実用上の理由からセンサ特性とそれそれに異なる最適化が施されています。たとえば、マイクロ波帯用に設計された放射伝達コードは、一般的には可視・赤外シミュレーション・プログラムと互換性はありません。しかし近年では、複数のセンサを搭載した地球観測衛星の登場により、さまざまなタイプのセンサに様に適用できる放射伝達コードへの需要が高まっています。衛星データ・シミュレータ・ユニット（Satellite Data Simulator Unit, SDSU）は、衛星搭載マイクロ波放射計、レーダ、可視赤外イメージャから得られたデータをシミュレートする目的のもと開発されました。SDSUパッケージの応用例としては、リトリバー・アルゴリズム開発はもとより、雲解像モデル（CRM）への適用も重要な課題の一つです。種々の衛星センサを想定したシミュレーション結果を実際の観測と比較し解析することにより、CRM性能のテストや改良の一助となることが期待されます。

地球観測を支えるリモートセンシング技術開発

気象学では理論（数値モデル）と観測の2つが大きな研究の柱となっており、観測に関しては技術の進歩が研究を支えているという側面があります。特にリモートセンシング技術は広範囲を短時間で観測できるメリットがあり、これまでもひまわりや気象レーダといった分野で大きな発展を遂げてきました。現在でも衛星観測では高性能なレーダを搭載した衛星や光学センサなどが開発されてきており、様々な分野で貢献しているほか、地上観測でも下の図に示すようなレーダ技術はマルチパラメータレーダからフェーズドアレイレーダ、さらに偏波機能を備えたマルチパラメータフェーズドアレイレーダといった、新しい技術を活かした降水観測技術に移行しつつあり（図3）、それらを有効に活用する研究も必要となっています。衛星搭載のレーダについても、技術成熟に伴って高度化・高機能化へと進んでいます（図4）。本研究室においても、主に最新のレーダのデータを用いた研究を行うとともに、将来の観測に向けてレーダの性能向上に対する観測データの品質向上などに関する基礎研究を行い、衛星搭載や地上レーダの開発に結びつける研究を行っています。



図3. 地上レーダの将来動向

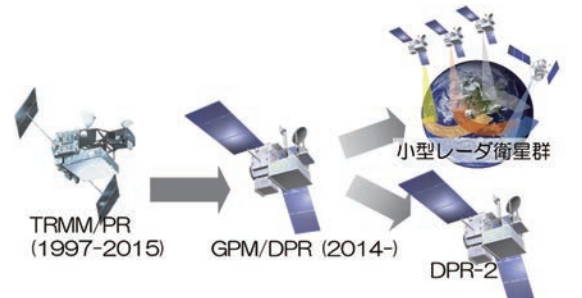


図4. 衛星搭載降水レーダの将来動向

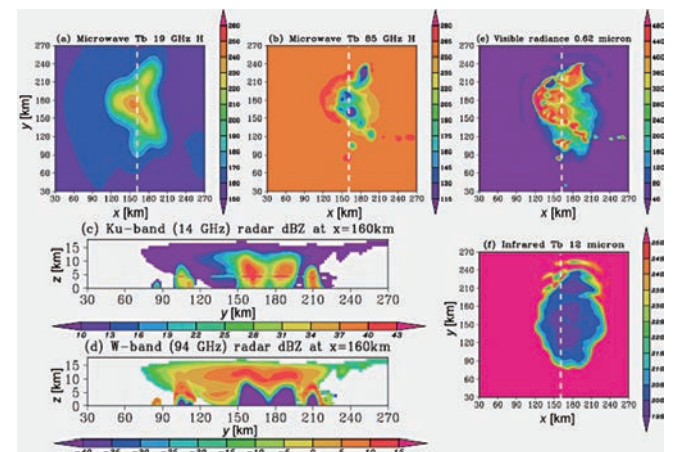


図5. SDSU で計算された疑似衛星観測データ



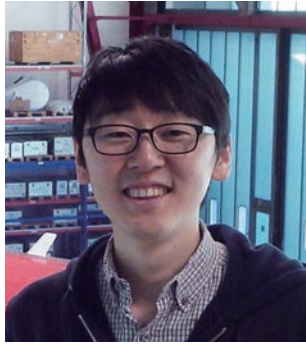
写真の説明：左より (1) 研究室メンバー、(2) 研究室セミナーの様子、(3)MP レーダの見学会、(4) パラオ共和国での集中観測の合間の一コマ、(5) ダジックアースを使った授業の様子、(6) 大学院生とのディスカッションの様子

Webページ：<https://cldprc.isee.nagoya-u.ac.jp/>
連絡先：ntaka@nagoya-u.jp（高橋）
masunaga@nagoya-u.jp（増永）





持田 陸宏 教授



大畑 祥 助教

雲凝結核としての働きなどを通して雲・降水過程や放射収支に関わる大気エアロゾルに着目し、化学を基盤とする野外観測・室内実験研究によって、その性状や動態、役割の解明を目指します。

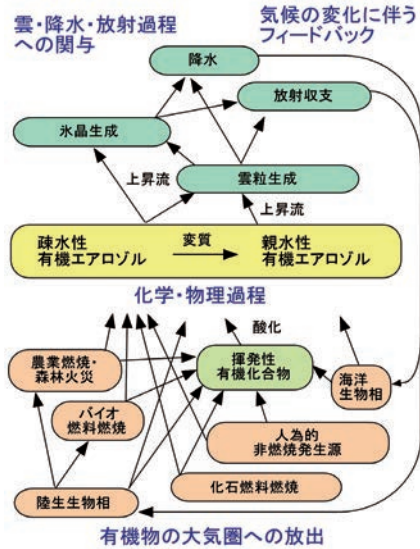
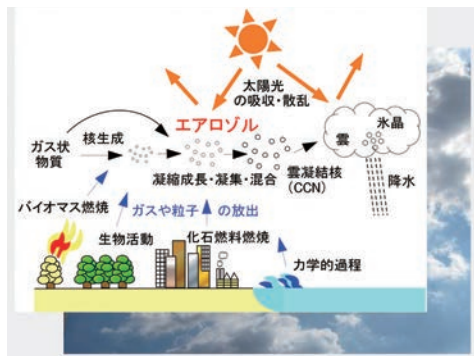
大気中には、自然や人間活動を起源に持つ様々な微粒子（エアロゾル）が浮遊しています。そして、このエアロゾルは雲粒が生成する際の核（雲凝結核）としての働きなどを通して、雲・降水過程や放射収支に関与しています。気象や気候を支配するメカニズムを解明する上で、エアロゾルの性状や動態、そしてそれに起因する役割を理解することは重要な課題となっています。

大気化学研究室では、エアロゾル質量分析などの先端的な計測技術を活用した野外観測と室内実験により、その性状や動態、役割の解明を目指しています。これらの研究では特に、大気輸送の視点を取り入れながら、エアロゾルの性状と化学組成の関係や、大気反応に伴う生成・変質を明らかにすることを重視しています。私たちは、このような「物質科学」の視点を取り入れた研究の取り組みを通して、大気エアロゾルの気象・気候に対する影響の理解への貢献を図ります。大気エアロゾルは高濃度で存在することで人間の健康に悪影響を及ぼす汚染物質であり、私たちの大気エアロゾル研究の取り組みは、大気質の理解にも貢献することが期待されます。

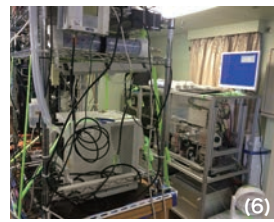
有機エアロゾルの化学構造と特性の研究

大気エアロゾルの 20%～90% は有機物が占めており、この有機物は、数千種類以上の化合物から構成されると考えられます。この有機エアロゾルの気象・気候への関わりを理解するためには、気象・気候への作用に関係する有機物の吸湿性や光学特性、また、それらを規定する化学構造の理解が必要となります。しかし、有機物は多様な起源を持ち、起源によって化学組成が異なる上、大気中で変質が進むことが指摘されており、有機エアロゾルがどのような環境においてどのような成分で構成されているのか、その全体像はまだまだ明確になっていません。また、エアロゾルの吸湿性・光学特性が、有機物の化学構造とどのように関係しているのかも十分に解明されていません。

私たちは、大気中の有機エアロゾルを採取した上で分画し、その化学構造・吸湿性・光学特性を解析する研究を発展させることで、有機エアロゾルの化学構造と特性をより深く理解し、エアロゾルの特性、ひいてはその役割に対する有機物の寄与を解明することを目指します。このため、質量分析法や赤外分光法の手法を用いて有機エアロゾルの化学構造に関する情報を取得した上、その吸湿性・光学特性を測定して化学構造と特性の関係の解析を進めます。



大気有機エアロゾルの起源・変質と気象・気候への影響



大気エアロゾルの吸湿特性と雲凝結核活性の研究

大気中においてエアロゾルは、周りの水蒸気を取り込んで大きくなり、また放出して小さくなることを繰り返し、時には雲粒に変化します。エアロゾル粒子を構成する化学成分が水を取り込む能力（吸湿特性）は、粒子が雲粒化する能力（雲凝結核活性）を規定している因子の一つであり、この吸湿特性と雲凝結核活性は、エアロゾルの雲・降水過程への関与を理解する上で鍵となる特性です。ところが、大気エアロゾルを構成する物質の組成は環境によって異なり、エアロゾルがどこでどのような吸湿特性、そして雲凝結核活性を有するのかを説明することは容易ではありません。

私たちは、吸湿特性測定用タンデム DMA (HTDMA) や雲凝結核カウンタ (CCNC) と呼ばれる先端計測装置を用いて、大気エアロゾルが空気中の水分を取り込んで成長する程度を詳細に調べています。そして、これらの装置で得られるデータと、エアロゾルの化学組成の分析を組み合わせることにより、粒子中の化学成分が、水の取り込み／蒸発などの熱力学的な平衡条件に、どのような寄与があるのかを評価します。極めて複雑な組成を持つ有機物がエアロゾルの吸湿特性・雲凝結核活性に及ぼす影響についての理解は特に不足しており、有機物の化学構造と吸湿特性の関係など、有機物の寄与を定量的に把握するための研究に力を注いでいます。



エアロゾル粒子の吸湿成長度と雲凝結核活性を測定するための装置群 (HTDMA, CCNC 等)

有機エアロゾルの不均一・多相反応に関する研究

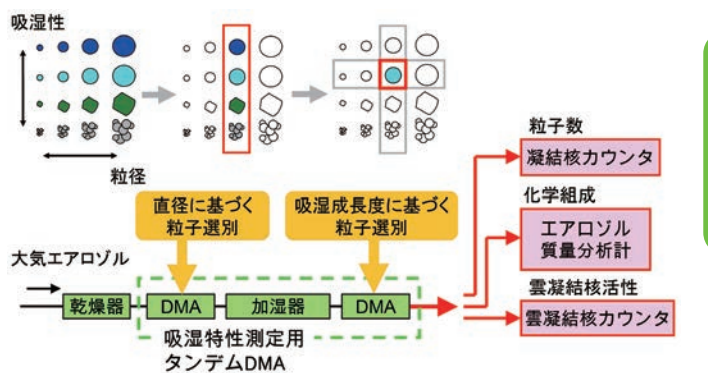
大気エアロゾル粒子の表面や内部では、大気中の気体が関与する化学反応（不均一反応や多相反応）が進行することで、粒子の組成や特性が変化していることが考えられます。したがって、大気中に放出された、あるいは大気中で生成したエアロゾル粒子がどのように成長・変質するのか、その「一生」を理解するためには、不均一・多相反応の寄与について知ることが求められます。

大気エアロゾルの不均一・多相反応に関して、単一の組成を持つ粒子など、極めて単純化された系における反応についてこれまで多くの研究がなされている一方、実際のエアロゾル成分を対象とする取り組みは十分ではありません。単純な系を用いる実験は反応素過程の機構などの探索・解明に有効である一方、その反応速度や収率、生成物の種類は、多様な化学成分が混在している実際のエアロゾルでは大きく異なる可能性があります。私たちの研究室では、実際のエアロゾルの組成に近づけた条件下で不均一・多相反応の実験を行うことで、有機エアロゾルの生成・変質の可能性について評価することを目指しています。

混合状態を考慮した大気エアロゾルの組成・特性の研究

現在、雲凝結核としての雲・降水過程への関与など、個々の粒子の違いが重要となる「個数」ベースのエアロゾルの分布・輸送・変質・特性に関する理解が立ち遅れています。これは、大気エアロゾルに関わるこれまでの観測・モデル研究の多くが、エアロゾル粒子の重量濃度をベースに平均化された情報を扱ってきたことと関係しています。今後の大気エアロゾル研究では、個々の粒子の性状を明らかにし、それらの混合状態の情報を如何に集約して大気中の役割の理解に結び付けるか、それを示す方法を見出すことが重要になると考えています。

個々のエアロゾル粒子を区分する指標として、歴史的には「粒径」が最も一般的に扱われてきました。しかし、同サイズの粒子でも、発生源・生成変質過程の違いにより、様々な組成・特性を持つものが大気中に混在しています。私たちは、吸湿特性測定用タンデム DMA (HTDMA) を用いることで、粒径以外に吸湿成長度（加湿に伴う粒径の変化率）を基準に粒子を選別することが、異なる組成・特性を持つ粒子の混合状態を理解する上で有効であると考え、大気エアロゾルの化学組成や特性を、エアロゾルの混合状態（粒径＋吸湿特性）とともに解析する研究を始めています。この取り組みにより、大気エアロゾルの特性や過程を、混合状態の視点も含めて把握する新しい研究の展開を図ります。

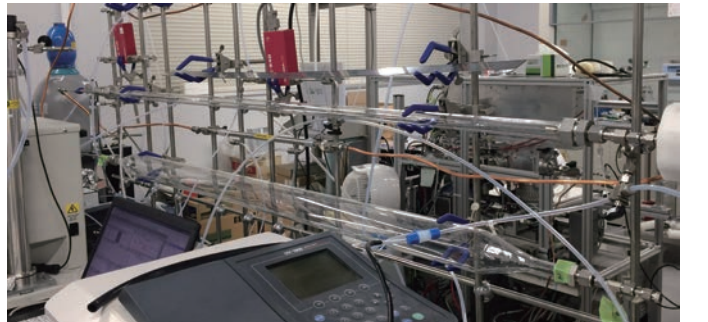


吸湿特性測定用タンデム DMA と他のエアロゾル計測器を組み合わせる、大気エアロゾルの混合状態の解析手法

光吸収性エアロゾルの動態と特性に関する研究

化石燃料やバイオマスの燃焼で発生するブラックカーボン (BC) は、太陽放射を強く吸収し、大気を暖める効果を持っています。また近年、人為起源の酸化鉄粒子による大気加熱効果の重要性も指摘されています。しかし、これらの光吸収性エアロゾルの気候影響の推定には未だに大きな不確実性があり、光吸収性エアロゾルの空間分布や特性を支配する「発生・輸送・変質・除去」の各過程を、正確な測定に基づいて定量的に理解することが求められています。

私たちは、人間活動の活発な都市域や、大気汚染物質の長距離輸送を捉える遠隔地、急速に温暖化の進行している北極域など、様々なフィールドで光吸収性エアロゾルの集中観測と長期モニタリングを実施しています。特に、レーザー誘起白熱法に基づく測定器 (SP2) を用いた個別粒子分析により、BC・酸化鉄の光学特性や雲凝結核能に大きな影響を及ぼす微物理量（粒径・混合状態）の定量が可能です。SP2 と他の測定器を組み合わせた観測により、光吸収性エアロゾルの動態や、濃度・被覆を変化させる大気化学・輸送除去過程の理解の深化を目指します。



エアロゾル粒子をオゾンに曝露する反応実験のための装置

写真の説明：左より (1) 研究室の集合写真、(2～4) 京都大学和歌山研究林における大気観測、(5) 観測作業の合間に、(6) 学術研究船白鳳丸に設置したエアロゾル測定機器

Webページ： <http://acg.isee.nagoya-u.ac.jp/>
連絡先： mochida@isee.nagoya-u.ac.jp (持田)





檀山 哲哉 教授



栗田 直幸 准教授



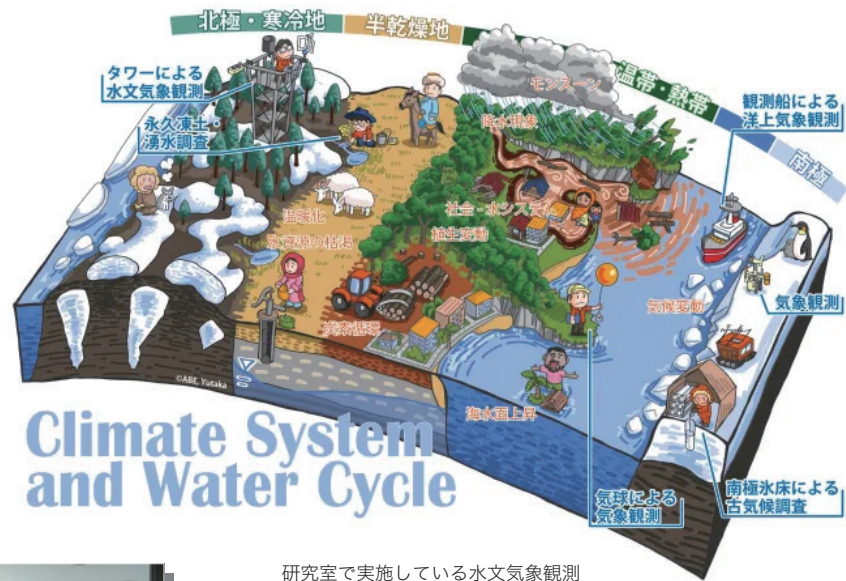
藤波 初木 講師

地球温暖化などの気候変動によって変化する水・物質循環を、さまざまな水文気象観測データを駆使して明らかにします。

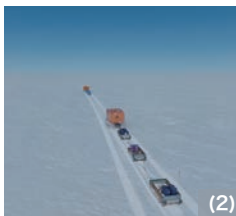
我々が利用している「水」はどこからくるのでしょうか？そして、地球温暖化が進行した将来も「水」を安定して利用し続けることができるのでしょうか？こうした疑問に回答するには、水循環の仕組みを理解するとともに、過去から現在までの水循環変化を明らかにすることが必要になります。そして、グローバル化の進展により世界各国との相互依存関係が強まった現在、地球規模の視点で水循環を捉える重要性が高まっています。水文気候学研究室では、北極・寒冷圏、アジアモンスーン地域、南極圏などの世界各地で水文気象観測を実施し、観測データを活用して地球規模で水循環の動き明らかにする研究に取り組んでいます。

野外フィールドでは、観測タワーを用いた水文気象観測、永久凍土や湧水調査、無人気象観測測器を用いた気象観測、観測船を用いた洋上気象観測、南極氷床域での雪氷試料採取などを実施しています。そして、過去から現在までの長期水文気象観測データを活用して、温暖化の進行にともなう水循環の変化、その変化を引き起こした気候因子の解明などの研究に取り組んでいます。また、一般的な水文気象観測だけでなく、水蒸気の起源情報を保存する水同位体トレーサーを用いた同位体観測も実施しています。他にも、全球気象データを利用した気候解析、全球の水輸送や河川流出を再現できる数値モデルを使った水起源解析にも取り組んでおり、観測、データ解析、数値シミュレーションなど様々な手法を駆使して世界規模でおこる水循環の仕組みの理解に取り組んでいます。

地域スケールから地球規模までのマルチスケールな水・物質循環に興味のある方、寒冷圏、アジア各地、南極大陸といった世界各地のフィールドでの観測に参加したい方など、水循環に興味のある方は、是非とも研究室に遊びに来てください。



研究室で実施している水文気象観測

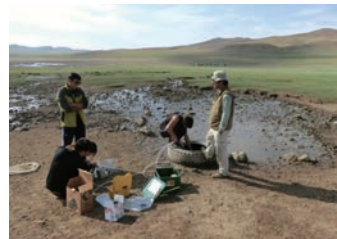


写真の説明：左より、(1) 研究室メンバー、(2) 南極大陸での移動風景、(3) モンゴルでのドローン観測、(4) 気象解析を行うチベット高原の風景、(5) 昭和基地沖に停船する南極観測船、(6) 研究室セミナーの様子

Webページ： <https://hydroclimatologylab.home.blog/>
 連絡先： hiyama@nagoya-u.jp (檀山)
 nkurita@isee.nagoya-u.ac.jp (栗田)

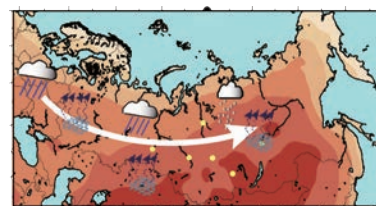


永久凍土調査・湧水調査（北極・寒冷圏）



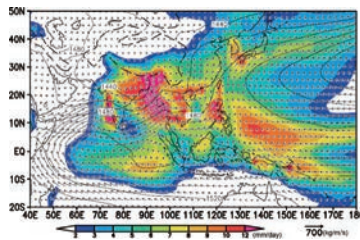
地球温暖化によって、東シベリアとモンゴルでは永久凍土表層の融解が進んでいます。現地の湧水を採取し、湧水中のトリチウム濃度やフロン類の濃度を分析することで、凍土に含まれる地下水がどのくらい融解しているかを調べています。

大陸スケール水循環の解明（数値モデリング）



ユーラシア大陸の内陸部は海洋から数千キロメートルも離れていますが、夏には降水が高頻度で観測されます。この水はどこからどのような経路で輸送されてきたのでしょうか？世界の降水分布を再現できる数値モデルを使ってこの謎の解明に取り組んでいます。

アジア域における降水活動（データ解析）



アジアモンスーンによる豊富な降水は、世界人口の約6割の生活を維持しています。その雲・降水は様々な時間・空間スケールの変動を伴います。データ解析を通して、雲・降水活動の実態とその変動機構の解明を行い、地球の気候システムの理解を目指しています。

水文気象観測（北極・寒冷圏、南部アフリカ）



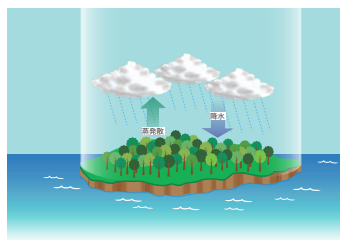
東シベリア、モンゴル、ナミビア北部で水文気象観測を行い、蒸発散量や二酸化炭素交換量の季節変動～年々変動を推定して気候変動や人間活動との関係を調べています。それらをもとに、気候変動に対する適応策に結びつけることを目標としています。

温暖化・人間活動影響の検出（南極大陸）



東南極地域は、記録的な豪雪が頻繁に発生するなど、温暖化の影響と疑われる現象が観測され始めました。豪雪をもたらすメカニズムを解明するとともに、その発生頻度が温暖化の進行とともにどのように変化するかを調べています。

気候変動と植生（北極・寒冷圏、海洋大陸域）



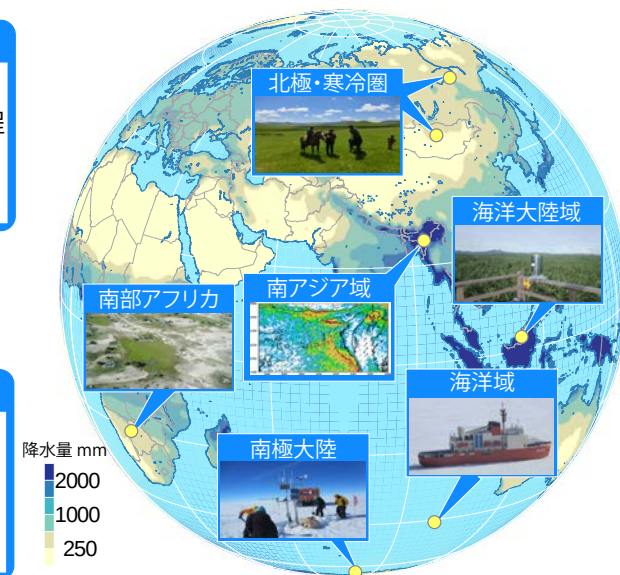
タイガ林や熱帯雨林といった植生は、気候変動や人間活動によって急激に変化しています。水循環を中心とした気候変動と植生との関わりを現地観測やデータ解析から明らかにし、気候変動が植生に及ぼす影響や、植生の変化が水循環に及ぼす影響を調べています。

データ解析

- ・アジア域における降水活動
- ・海洋大陸における水循環過程
- ・乾燥域の大気陸面相互作用
- ・熱帯擾乱の発生環境

数値モデリング

- ・極端現象のメカニズム解明
- ・大陸スケール水循環の解明
- ・古気候における水循環復元
- ・気候変化に伴う植生変化予測



研究フィールドと現在行っている多彩な研究課題

フィールド観測

- ・永久凍土調査・湧水調査
- ・水文気象観測
- ・観測船による洋上気象観測
- ・温暖化・人間活動影響の検出

ラボ実験

- ・水トレーサー物質の分析
- ・温室効果ガスの分析
- ・分析手法の高度化
- ・自動計測装置の開発



相木 秀則 教授



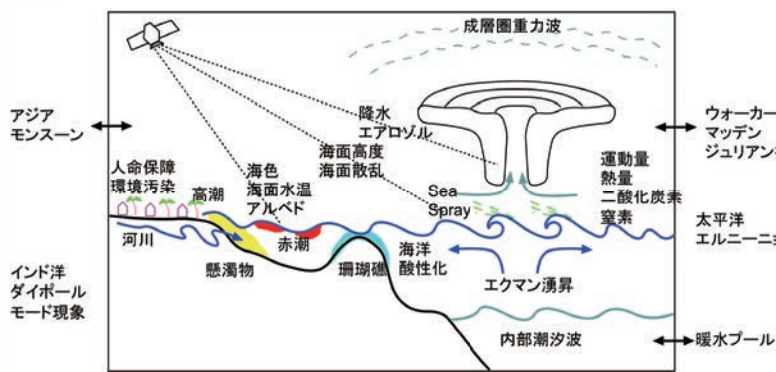
三野 義尚 助教

数値シミュレーション・海洋観測・衛星リモートセンシングにより、海洋の物理・化学・生物過程の自然の変動と、人為的な変化を明らかにする。

21 世紀に入ってから海洋熱波が頻発する中で、私たちの生存基盤となってきた日本周辺域の温和な気候、豊かな水・水産資源は、今後も持続しうのでしょうか？地球の表層の約 7 割は海洋に覆われており、表層に存在する水の 97% が海水からなっています。そのため、海洋は地球上のエネルギーの流れや物質の循環を大きく左右しており、気候や気象にも強く影響しています。また、そこには多くの生物がおり、人間の食料となるばかりではなく、二酸化炭素のような物質の循環にも影響をしています。これだけ広い海洋ですが、人間生活の影響を着実に受けており、特に陸域から淡水など供給のある沿岸域では生態系が直接的な影響を受けている他、人間の引き起こす気候の変化とも密接に関連しています。私たち海洋学研究室では、数値シミュレーションの研究、海洋の現場観測、最新の人工衛星による観測データの解析などを進めています。海洋の熱収支や流れ・波浪が大気環境とどのように相互作用し、気候や台風などの気象現象とどのように関連し合っているのか、これによって起こる海洋の流れや混合過程が海洋の一次生産者である植物プランクトンを基盤とした海洋生態系にどのように影響を与えているのか。逆に生態系が物理現象や気候へ影響する可能性はないのか。互いに関連し合う、海洋の物理・生物・化学過程、さらに気候や気象現象まで含めて研究しています。

海洋圏の環境・災害問題についての数値シミュレーション

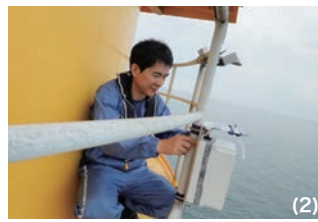
私たちは ISEE 気象学研究室と協力して大気モデル CReSS と海洋モデル NHOES と波浪（海面の風波やうねり）モデルの結合コードの開発を行ってきました。これにより台風に代表される突発的な顕著現象に伴う高潮・高波などの海洋災害の予測精度の向上を目指しています。大気と海洋を結合した数値シミュレーションモデルは最近では珍しくありませんが、これに波浪モデルを加えているのは最先端の研究の 1 つです。今後は海洋生態系モデルの導入や衛星観測との比較を充実させ、さらに海面の白波被覆率や海面近傍における乱流散逸率や同じく海面近傍における塩分（降水・河川起源）のような新しい物理変数を核として、観測研究とモデル研究の両輪を進めます。これらにより発展途上国の自然環境・災害問題の監視・予測に貢献します。



海洋圏の数値シミュレーション研究と多圏モデル・連携課題の模式図



(1)



(2)



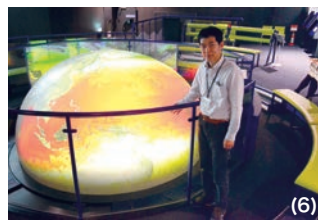
(3)



(4)



(5)



(6)

海上の波しぶきの観測

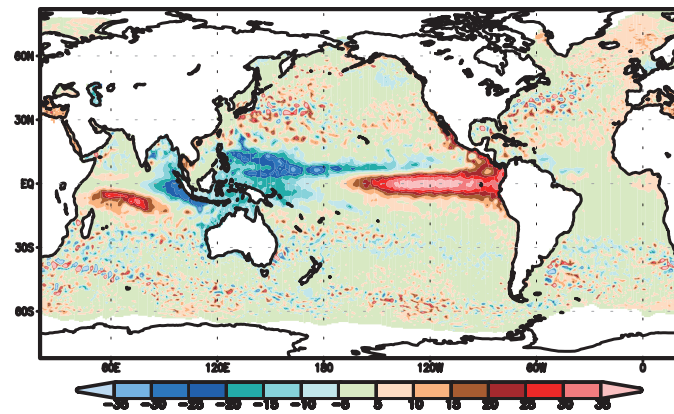
台風通過時の海面では強風によって波浪が発達し無数の白波砕波が発生します。その 1 つ 1 つの波の峰が強風に引きちぎられて大量の飛沫が海上数 10m の高さに浮遊します。大粒径の飛沫は質量が大きいため大気海洋間の運動量・熱・CO₂ 輸送において重要な役割を果たします。小粒径飛沫は海洋性エアロゾルとなって上空数 km で雲の凝結核となるとともに大気の放射収支に寄与します。私たちは、海上波しぶき光学粒子計とそれを用いた測定システムを開発しました。この測器は 8 粒径レンジ 0.1 秒毎の分解能を持つのが特徴であり、2017 年 8 月に台風 5 号が和歌山県の海上観測塔に接近した際に風速 23 m/s、波高 3.8 m の環境下での測定に成功しました。この波しぶき計は、2022 年 7 月に北海道沖での航空機と船舶の同時観測、さらに 2022 年 10 月～2023 年 2 月に南極観測航海で使われました。この研究の面白さは、物理分野と化学分野の両方に寄与することです。



海上の波しぶきの観測

太平洋・インド洋・大西洋・南大洋における各種波動と気候変動との相互作用の解析

各種波動によるエネルギー伝達経路を同定することで、気候変動における波動の役割の解明を私たちは目指しています。海洋の赤道ケルビン波や赤道ロスビー波は、太平洋のエルニーニョ現象やインド洋ダイポールモード現象のような熱帯の気候変動において、重要な役割を担います。人工衛星による海面高度観測データの蓄積や 3 次元海洋数値シミュレーションの発達によって、これらの波動・渦を詳細に診断することが近年可能になってきました。海洋中には、時空間スケールの小さいものから順に並べると慣性重力波・ケルビン波・ロスビー波が存在します。また黒潮・メキシコ湾流・南極周回流のような基本流が不安定を起こして渦が形成されます。海洋では、海岸線・海面・海底といった境界条件が波の性質を決めるという面白さがあります。私たちは励起・維持機構がまだわかっていない波動・渦の研究を進めます。



人工衛星搭載海面高度計によって観測された 1997/1998 年のエルニーニョ現象 (cm)

大気海洋境界の数値シミュレーション

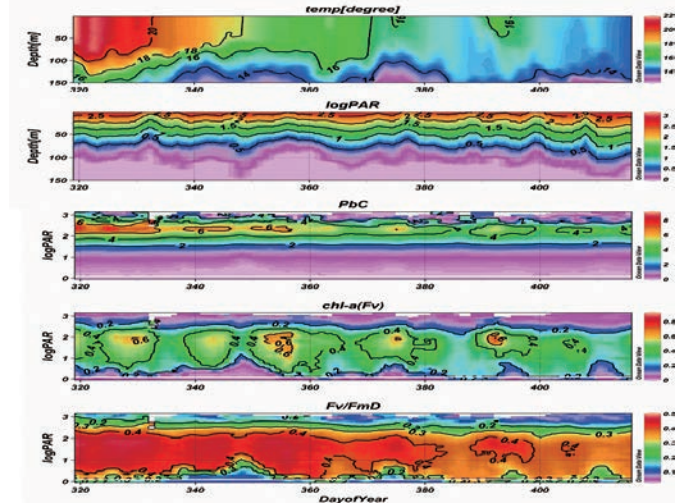
大気海洋境界における物理・化学・生物過程は、海表面での CO₂ 吸収や雲形成を介して地球の気候に影響します。大気海洋間の物質循環を左右する様々な物理量の交換は、主に海上風速と海面水温、ひいては波浪とこれにより生成する波しぶき粒子に深く関係します。私たちの研究は、観測とモデルの両方において従来の鉛直解像度では動態把握が不十分であった海面近傍、すなわち水深 10m から上空 1km の領域を対象とします。海上風速以外の物理量や大気境界層中のエアロゾルの鉛直プロファイル、海洋有光層中の塩分や生態系関連パラメータの鉛直プロファイルにも注目し、大気海洋相互作用の生物地球化学的側面の理解に繋げていきます。その基礎モデルとして私たちは、大気海洋境界層を連続した LES モデル研究を拡充します。このように海洋・気象・大気化学・土木工学の知見を組み合わせ、微細過程のメカニズムを解明することを目指しています。

海洋・地球・宇宙にわたる多圏を俯瞰するようなエネルギー論を展開

従来の研究による概算では、太陽のエネルギー放射が 10³⁴ J/yr (ジュール/年)、地球の大気・陸域・海洋などの表層圏に届く分が 10²⁴ J/yr、光合成によって固定される分が 10²¹ J/yr、食糧となる分が 10¹⁹ J/yr、人類の産業によるエネルギー消費が 10²⁰ J/yr のオーダーとなっています。このようなエネルギー量の相互比較にもとづく世界観と照らし合わせながら、私たちはフューチャーアースや地球温暖化問題における炭素収支の理解と肩を並べるような研究を進めます。

高速フラッシュ励起蛍光法による海洋基礎生産力の実測

近年、衛星リモートセンシングによって海洋の基礎生産力の広域分布が推定されるようになりましたが、その実利用のためには実測値で検証することが不可欠です。しかしながら、船舶観測における培養法を用いた実測は時間・労力コストが大きいため、時空間的に検証データが不足しているのが現状です。そこで、私たちの研究室では、高速フラッシュ励起蛍光法 (FRR 法) を用いた基礎生産力の実測手法の確立を目指しています。FRR 法は海水中の植物プランクトンに対して青色光を高速で点滅照射し、得られた蛍光の短時間変動 (～1 秒間) からプランクトン 1 細胞当たりの光合成パラメータを算出します。この測定を係留ブイやプロファイリングフロート等を用いた観測と組み合わせることで、連続的に基礎生産力をモニタリングすることが可能になります。また極めて高い時間分解能をもつため、従来の船舶観測では捕捉できなかったような、様々な時間スケールの環境変化に対する植物プランクトンの生理学的応答を明らかにすることが期待されています。



高速フラッシュ励起蛍光光度計 (FRRF, 左写真) を搭載した係留観測システムで取得した時系列データ。3～5 段目: クロロフィル量、光合成速度、PS II の最大量子収率

写真の説明: 左より (1) 回転水槽による高校生むけ体験学習、(2) 京都大学田辺中島観測塔にて、(3) 浦都市科学館にて、(4) 東シナ海での海水採取、(5) 伊勢湾での観測、(6) JAMSTEC 横浜研究所にて

Webページ: <http://marine.isee.nagoya-u.ac.jp/>
連絡先: aiki@nagoya-u.jp (相木)





南 雅代 教授



加藤 丈典 准教授

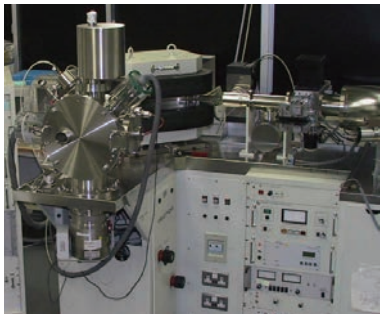
地球のフィールドスケールから顕微鏡スケールまでの空間情報に時間軸を入れ、地球誕生から現在まで 46 億年にわたり地球で生じた現象とそのメカニズムを解き明かす。

地球年代学とは、さまざまな宇宙・地球物質の年代を決定し、太陽系惑星の一つとしての地球に記録された歴史を紐解いていく学問分野です。46 億年前に生まれた地球は常に変動しており、その情報は地球内外の物質に記録されています。過去から現在にわたり地下深部から宇宙までの広い範囲で起きた現象を理解するためには、「いつ」「どのような現象が」「なぜ」生じたのかを正確に知る必要があります。そのためには、フィールドワークによりマクロスケールの地球の姿を観察し、ミクロスケールに記録された物理情報、化学情報を正確に引き出さなければなりません。

地球年代学研究室では、特に「いつ」の現象なのかという問題を、放射性同位体の壊変を利用した年代測定法や、名古屋大学が世界に先駆けて開発・実用化した CHIME 年代測定法などを用い、隕石、岩石、鉱物、堆積物、生物化石、石筍、地下水、氷、木片、考古遺物など、さまざまなものに時間軸を付与することによって明らかにする研究を行っています。本研究室は、名古屋大学大学院環境学研究科地球環境科学専攻の協力講座である「地球史学講座」を博物館とともに担い、年代学に関する高度な知識と先端的分析技術を修得した大学院生及び若手研究者の育成を目指しています。地球科学・化学・物理学・生物学・考古学など、理系・文系さまざまな分野出身の学生と一緒に研究を推進しています。興味のある方は、是非とも研究室を訪ねてみてください。

放射性同位体を用いた年代測定・環境解析

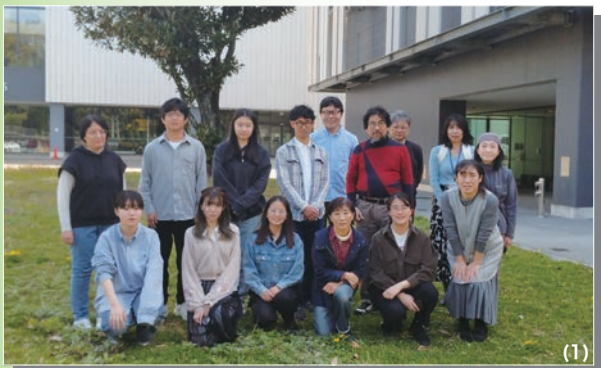
親核種と娘核種の同位体比の時間的変化を利用する方法（ルビジウム (Rb)- ストロンチウム (Sr) 法、サマリウム (Sm)- ネオジウム (Nd) 法、ウラン (U)- トリウム (Th)- 鉛 (Pb) 系列法など）、宇宙線生成核種を利用する方法（放射性炭素 (^{14}C) 法、ベリリウム-10 (^{10}Be) 法など）を利用し、岩石、鉱物、化石、堆積物などの年代測定を行っています。年代測定だけでなく、微量同位体をトレーサーとした古環境解析や環境動態解析の研究も行っています。環境史学研究室と密接に関わり合いながら、加速器質量分析装置を使い、時空間変動に着目した宇宙・地球環境の性状と動態に関する研究にも取り組んでいます。 ^{14}C 以外の宇宙線生成核種を用いた研究はまだ発展途上ですが、今後、他の宇宙線生成同位体を使った新たな研究を開始していく予定です。皆さんと協力して、超高感度分析による新たな研究分野の創造を目指します。



Sr 同位体比を高精度に測定可能な表面電離質量分析装置



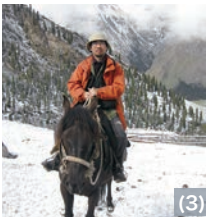
^{14}C を高精度に測定可能なタンデロン加速器質量分析装置



(1)



(2)



(3)



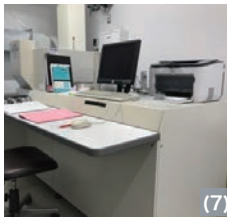
(4)



(5)



(6)



(7)

同位体地球化学による地球環境変動の解明

本研究室では過去の地球で起こったさまざまな現象に年代軸を与えるとともに、年代測定を地球環境に応用する研究や、新しい分析方法の開発など、幅広い分野の研究を行っています。本研究室で行っている研究の一部を以下に紹介します。

- ・細粒河川堆積物を用いた日本の広域 Sr 同位体比分布図
- ・河川・湖沼堆積物の ^{10}Be の吸着・溶脱プロセスに関する研究
- ・石筍やトラバーチンによる古気候解析
- ・炭酸コンクリーション中の Sr 同位体比を用いた地層の形成年代決定
- ・永久凍土中の地下水の正確な形成年代決定のための基礎研究
- ・火山泥流に含まれる木片の ^{14}C 年代に基づく火山噴火周期解析
- ・南極隕石の落下年代によるペアリングの研究



Sr 同位体比分布図作成のための河川堆積物採取



石筍を用いた古気候復元のための滴下水の分析

名古屋大学が世界に先駆けて開発・実用化した CHIME 年代測定法

名古屋大学が 1990 年代に開発した CHIME (Chemical U-Th-Total Pb Isochron Method) 年代測定法は、ウラン・トリウムが放射壊変により鉛になる現象を用いています。CHIME 年代測定法は、同位体年代測定ではなく化学年代測定であり、電子プローブマイクロアナライザー (EPMA) を用いることにより、ミクロスケールのサブグレイン年代測定を非破壊で行うことが可能です。本研究室では、モナザイト・ジルコン・ゼノタイムなど様々な鉱物のサブグレイン年代測定を行っています。

これらの鉱物は熱に対して強く、いったん形成されるとその後高温変成作用などを被っても年代情報を保持し続け、また 2 次成長により年代累帯構造を形成することがあります。ミクロンスケールの年代累帯構造を CHIME 法により正確に測定することにより、鉱物の成長記録を知り、地球の歴史を理解することができます。

EPMA による CHIME 年代測定

CHIME 年代測定には EPMA を用います。U や Pb など通常の鉱物には数 10 ～数 ppm 以下しか含まれないような微量元素を効率よく定量するための分光系の設定や電子線を安定して長時間照射するための改良などがなされています。また、バックグラウンド測定やピーク分離など、微量元素の検出感度を上げて、より正確な定量分析を行うための基礎的研究を続け、装置を実用化しました。微量元素測定技術は年代測定以外にも応用され、ジルコン中のチタンを用いた地質温度計などを用いた研究も行っています。



第 2 世代の CHIME 年代測定装置

文化財資料の高精度 ^{14}C 年代測定のための化学処理法の開発

考古遺跡から出土する炭化物、骨化石は ^{14}C 年代測定の有効な試料であり、考古学ならびに古環境の分野で広く利用されています。正確な ^{14}C 年代を得るには、土壌埋没中に資料に取り込まれた外来炭素成分（特に腐植酸）を適切な化学処理で除く必要があります。効果的かつ効率的に腐植酸を除去する化学処理法や試料加熱法など、文化財資料の高精度年代測定のための化学処理法の開発研究を行っています。



化学処理法の検討に用いた炭化木試料



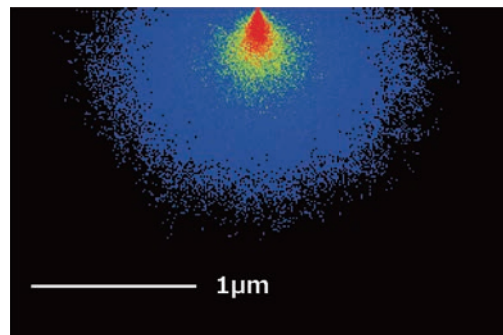
骨のバイオアパタイトを用いた ^{14}C 年代測定。

写真は、貞慶と推定される火葬骨（左が低温の熱、右が高温の熱を被った骨片）



CHIME 年代測定法の高精度化と測定可能年代の拡張

EPMA 分析における化学組成の正確さは、エックス線の測定、補正計算および標準物質の化学組成の正確さで決まります。CHIME 年代測定法で新生代の岩石の正確な年代測定が可能な研究機関として、さらなる測定法の改良を行っています。実際に測定した岩石で最も若いものは 1700 万年前に形成されたヒマラヤの岩石です。そして、100 万年前の岩石も測定可能にするため、より正確なエックス線強度の測定法、補正計算の改良を行っています。また、海外の研究機関と協力し、標準物質の品質維持も行って



モナザイト中のトリウム M 線の発生領域（シミュレーション）

写真の説明：左より、(1) 地球年代学研究室を含む年代測定研究部の集合写真、(2) 国内・(3) 中国天山山脈・(4) アメリカユタ州におけるフィールド調査での一コマ、(5) ^{14}C 試料調製を行う学生、(6) CHIME 年代測定前の顕微鏡観察、(7) XRF 分析装置

Webページ：<https://www.nendai.nagoya-u.ac.jp/>
連絡先：minami@nendai.nagoya-u.ac.jp（南）
kato@nendai.nagoya-u.ac.jp（加藤）





北川 浩之 教授



小田 寛貴 助教



早川 尚志 助教

¹⁴C 加速器質量分析を用いた正しい年代編年のもとに、自然と人類の歴史を調べ、それらの接点を探る。

環境史学は、工業や農業による水や空気の汚染、1960年代以のオゾン層の枯渇、人間活動による温室効果の増大など地球環境問題に対する意識の高まりにより生まれた比較的新しい学際的な学問分野です。環境史学研究の主な目的は、過去に遡って、人類がどのように自然環境に影響されてきたか、そして自然環境によって人類はどのような影響を受けたか、その背景にどのようなメカニズムがあるかを理解することです。年代測定研究部・環境史学研究室では、加速器質量分析法による炭素 14 年代測定や環境試料の安定同位体分析を主な研究の手段として、自然と人類の歴史、それらの相互関係の詳細な理解を目指しています。

加速器質量分析法による高精度な炭素 14 分析

加速器質量分析は英語で Accelerator mass spectrometry (AMS) です。AMS 法とは、通常の分析で測定が不可能な微量の原子を測定する超高感度分析です。環境試料に極僅か含まれている宇宙線生成同位体 (¹⁴C, ¹⁰Be, ²⁶Al など宇宙線の作用で生成される同位体) を高い確度・精度で分析することができます。宇宙線生成核種の一つは質量数 14 の炭素同位体 (¹⁴C) です。¹⁴C は 5,730 年の半減期で壊変する放射性同位体で、過去 5 万年間の年代測定に利用されています。また、環境試料の ¹⁴C 分析から、地球システムの性状や変動を探ることもできます。環境史研究室では、加速電圧 3 メガボルトで荷電粒子を加速できるタンデム型 AMS を運用し、環境試料や考古・歴史時代資料の高精度な ¹⁴C 分析を行っています。



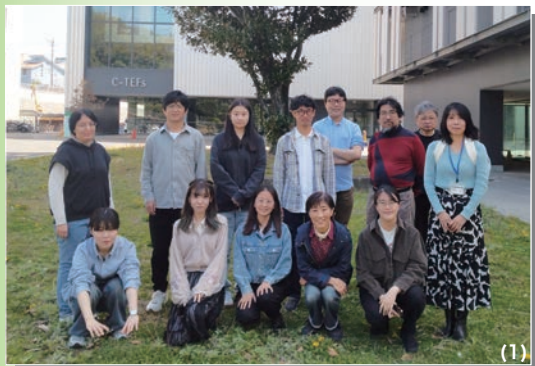
¹⁴C 測定用の加速器質量分析装置

パレオアジアの環境変動・文化史

約 20 万年前頃のアフリカ大陸で誕生したホモ・サピエンス (新人) は、10 ～ 5 万年前頃以降、ユーラシア各地の多様な環境に適応しつつ拡散し、先住者である旧人たちと交替しました。新人がアジア各地に拡散し定着した時代のアジア (パレオアジア) の環境・文化を探り、アジアにおける新人文化の形成過程の実態とその背景を明らかにすることを目指しています。国際共同研究 (死海深層掘削プロジェクトなど)、アジア各地の気候学者や考古学・民族学研究者と連携した現地調査 (パレオアジア文化史学プロジェクト) を進め、これらの研究プロジェクトで得られた成果をもとに、パレオアジアの新人拡散過程や文化史を再現できるモデルの開発にも手がけています。



国際陸上科学掘削計画・死海深層掘削プロジェクト



(1)



(2)



(3)



(4)



(5)



(6)

環境同位体と地球システム変動解析

放射性同位体および安定同位体は、地球システム (陸域・海洋・大気) 内で引き起こされる各種のプロセスの解明に有効で (時には、「環境ト्रेसー」とも呼ばれています。)、過去の気候変動の復元や現在の私たちが直面している環境問題の解決のための強力なツールとなります。環境史学研究室では高精度な ¹⁴C 分析が可能な加速器質量分析装置、デュアルインレット方式と高温熱分解装置を備えた連続フロー式の安定同位体質量分析装置を主に利用して、過去、現在の気候・環境変動解析、地球表層における物質循環 (たとえば、地球規模の炭素循環など) や生物地球化学プロセスの解明、パレオアジアの人々の居住環境やライフスタイルの探求を進めています。



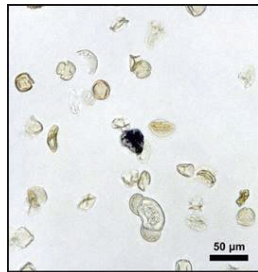
安定同位体質量分析装置
(左:デュアルインレット方式、右:高温熱分解装置を備えた連続フロー式)

歴史時代資料の年代測定と年代を決定した「新出」資料を用いた歴史の解明

¹⁴C 年代測定法は、長い間、先史時代の考古資料を対象とした手法とされてきました。しかし、約 1 mg の炭素試料での分析が可能な AMS の開発、¹⁴C 年代という自然科学的年代を暦年代に換算する較正法の確立、また年代測定の精度・確度の向上といった分析法の進歩によって、貴重であり、数十年の年代差が問題となる歴史時代資料に対する年代測定の道が拓かれてきました。そこで、古文書や美術工芸品といった資料の年代測定法の開発に取り組んでいます。年代や真贋のわからない古文書や美術工芸品を、歴史学・考古学・古典文学・書跡史学・美術史学などの資料として扱うことはできません。¹⁴C 年代測定法によってこれらの年代が判明するということは、歴史学などにとって実質的な新出資料の発見になるのです。そこで、こうした歴史時代資料の年代測定と、年代を決定した「新出」資料を用いることで、これまで明らかにすることができなかった新たな歴史の解明を進めています。

花粉・植物遺体分析により先史時代の環境・人類社会を探る

湖沼堆積物や泥炭に含まれている花粉や植物遺体の分析を行い、そのデータを数理学なアプローチで解析を行うことで、ユーラシア大陸の後期第四紀の気候や植生を定量的に復元することができます。その結果と考古学や地球科学のアプローチで得られる多様な情報を総合的に解釈し、先史時代の環境と人類の相互作用—気候変動がいかに人類に影響を及ぼしたか、人類社会がいかに環境に影響を及ぼしたか—について検討しています。また、日本、中国、ロシアなどの遺跡発掘で採集した植物遺体や炭化種子の解析から、狩猟採集民の自給自足経済、植物栽培、穀物の栽培の地理的分布など、先史時代における植物の利用、生活様式、社会について探求しています。



インド・ヒマラヤの高山湖の湖底堆積物 (8000 年前) から抽出した花粉化石の顕微鏡写真

歴史文献による過去の太陽地球環境の復元

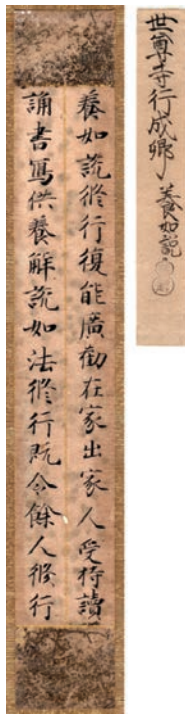
太陽の大規模な爆発現象が発生すると、地球近傍の宇宙環境に大きな影響を与えることが知られています。また、太陽活動の長期的な変動の様相によっては、地球環境に影響を及ぼすことも指摘されています。太陽地球環境の変動について、科学観測のデータベースが本格的に整備されているのは、多くの場合、過去 1 世紀弱の期間に限られています。科学観測データベースの時間軸では捉えきれない極端現象を把握するためには、世界各地の歴史文書、あるいは古文書、アナログ観測記録に残された地磁気、オーロラ、太陽黒点、日蝕などの記録の読解・分析が重要な手がかりとなります。本研究室では、理系・文系という従来の枠組みを超え、文字による記録が残されている過去 3000 年の太陽地球環境とその極限状態の復元および定量化を歴史文献に基づき定量的に明らかにすることを目指しています。

西南極氷床の融解イベントの検出

南極海の一部であるアムンゼン海に面している西南極氷床の縁辺は、現在の南極の中で最も氷河が減少しており、地球温暖化による大規模な氷床の融解が危惧されている地域です。日本、アメリカ、ヨーロッパ、ニュージーランド、中国、インド、韓国の研究者が参加した国際深海科学掘削計画 (IODP) 第 379 次航海では、「アムンゼン海における西南極氷床史 - アムンゼン海湾入域掘削記録による西南極氷床の温暖化応答性の検証」というテーマのもと、海底堆積物の掘削を行いました。本航海に参加し、堆積物に含まれている微化石の安定同位体の分析を進め、過去 500 万年間における西南極氷床の融解イベントの検出を目指しています。



アムンゼン海に浮かぶ冰山



伝藤原行成筆装飾経切



1872 年に岡崎で見られたオーロラのスケッチ
© 聖運寺

写真の説明: 左より、(1) 環境史学研究室を含む年代測定研究部の集合写真、(2) イラン・(3) オマーンにおける洞窟遺跡の発掘現場、(4) タール砂漠の調査 (バキスタン)、(5) カシミールの山岳地帯調査 (インド)、(6) ブレイク火山地帯の調査 (ベトナム)
Webページ: <https://www.nendai.nagoya-u.ac.jp/> (年代測定研究部)
<https://www.leis21.net> (北川個人)
連絡先: kitagawa.hiroyuki.b7@mail.nagoya-u.ac.jp (北川)
oda@nendai.nagoya-u.ac.jp (小田)
hisashi@nagoya-u.jp (早川)



ISEEの学生に聞いてみた!!

ISEE所属の学生に研究や生活のことについてアンケートしました！
ISEEで研究してみたい！と考えているみなさんのお役に立てれば幸いです！

ISEE学生企画チームとは？

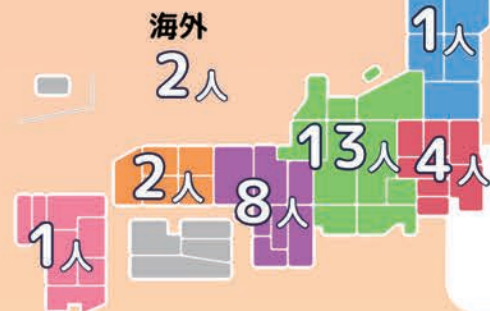
ISEE内の学生同士の交流を活発にすることを目的とした、研究所教育委員会公認の学生有志団体です。
交流会など学生同士が親睦を深めることのできるようなイベントを企画・開催しています。



編集 総合解析研究部 M2 谷口 英駿
年代測定研究部 M1 垣内田 滉

生活編

出身はどこ？



所属研究科は？

ISEEに所属している学生は125名！
各研究科の人数の内訳は右のグラフの通り
です！(2025年3月時点)
今回は、その内31名の方々にアンケート
に答えていただきました！



はじめに、みなさんの出身地を聞いてみました！
名古屋大学がある愛知県を含む中部地方が最も多かったですが、
日本列島の北から南まで(海外も！)さまざまな場所から来ている
ことが分かりました！



朝型？夜型？



3分の2が夜型と回答！
何時に寝ているか聞いたところ、夜1時に
寝るといふ人が最も多く、3時以降に寝る
人もいました！みなさん自分なりの生活ス
タイルを持っているようです。

趣味は何？

・映画鑑賞(4) ・推し活(3) ・散歩(3) ・筋トレ(3) ・音楽を聴く(3) ・旅行(2)
・サイクリング(2) ・ゲーム(2) ・野球観戦(2) ・カメラ(2) ・買い物
・ランニング ・登山 ・お茶 ・プログラミング ・ドラマ鑑賞 ・作曲
・レース観戦 ・料理 ・トランペット演奏 ・読書 ・ラジオ ・睡眠
・辛いものを食べる ・猫の動画を見る ・カラオケ ・競馬 ・ツーリング
・カフェ巡り ・ボルダリング

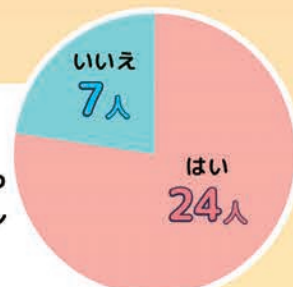
()内は人数

インドアからアウトドアまで、さまざまな趣味をみなさんお持ちでした！



バイトはしてる？

およそ8割の方がバイトをしていると回答！
どんなバイトをしているかも聞いたところ、
塾や飲食店でアルバイトをしている人が多か
ったです。大学で雇用されているアルバイトを
している人もいました！
研究や勉強もしながら、趣味やアルバイトの
時間もしっかりと確保しているようです！



※学生の学年：2025年3月現在

どんな研究をしてる？

理学研究科

・電波望遠鏡の観測データを用いた微小な太陽フレアの統計解析 ・地球上空を流れる電流が地表の送電系統に与える影響
・太陽フレアに関する数値シミュレーション研究 ・機械学習による加速器から生成された高エネルギー中間子の測定手法の開発
・短期太陽放射変動による地球大気の大気成分の動態変化及びその要因 ・二重偏波レーダーを用いた融解領域の時空間分布
・太陽の内部(対流層)を浮上する磁束管に関するシミュレーション研究 ・太陽風を観測するための次世代電波望遠鏡の開発
・惑星間空間シンチレーションを国内最大級の電波望遠鏡で観測し、低速太陽風の流源と加速機構の理解を目指しています etc...

工学研究科

・オメガバンドオーロラの解析 ・SuperDARNと呼ばれる電離圏を地上から観測する電波レーダーの性能改善研究
・人工衛星の観測データを分析すること ・脈動オーロラに見られる過暗化現象

環境学研究科

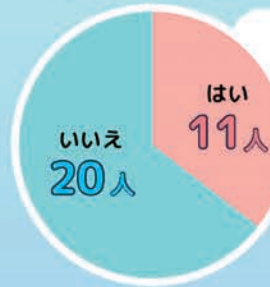
・雲解像モデルによる台風に伴う竜巻の高解像度再現実験 ・濃尾平野における降雪の研究 ・上層雲の放射効果
・Seeder-Feeder(上層からの雨滴が下層の雲粒を捉えて雨滴が大きくなり、より強い降水をもたらすもの)
・台風の予測改善のために、気象モデルと観測を組み合わせる手法を使ってどんなインパクトを与えるか研究しています
・北極域の水蒸気輸送の長期変動について研究しています ・台風から離れた場所で生じる大雨 ・大気エアロゾルの化学分析
・雨のもととなる水蒸気の起源を解析するモデルを使った、世界各国の降水量トレンドの解析(降水量が減少している原因の解析)
・孤立した積乱雲の一生を研究したり、大きな積乱雲の内部構造を気象レーダーの情報を用いて解析したり、しています etc...

オーロラや台風など地球で起こる現象から太陽のことまで、みなさん色々なテーマで研究されていました！

所属する研究室の魅力は？

・出身、年齢、国籍問わず様々な人たちと交流し、研究の議論ができること ・魅力的なテーマに取り組める環境があること
・学生が多く、それぞれの研究テーマも異なるため色々な観点から議論できること ・自分のペースで研究できること
・研究形式は自由、分野が違う学生同士に交流できる ・観測にいて実際に現象を目で見られる機会があること
・様々な実験グループが所属しているため幅広い研究の情報が手に入る ・施設がきれい ・学生が多く常に活気にあふれている
・教員と学生の距離が近く、研究に対して日頃から様々なフィードバックをいただける点 ・さまざまな分野を学べる etc...

学部・修士の時と同じ研究室？



研究室の魅力を聞いてみたところ、研究分野の豊富さを挙げている人が多かったです！ま
た、さまざまな人と交流できることを魅力に感じている人もいました！今は違う研究
室から来ている人が多いこともISEEの多様性を作り出しているのかもしれないね！

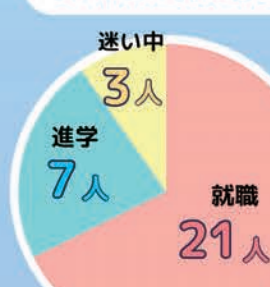
英語は好き？

論文を読んだり、学会などで海外の研究者と交流する際には
欠かせない英語！
英語が好きか聞いてみたところ、好き嫌いはおおよそ50:50！
みなさん苦労しているようです！



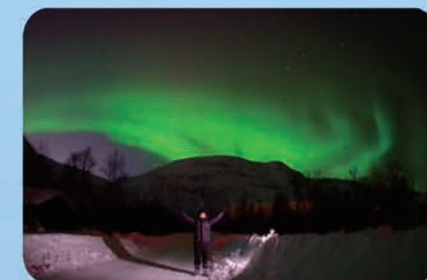
研究関連でどこかに行った？

研究室では、学会や観測などでいろいろな場所に出張
する機会があります！どこに行ったか聞いてみると、
北海道から沖縄まで津々浦々！さらには、韓国やイタ
リアなど海外に行っている方も！



卒業後の進路は？

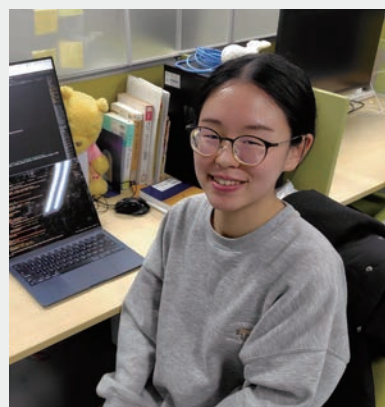
およそ7割が就職、2割が進学と回答！
また、就職すると答えた人のうち、就職先が今の研究内容と関係していないと
答えたのは6割と過半数を超えていました！新しい進路を見つける人や今の研
究をさらに深める人など多種多様でした！



©水野研究室

世界の舞台で活躍するために !!

研究者として成長できる環境



理学研究科 理学専攻 CR 研究室
博士前期課程 2 年 /
宇宙地球環境研究所宇宙線研究部

小林 春佳

私は宇宙線研究部に所属しています。宇宙線とは宇宙から地球に飛来する放射線で、陽子や原子核、ガンマ線、

ニュートリノなど様々な粒子が飛来しています。宇宙線研究部は暗黒物質探索やガンマ線観測など、宇宙線に関わる幅広い研究を行っています。

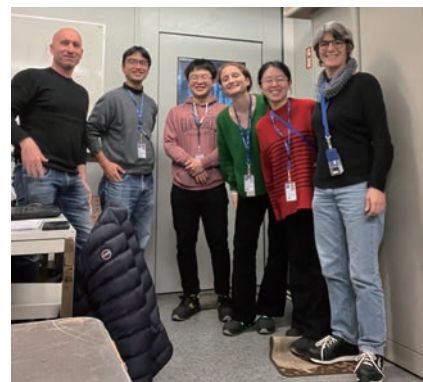
高エネルギーの陽子などの宇宙線は、地球大気に入射した際に発生する粒子シャワー現象（空気シャワー）を利用して観測されます。私は、空気シャワー中で起こる粒子同士の相互作用を理解するため、スイスの CERN にある世界最高エネルギーの粒子加速器である LHC (Large Hadron Collider) での粒子衝突実験の測定を行っています。普段は研究室で実験データの解析を行っています。私が修士で宇宙線研究部に入った時はプログラミング経験がほとんどなかったのですが、今はプログラムを自分で作成して解析を行っています。実験やその準備の際には CERN に行き、海外の



欧州原子核研究機構 (CERN)

共同研究者とともに協力してハードウェアの作業を進めました。

宇宙線研究部では、積極的に研究を行うことができる環境が整っています。国内外での研究会参加や学会発表の機会も多く、意見交流を通して自身の研究を見直し、発展させることができます。また、異なる研究分野の方との交流を通して多様な知見を得られ面白いです。ぜひ ISEE で一緒に研究しましょう！



研究を通して世界とつながる



工学研究科 電気工学専攻
宇宙電磁観測グループ
博士前期課程 1 年 /
宇宙地球環境研究所電磁気圏研究部

宇井 瞭介

私は学部生時代にはパワーエレクトロニクスという、電力変換回路に関する研究を行っていました。しかし、

幼いころから宇宙への憧れがあったため、大学院進学に合わせて現在の研究室に転向しました。私が所属する電磁気圏研究部では、オーロラのような地球を取り巻く電離圏や磁気圏の自然現象について、世界中に設置された観測機器や人工衛星を用いて、その発生メカニズムの解明に取り組んでいます。個人の研究テーマとしては、人工衛星のデータと地上の観測データを用いて、放射線帯と呼ばれる領域の電子と、地球上の雷活動の関連について研究しています。以前の研究室と比較し、国際的な結びつきが強いことがこの研



究所 (ISEE) の特徴だと感じます。工学部 (工学研究科) では、研究が大学一企業間など国内で完結することが多いように感じます。一方 ISEE では国内外問わず様々な大学、研究機関と協力し研究を行っています。このような環境で研究に取り組むことで世界各国の研究者とつながることができ、またフィールド観測や国際学会など、多くの海外出張の機会に恵まれています。実際に私も海外の研究者と協力して研究を進めています。皆さんも ISEE の研究を通して世界とつながってみませんか？



名古屋大学では自由闊達な学風の下、自発性を重視する教育実践によって、論理的思考力と想像力に富んだ勇気ある知識人を育てることを目標に教育を進めています。ここでは、宇宙地球環境研究所で教育を受け、研究を進めている学生及び卒業生の皆さんに自分の研究内容、夢、研究所の雰囲気、日頃の学生生活等について自由に語っていただきました。

雲・降水の研究と充実した研究環境



環境学研究科 地球環境科学専攻
気象学研究室
博士後期課程 2 年 /
宇宙地球環境研究所気象大気研究部

後藤 悠介

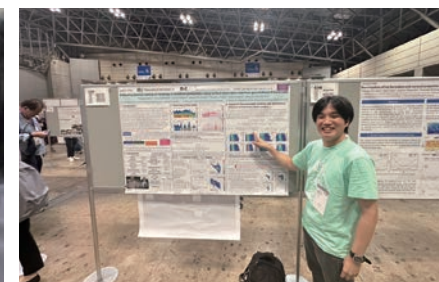
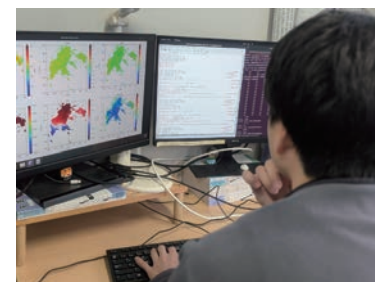
私は他大学より博士前期課程から ISEE 気象学研究室に入学し、その後博士後期課程に進学し、今に至ります。

私の所属する研究室では、数値モデルやレーダー、ゾンデと呼ばれる観測測器などを用いて、雲・降水に関する研究を行っています。

上空に存在する雨粒は、大きさの異なる雨粒同士が衝突した際に併合したり分裂したり、乾燥している空気の影響で蒸発したりします。このような様々な過程（雲微物理過程と言います）を経て、雨粒は時に地上に降ってきます。降水現象には雲微物理過程が深く関わっており、その雲微物理過程の結果を反映したものとして雨粒の大きさと数濃度の関係（雨滴粒径分布と言

います）があります。私はレーダーを用いて雨滴粒径分布の高度変化を推定し、かつその原因となる雲微物理過程の推定も行い、降水形成の理解の深化に貢献したいと考えています。

また、ISEE には学生の国際派遣支援もあり、私は 2024 年度に ISEE の支援を受けて海外での学会にてポスター発表をしました。世界各国の研究者らと議論をすることができ、自身の研究に活かすことができました。このような充実した環境も ISEE には整っています。宇宙地球環境に興味のある方は、ぜひ ISEE で研究をしましょう。



Life and Research at ISEE



工学研究科 電気工学専攻
宇宙電磁観測グループ
博士後期課程 1 年 /
宇宙地球環境研究所電磁気圏研究部

Junxian FU

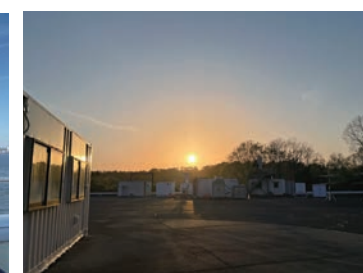
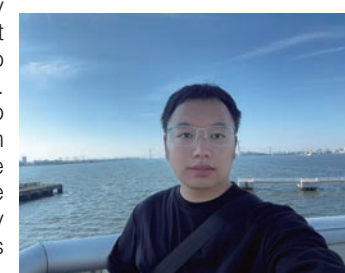
Stepping into the Institute for Space-Earth Environmental Research (ISEE) at Nagoya University as a Chinese international student marked the beginning of an extraordinary chapter in my academic and personal life, and I am honored to

join the Division for Ionospheric and Magnetospheric Research. Over the past year, I have immersed myself in cutting-edge research on the ionosphere, a field that aligns with my passion for understanding Earth's intricate systems. The institute's interdisciplinary approach, combining atmospheric science, geophysics, and space technology, has broadened my perspective and sharpened my analytical skills.

Beyond the academics, what truly enriched my experience here is the warmth of the ISEE community. The professors are patient and instructive, seeing every question as an opportunity to impart knowledge to the students. People who come from all over the world are both study partners and friends.

Additionally, the beautiful campus scenery, various activities at ISEE, and the opportunity to enjoy a variety of delicious foods have added unforgettable colors to my daily life and deepened my impression of ISEE.

It has been a year at ISEE, and the past days have been memorable and unforgettable. In the coming days, I will continue to study and explore ionosphere related issues in ISEE. At the same time, I will cherish every day in ISEE, communicate and cooperate with teachers and students, and grow together. I believe that studying and living at ISEE will enable me to grow further.



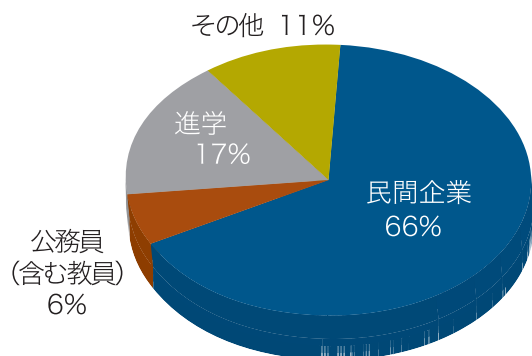
※学生の学年：2025 年 3 月現在



就職活動

【令和2年度～令和6年度】

博士前期課程修了生の進路



民間企業

Canon Medical Systems Corporation (CMSC) ●
Japan Advanced Semiconductor Manufacturing ●
KDDI(株) ● (2)
NEC ●
NTTコムウェア ●
NTT西日本 ●
PDエアロスペース(株) ●
Softbank(株) ●
TIS(株) ●
Western Digital Corporation ●
Yahoo! Japan ●
アビームコンサルティング(株) ●
イーテクノロジー(株) ●
エヌ・ティ・ティ・コムウェア(株) ●
エリクソン・ジャパン(株) ●
大阪ガス(株) ●
(株)GA technologies ●
(株)NTTドコモ ● ●
(株)アイシン ● (2)
(株)アイヴィス ●
(株)インターネットイニシアティブ ●
(株)インテック ●
(株)河北新報社 ●
(株)関電エネルギーソリューション ●
(株)気象工学研究所 ●
(株)クボタ ●
(株)ディープブルー ●
(株)デンソー ● ●
(株)ドコモCS東海 ●
(株)トヨタシステムズ ● ● (2) (2)
(株)豊田自動織機 ● (2)
(株)ニューフレアテクノロジー ●
(株)野村総合研究所 ●
(株)パナソニックシステムネットワークス開発研究所 ●
(株)日立製作所 ●
(株)ビッグツリーテクノロジー&コンサルティング ●
(株)みずほフィナンシャルグループ ● ●
(株)村田製作所 ●
(株)大和総研 ●
(株)ユーベック ●
(株)株式会社横浜DeNAベイスターズ ●
キャンノン電子(株) ●
小林製薬(株) ●
シャープ(株) ●
新日鉄住金ソリューションズ(株) ●
シンフォニアテクノロジー(株) ●
シンプレクス・ホールディングス(株) ●
スカパーJSAT(株) ● (2)

全日本空輸(株) ●
ソニー(株) ●
ソニーLSIデザイン(株) ●
中部電力 ●
中部電力ミライズ ● (2)
鉄道総研 ●
東邦ガス ●
トヨタ自動車(株) ● ●
名古屋テレビ放送(株) ●
日本アイ・ピー・エム(株) ●
日本食研ホールディングス(株) ●
日本生命保険相互会社 ●
日本電子計算(株) ●
日本電信電話(株) ●
パナソニックコネクスト(株) ● (2)
浜松ホトニクス(株) ●
フューチャー(株) ● (2)
北陸電力(株) ● ●
ボッシュ株式会社(株) ●
松井証券株式会社 ●
丸紅(株) ●
三菱重工業(株) ● (2)
三菱スペース・ソフトウェア(株) ●
三菱電機(株) ● (6) ●
三菱電機ソフトウェア(株) ●
村田機械(株) ●
ヤマハ発動機(株) ●
ローム(株) ●
その他 ●

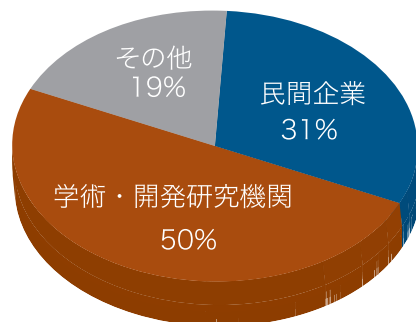
公務員 (含む 教員)

愛知県職員 (化学職) ●
気象庁 ● (4)
岐阜県庁 ●
静岡県生活科学検査センター ●
東京税関 ●
日本郵政(株) ●

進学

愛媛大学大学院理工学研究科 ●
名古屋大学
理学研究科博士課程 (後期課程) ● (12) ●
工学研究科博士課程 (後期課程) ● (3) ●
環境学研究科博士課程 (後期課程) ● (8) ●
宇宙地球環境研究所 (研究生) ●

博士後期課程修了生の進路



民間企業

(株)セック ●
(株)ニデック ●
(株)ブレインパッド ●
(株)豆蔵 ●
西日本電信電話(株) (NTT西日本) ●

学術・開発研究機関

沖縄科学技術大学院大学 ●
学振特別研究員 ●
名古屋大学宇宙地球環境研究所 ● ● ● (3)
バングラデシュ環境・森林・気候変動省 ●

その他

特許業務法人 明成国際特許事務所 ●
帰国後就職活動 ● (2)

● : 理学研究科
● : 工学研究科
● : 環境学研究科

その他

PwCあらた有限責任監査法人 ●
University of St Andrews ●
(一財)日本気象協会 ● (2)
(一財)リモート・センシング技術センター ●
海上保安庁 ●
核融合科学研究所 ●
学校法人純真女子学園純真女子高等学校 ●
(公財)日本気象協会 ●
国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構 ●
国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構 ●
ベトナム地球科学鉱物資源研究所 ●
帰国後就職活動 ● ● (3)

就職関連情報

キャリアサポートセンターについて

キャリアサポートセンターでは、就職活動に役立つ情報やインターンシップに関する情報を窓口やNU-NAVI(名大生に特化した就職情報サイト)にて提供し、年間を通じて本学学生の進路探索活動を支援しています。

また、就職活動に関するさまざまなイベント・セミナーを開催しています。就職活動を始める前に知っておきたい基礎知識や、ステップごとの具体的なアドバイスなど、就職活動に役立つ情報が満載です。

博士課程教育推進機構キャリア支援・教育部門(通称:キャリア教育室)とも連携し、博士課程の学生のキャリア支援を行っています。

就職相談員による個別就職相談(NU-NAVIから要予約)

キャリアサポートセンターの就職相談員が、就職・進路に関する個別相談や情報提供を行います。相談内容は、就職活動の進め方、自己分析の方法やエントリーシートの添削、模擬面接、将来のキャリア設計の相談など、多種多様に行っています。

窓口での提供コンテンツ

- ・就職関連書籍の閲覧・貸出
- ・先輩の就職活動体験記の閲覧(平成30年度まで)
- ・窓口での相談対応、ES添削(予約不要)
- ・OBOG名簿の閲覧(要学生証)
- ・職業適性診断システム「キャリア・インサイト」

開室時間: 月曜日～金曜日(祝日を除く) 8:30～17:15
場所: 学生支援棟1階

NU-NAVI 掲載コンテンツ

- ・求人検索
- ・学内イベント・ガイダンス予約
- ・インターンシップ情報
- ・就職相談員による個別就職相談予約
- ・動画配信(ガイダンス)
- ・来校企業情報
- ・OBOG名簿一覧
- ・就職活動体験記の閲覧(令和元年度以降)
- ・進路報告&就職活動体験記の登録

【問い合わせ先】

キャリアサポートセンター
TEL: 052-789-2176
E-mail: shien-career.evententry@mail.nagoya-u.ac.jp
キャリアサポートセンターHP:
<https://syusyoku.jimu.nagoya-u.ac.jp/>



NU-NAVI: <https://www2.kyujin-navi.com/sp510>

名古屋大学
キャリアサポートセンター



就活のすべてがこの中に!

実務に繋がった研究室生活



増倉 明寛

2023年3月 理学研究科 博士前期課程修了
(素粒子宇宙物理学専攻宇宙地球物理系/AM研究室)
所属: 宇宙航空研究開発機構 研究開発部門
第一研究ユニット

幼少期から宇宙や素粒子に興味を持ち、学部では物理学科で学びましたが、コロナ禍で社会の変化を経験し、今後は物理学を実問題に応用して社会に貢献したいという思いを持ちました。ISEEでは、物理学を活かして社会に貢献ができる研究が多く行われており、当時の考えと合致しました。特に興味を持ったAM研に大学院から入学し、大気微量分子のミリ波帯電波観測のための要素技術開発を研究テーマとしました。研究室生活の中で基礎力を養いつつも、共同研究やハワイでの国際学会参加など貴重な経験を積むことができました。

視野の広い人工衛星を使えば、大きな問題により貢献できると考え、修了後は宇宙航空研究開発機構(JAXA)に

入構しました。大学院時代は電波の観測に携わっていましたが、入構後は電波を利用する分野である「衛星通信」や「無線電力伝送」の研究に従事しています。大学院で培った知識やスキルは、現在の職場で直接活かされることはもちろん、共同研究や国際会議の経験は、JAXAでの研究プロジェクトを推進するにあたり大変助けになっています。

ISEEでは、様々な経験をしながら研究を進めることができ、大変充実した時間を過ごしました。自分の学んだ学問を活かして社会に貢献したいという思いがある方、研究を通じて様々な経験をしたい方には、ISEEは非常に良い選択肢かと思えます。



大 学 院 入 試

宇宙地球環境研究所で大学院生活を送るには

宇宙地球環境研究所では、理学研究科理学専攻物理学領域、工学研究科電気工学専攻、環境学研究科地球環境科学専攻（地球惑星科学系および大気水圏科学系）の大学院博士課程（前期課程・後期課程）教育を行っています。大学院に入学するためには、各研究科の入学試験を受験する必要がありますが、志望する研究室により受験する研究科が異なります。本パンフレットでは、受験する研究科ごとに研究内容の紹介ページを色分けしていますので、受験する際には間違えないようにしてください。

なお、各研究科・専攻の入試選抜の方法、日程等についての詳細な入試要項については、各研究科の入試関連ウェブサイトで確認するようにしてください。

理学研究科

—理学専攻物理学領域—

大学院理学研究科 理学専攻 物理学領域では、以下の要領で入試説明会を開きます。あわせて、志望する研究室を訪問し、スタッフと懇談する機会を設けます。なお、対面参加・オンライン参加によらず、参加には事前登録が必要です。参加登録等の情報は、入試関連ウェブサイトで公開しますので、随時確認してください。

◆理学専攻物理学領域研究室説明会

- ・全体説明会
日時：2025年5月24日（土） 13:00～
場所：名古屋大学東山キャンパス 坂田・平田ホール（理学南館）
＋オンライン（ZOOM）

- ・研究室別説明会
研究室別の説明会を全体説明会終了後に行います。
最大4研究室を訪問して説明を聞くことができます。

- ・物理学教室 大学院入学を目指す方へ__大学院入試
<https://www.phys.nagoya-u.ac.jp/entrance/index.html>



■大学院入試に関するお問合せ

〒464-8602 名古屋市千種区不老町
名古屋大学大学院理学研究科 教務学生係
(理学部C館1階)
TEL：052-789-2402/5756
E-mail：ri-dai@t.mail.nagoya-u.ac.jp
<https://www.sci.nagoya-u.ac.jp/admission/graduate/>



工学研究科

—電気工学専攻 宇宙電磁環境工学講座—

電気工学専攻では、博士前期課程および博士後期課程の大学院入試を実施します。

- ・工学研究科電気工学専攻、電子工学専攻、情報・通信工学専攻大学院受験生の方へ

名古屋大学大学院工学研究科 電気電子情報系事務室
TEL：052-789-3643
E-mail：daigakuin-info@nuuee.nagoya-u.ac.jp
http://www.nuuee.nagoya-u.ac.jp/g_admission/index.html



■大学院入試に関するお問合せ

〒464-8603 名古屋市千種区不老町
名古屋大学工学部・工学研究科 教務課入学試験係
(ES総合館3階)
TEL：052-789-3978
E-mail：eng-admission<AT>t.mail.nagoya-u.ac.jp
<https://www.engg.nagoya-u.ac.jp/prospective/index.html>



環境学研究科

—地球環境科学専攻 地球惑星科学系 地球史学講座—
—地球環境科学専攻 大気水圏科学系 地球水循環科学講座—

地球環境科学専攻では、大学院説明会、および大学院入試（前期課程・後期課程）を実施します。

※本年度の開催について必ず確認してください。

- ・環境学研究科地球環境科学専攻の大学院入試の目安が掲載されています。系・コースによって受験に制限が加えられている場合があるため、募集要項で詳細を必ず確認してください。
<http://ees.env.nagoya-u.ac.jp/exam.html>



■大学院入試に関するお問合せ

〒464-8601 名古屋市千種区不老町
名古屋大学大学院環境学研究科 大学院係
(環境総合館2階)
TEL：052-789-4590/4272
E-mail：env@t.mail.nagoya-u.ac.jp
<http://www.env.nagoya-u.ac.jp/admission/index.html>



学 生 支 援

授業料の納入と免除・猶予

授業料は、前期（4月～9月まで）及び後期（10月～翌年3月まで）の2期に分けて事前に登録した授業料振替口座から「口座振替」により納入いただきます（前期分は5月、後期分は11月）。

ただし、休学・退学等の場合は上記とは異なります。在学中に授業料の改訂が行われた場合には、改訂時から新たな授業料が適用されます。

授業料免除については、所属する研究科の情報を確認してください。入学科免除・徴収猶予については、申請資格、家計基準、学力基準に基づき選考し、予算の範囲内で入学料の免除が許可されます。徴収猶予は納入期限を延期するものであり、全額を納入する必要があります。

授業料の納入とその免除・猶予の詳細については、名古屋大学ウェブサイトで確認してください。

学術奨励賞・育志賞

大学院博士後期課程に在学する学生（原則として標準修業年限内に在学している学生に限る）で、人物・研究水準ともに特に優秀かつ、研究科長及び指導教員から推薦のあった者を対象に受賞者を決定し、表彰します。なお、学術奨励賞受賞者で日本学術振興会育志賞への推薦を希望し、研究科長が推薦した者は、育志賞に推薦されます。

受賞者数・奨励金（学業奨励金）

毎年度、受賞者数は10名以内で、受賞者には、賞状及び副賞として学業奨励金50万円が贈呈されます。

奨学金

日本学生支援機構（JASSO）の奨学金

日本学生支援機構（JASSO）は、国の育英奨学事業を行っている団体です。

JASSOの奨学金は、第一種奨学金（無利子）、第二種奨学金（有利子）がありますが、いずれも貸与であり、返還の義務があります。申請を希望する方は、学校が指定する配付時期に「奨学金案内」を配付場所で受け取り、家庭の経済状況や将来の返還の計画を考慮のうえ申し込んでください。なお、学部生を対象とした給付型奨学金もあります。

JASSO奨学金の詳細は、名古屋大学ウェブサイトや日本学生支援機構（JASSO）のウェブサイトをご覧ください。

民間奨学財団・地方公共団体の奨学金

民間企業が母体の財団法人などが募集する奨学金制度、または都道府県や市区町村などの地方公共団体などが募集する奨学金制度もあります。これらの奨学金には、大学を経由して応募するものと、奨学団体が直接募集するものがあります。また、奨学金の形態として、給付型と貸与型があり、応募するにあたって、部局指定・条件や資格などがあります。特に地方公共団体の奨学金は、出願資格を当該地域に在住する者の子弟とし、直接公募することが多いので、詳細は該当する自治体の奨学金関係のウェブサイトを確認するか、各自治体へ問合せをしてください。

本学では、募集依頼のあった団体のみウェブサイトへ掲載します。この他にも、各学部・研究科で、所属学生を対象に直接募集する場合がありますので、所属学部・研究科の掲示にも注意してください。募集などの時期や条件は各奨学団体によって種々異なり、基本的に通年募集がありますが、ほとんどが4～5月の間に集中していますので、ウェブサイトや各部局の掲示に注意し、締切に遅れないよう応募をしてください。

RA・フェローシップについて

宇宙地球環境研究所では、本研究所の教員を主指導教員に持つ博士後期課程の学生を対象に、リサーチアシスタント（RA）の募集を行っています。また、名古屋大学では、博士後期課程の学生を対象に「名古屋大学融合フロンティアフェローシップ事業」および「東海国立大学機構融合フロンティア次世代研究事業」として人材育成のための経済的支援を行っています。日本学術振興会特別研究員への応募への対応も行っています。

若手海外派遣プログラム

宇宙地球環境研究所では、大学院生・若手研究者が海外の研究機関に滞在して行う国際共同研究や国際会議での研究発表を支援するための、若手国際派遣支援プログラムを実施しています。

授業料納付・学生支援に関する本学ウェブサイトの掲載か所一覧

- 授業料
<https://www.nagoya-u.ac.jp/academics/campus-life/tuition/index.html>



- 経済支援（授業料等免除・奨学金）
<https://www.nagoya-u.ac.jp/academics/support/index.html>



- 博士課程教育推進機構
<https://dec.nagoya-u.ac.jp/>



博士論文・修士論文 一覧

2024 年度

修士論文一覧

■理学研究科 素粒子宇宙物理学専攻 宇宙地球物理系	
SS _E	全球測位衛星システム全電子数二次元観測による中緯度に到達するプラズマバブルの統計的研究
SS _E	サブストームオンセットに伴うオーロラ形態の時間発展とオンセット位置からの距離依存性に関する研究
SS _T	地磁気静穏期における日本の地磁気誘導電流（GIC）の起源に関する研究
SS _T	太陽対流層内の磁束管のねじれ量と上昇の関係に関する2次元シミュレーション研究
SS _T	円偏光アルフベン波の減衰不安定性に関する数値研究
SS _T	野辺山電波ヘリオグラフを用いた微小フレアの特徴に関する統計研究
SS _T	極域電離圏観測に向けた超熱的イオンエネルギー質量分析器の開発
SS _T	Magnetic Reconnection in Homologous Flares in Active Region AR12146
CR	暗電流測定を用いた半導体光電子増倍素子の長期信頼性の評価
CR	LHCf 実験における機械学習を用いた K_S^0 測定手法の開発
CR	全空乏化ピクセル検出器（AstroPix）のノイズの消費電力依存性とエネルギー閾値特性
CR	LHCf+ATLAS 共同解析による one pion exchange 事象の測定
CR	次世代暗黒物質探索実験 XLZD に向けた低ダークカウント SiPM の光検出効率測定
CR	紀元前 990 年頃における年輪の ^{14}C 測定とアイスコアの ^{10}Be 測定による太陽活動の調査
CR	次世代暗黒物質探索実験 XLZD のための密閉型キセノン検出器の開発
SW	次世代太陽風観測装置用のフェーズドアレイアンテナ系の開発
SW	次世代太陽風観測装置用ディジタルバックエンドの開発
SW	惑星間空間シンチレーション観測と Hinode 衛星観測による低速太陽風の流源および太陽風の加速機構の研究
SW	次世代太陽風観測装置用アナログ信号受信系の開発

■工学研究科 電気工学専攻	
電磁観測	ファブリ・ペロー干渉計による初めての波長 427.8 nm 窒素分子イオンオーロラの分光計測
電磁観測	ミリ波帯ヘテロダイン受信機の高感度化に向けた周波数可変導波管型バンドパスフィルタの開発
電磁観測	総合観測とモデリングに基づくサブストームに伴う侵入電場に対する中緯度電離圏応答の研究
電磁観測	大気微量分子観測用 140GHz 帯マルチプレクサの小型化に向けた超伝導平面集積回路設計
情報処理	オーロラ加速領域における電気二重層の計算機シミュレーションのための高精度手法の研究
情報処理	あらせ衛星観測データを用いた説明可能 AI による放射線帯変動過程の研究

■環境学研究科 地球環境科学専攻 大気水圏科学系 地球惑星科学系	
水圏系	偏波レーダシミュレータを用いた雲解像モデルの氷相微物理過程の再検討

水圏系	鉛直シア下で急発達する台風の構造変化
水圏系	寒気吹き出し時の濃尾平野における降雪の強化機構
水圏系	台風発達過程に対するドロップゾンデの同化インパクト
水圏系	降水セル内部における降水コアの時間発展と雲物理過程の観測的研究
水圏系	気象衛星から観測される台風発達期における対流バーストの特徴
水圏系	北極域周辺における大気水蒸気輸送の長期変動：その季節性と地域性
水圏系	陸起源越境水蒸気の変化が降水量に及ぼす影響の評価
水圏系	端成分混合解析によるレナ川河川水の成分分離
地惑系	Seasonal variations of Be-7 and Pb-210 in atmospheric aerosols and depositional flux during 2014–2024 at Toki, Japan
地惑系	Direct search for ultra-heavy dark matter using muscovite

博士論文一覧

■理学研究科 理学専攻 物理学領域／素粒子宇宙物理学専攻 宇宙地球物理系

2024 年度	
SS _T	Study of Magnetohydrodynamic Processes in Flaring Solar Active Regions using Data-Driven Numerical Simulations

2022 年度	
SS _E	長期間かつ世界的な全球測位衛星システム (GNSS) 観測に基づく磁気嵐時における電離圏不規則構造の全球分布の特徴

2021 年度	
SS _T	太陽フレア発生頻度分布の統計解析によるコロナ加熱機構に関する研究シミュレーション研究
CR	ドームふじアイスコアの ^{10}Be 及び ^{36}Cl の測定による 5480BCE 宇宙線イベントの原因調査
CR	Effects of diffractive dissociation on ultra-high energy cosmic rays and measurements of diffractive dissociation using ATLAS and LHCf detectors

2020 年度	
SS _T	磁気リコネクションの高速化機構に関する電磁流体力学シミュレーション研究

■工学研究科 電気工学専攻

2024 年度

電磁観測	Study of aurora, electromagnetic field, and plasma in the inner magnetosphere during substorms based on ground and satellite observations
情報処理	Improvement of Computational Speed and Accuracy in the Explicit Finite-Difference Time-Domain Method

■環境学研究科 地球環境科学専攻 大気水圏科学系 地球惑星科学系

2024 年度

水圏系	The Convective Evolution over Tropical Oceans with Focus on the Vertical Structure of Vertical Air Motion and Atmospheric Diabatic Heating
-----	--

2023 年度

水圏系	Responses of the lower-trophic level to monsoon and ENSO in the Gulf of Thailand ecosystem
-----	--

2022 年度

水圏系	孤立積乱雲内の降水コアと雷活動
水圏系	日本の北海道のサブマイクロメートル森林エアロゾルに含まれる低極性から高極性の有機物のキャラクタリゼーション：存在量・光吸収・蛍光
水圏系	アジアモンスーンに影響されるタイランド湾奥部における赤潮の衛星による研究
水圏系	波エネルギーの伝達経路に基づくインド洋の熱帯気候変動の考察



宇宙地球環境研究所 2024年度卒業・修了生(理学部・工学部、大学院理学研究科・工学研究科・環境学研究科)

受賞 一覧



日本地球惑星科学連合 2024 年大会

学生優秀発表賞

「SUSANOO-CME におけるスフェロマクの初期パラメータによる CME の伝播および地球到達時間の特性評価」
磯貝拓史：理学研究科理学専攻
2024 年度博士後期課程 1 年／SW
2024 年 6 月 1 日



日本地球惑星科学連合 2024 年大会

学生優秀発表賞

「惑星間空間シンチレーション観測・Hinode/EIS 観測および PFSS モデルから得られた plasma-upflow と低速太陽風の関係」
森島啓太：理学研究科理学専攻
2024 年度博士前期課程 2 年／SW
2024 年 6 月 1 日



2024 年度日本水文科学会学術大会優秀

発表賞

「北極域における大気水蒸気輸送の経年変動：その季節性と地域性の考察」
設楽真央：環境学研究科地球環境科学専攻
2024 年度博士前期課程 2 年／水文気候学
2024 年 10 月 28 日



日本気象学会 2024 年度秋季大会松野賞

「台風の眼内部のドロップゾンデ同化による内部構造の再現性改善」
田村望海：環境学研究科地球環境科学専攻
2024 年度博士前期課程 2 年／気象学
2024 年 12 月 17 日



日本地球惑星科学連合 2024 年大会

学生優秀発表賞

「陽的時間領域有限差分法のクーラン条件の緩和および数値誤差の低減」
関戸晴宇：工学研究科電気工学専攻
2024 年度博士後期課程 1 年／情報処理
2024 年 6 月 1 日



Gold Student Poster Award

(ISSS-15/IPELS-16)

“Relaxation of the Courant Condition and Reduction of Numerical Errors in the Explicit Finite-Difference Time-Domain Method for Plasma Kinetic Simulations”
関戸晴宇：工学研究科電気工学専攻
2024 年度博士後期課程 1 年／情報処理
2024 年 8 月 7 日



日本気象学会 2024 年度秋季大会松野賞

「地上 X 帯レーダの鉛直観測を利用した雨滴粒径分布の推定」
後藤悠介：環境学研究科地球環境科学専攻
2024 年度博士後期課程 2 年／気象学
2024 年 12 月 17 日

研究室と主担当教員一覧

● 理学研究科

大気圏環境変動研究室 (AM)

教授 水野 亮
准教授 長濱 智生

宇宙空間物理学観測研究室 (SS_E)

教授 平原 聖文
准教授 野澤 悟徳
講師 大山 伸一郎

太陽宇宙環境物理学研究室 (SS_T)

教授 堀田 英之
准教授 増田 智
助教 家田 章正

宇宙線物理学研究室 (CR)

教授 田島 宏康
准教授 風間 慎吾*
*素粒子宇宙起源研究所 所属
准教授 三宅 芙沙
講師 奥村 暁
助教 毛受 弘彰

太陽圏プラズマ物理学研究室 (SW)

教授 岩井 一正
助教 藤木 謙一

● 工学研究科

宇宙電磁観測グループ

教授 塩川 和夫
准教授 西谷 望
准教授 大塚 雄一

宇宙情報処理グループ

教授 三好 由純
准教授 飯島 陽久

● 環境学研究科

気象学研究室

教授 坪木 和久
准教授 篠田 太郎

雲降水科学研究室

教授 高橋 暢宏
准教授 増永 浩彦

大気化学研究室

教授 持田 陸宏
助教 大畑 祥

水文気候学研究室

教授 檜山 哲哉
准教授 栗田 直幸
講師 藤波 初木

海洋学研究室

教授 相木 秀則
助教 三野 義尚

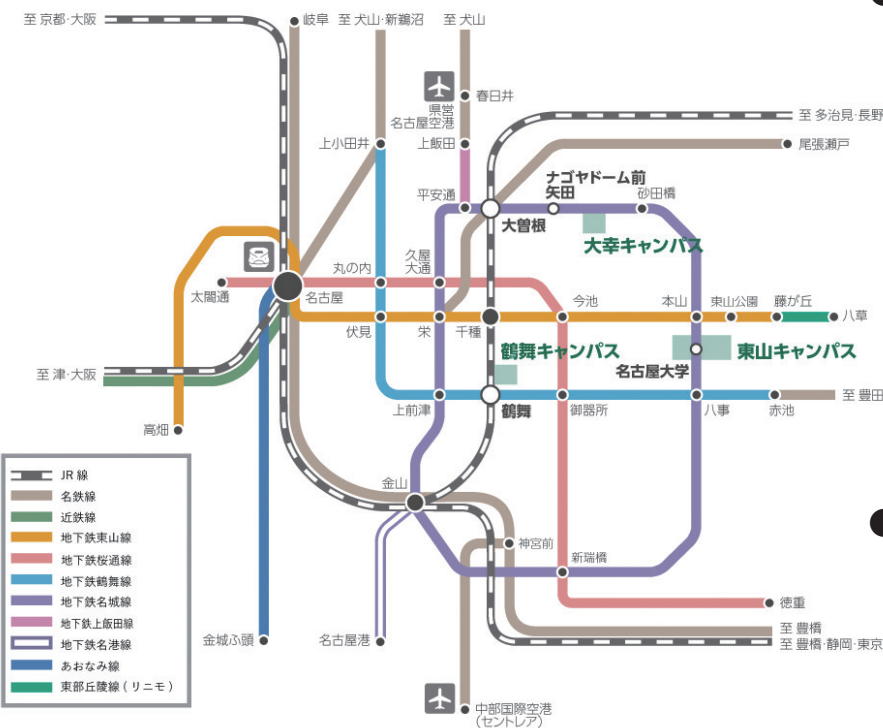
地球年代学研究室

教授 南 雅代
准教授 加藤 丈典

環境史学研究室

教授 北川 浩之
助教 小田 寛貴
助教 早川 尚志

名古屋大学 東山キャンパスへの交通案内



● 鉄 道

JR 名古屋駅・名鉄名古屋駅・近鉄名古屋駅からの場合

地下鉄東山線藤が丘方面行きに乗りし、本山駅で地下鉄名城線右回りに乗り換え、名古屋大学駅下車。所要時間約 30 分（乗換含）

地下鉄東山公園駅から徒歩 15 分

JR 金山駅・名鉄金山駅からの場合

地下鉄名城線左回りに乗りし、名古屋大学駅下車。所要時間 25 分

● 航空機

中部国際空港を利用

空港から名鉄特急に乗りし、名古屋駅または金山駅で下車、その後地下鉄に乗り換え（上記参照）又は、空港バスにて栄または名古屋駅に出て、地下鉄に乗り換え。

名古屋大学 東山キャンパス

